

2008年3月第22号

人環フォーラム NO.22

HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM

インタビュー：日本は地震の活動期に入ったか

尾池和夫 聞き手 高橋義人

特集：アジアの諸相

杉山雅人／木村 崇／岡 真理／小倉紀蔵／松田 清



京都大学大学院人間・環境学研究科

『人環フォーラム』の趣旨

21世紀における人類の生存は、現在直面している地球をとりまく環境の危機をどのように乗り越え、地球上の多様な諸民族の持続的な共存の道をどのように見いだしてゆくことができるかにかかっている、といえましょう。

「自然と人間との共生」という理念のもとに平成3年に設立された京都大学大学院人間・環境学研究科(略称「人環」)は、こうした21世紀における人間と環境との新しいかわりを模索してゆくため、『人環フォーラム』を発刊することになりました。本誌では、人間と環境の相互関係にふれる第一線の研究のうえに立って、精神的な豊かさをもった広い視野から、21世紀における人類の課題を問いつづけてゆきたいと考えています。



◎ 目次——人環フォーラム22——

巻頭言	1
虚学よ、おまえもか！	池田浩士
インタビュー	2
日本は地震の活動期に入ったか	尾池和夫 聞き手 高橋義人
特集：アジアの諸相	
東北アジアの水事情／杉山雅人	14
初めてロシア人が見た日本人の姿／木村 崇	20
パレスチナ問題における「アジア」／岡 真理	24
日韓関係における「文化」の問題／小倉紀蔵	28
江戸の万国人物図／松田 清	32
リレー連載：環境を考える	
琵琶湖に生育する海浜植物と保護／瀬戸口浩彰	36
サイエンティストの眼	
水槽の中のマグマ溜まり／金子克哉	42
知の息吹	
新たな言語研究の方法論とその実践—コーパス基盤の統計的アプローチと認知言語学のパラダイム／李 在鎭	44
社会を斬る	
政治の弁証—公共政策研究における政治研究の不可欠性／足立幸男	46
世界の大学	
アメリカ大学院事情と、その研究、教育、人事／河原大輔	50
フロンティア	
組織における人間の自由—川上俊彦研究序説／松本郁子	52
ウツボカズラの進化をさぐる—植物の種多様性形成／倉田薫子	53
京博便り	
「狩野永徳」展を終えて／山本英男	54
世界の街角	
サチーレー「ヴェネチア共和国の庭」で無声映画を／今井隆介	56
フィールド便り	
現代オセアニアを生きる芸術／渡辺 文	58
書評	
西村 稔『福澤諭吉—国家理性と文明の道徳』／嘉戸一将	60
米山俊直『「日本」とはなにか 文明の時間と文化の時間』／末原達郎	61
河崎 靖『ドイツ語学への誘い』／吉村淳一	62
野島直子『ラカンで読む寺山修司の世界』／坂部 恵	63
人環図書	64
高崎金久編著『常微分方程式』	
田中雅一・川橋範子編著『ジェンダーで学ぶ宗教学』	
片田珠美著『やめたくてもやめられない—依存症の時代』	
西山良平・藤田勝也編著『平安京の住まい』	
瓦版	65
コラム	
「お国の食べ物」ペリメニ(シベリア風)の作り方／シャシニナ・オルガ	45

研究科ホームページ

<http://www.h.kyoto-u.ac.jp/jinkan/index.html>

『人環フォーラム』ホームページ

http://www.adm.kyoto-u.ac.jp/jinkan/jinkan_forum/index.html

虚学よ、おまえもか！

池田浩士

HIROSHI IKEDA

【京都精華大学教授】



私のごく親しい友人Aが、必要あって、病院で肺部のX線直接撮影をしてもらった。診察室に呼ばれると、現像されたばかりのフィルムを睨んで、年若い女医が深刻な顔をしている。やれやれ、ついに肺ガンか、と思いつきながら坐ると、「肺はいたって健康です。しかし、ほら、肺の撮影ではこれほど写らない肝臓が、大きく上までせり出して写っています。あなた、お酒、飲むでしょ！これは深刻な肝臓肥大。肝臓ガンの疑いが濃厚です」というのである。Aが声を失っているところへ、年配の医師が入ってきて、女医の言葉を耳にし、フィルムとAの顔とを見比べていたが、くると振り向くや、「何言うてるのや」と女医をたしなめた。「この患者さんの顔色見たら、肝臓が悪いか悪うないか、一目でわかるやろ。このひとは、肝臓が立派なだけや。」

近ごろの若い医者は、機械のデータにばかり頼って、肝心の患者を見る目を失っている。実学偏重の功利主義・業績主義のむくいですな、とその老医師はAを相手にひとしきり嘆いたのである。

かつて福澤諭吉によって称揚された「実学」、つまり実用に役立つ学問分野の、代表格たる医学が体现する現状に立ち会ってしまったAは、いまこそ本気で福澤諭吉の実学主義を批判し、福澤が斥けたその対極、実生活の役に立たぬ「虚学」の復権をはからねばならぬ、と決意した。ところが、文献をあこれ読み漁っているうちに、Aは思いがけない事実に出会ったのである。当今の福澤研究のほとんどが、岩波書店版『福澤諭吉全集』全三二巻を典拠にしているのだ。だが、自分の著作が読者にどう読まれるか、どう読まれるべきかについてきわめて意識的だった福澤諭吉は、たとえば、『学問のすゝめ』（のちに「初編」とされる一冊）を変体仮名も含む平仮名まじり文で木版印行する一方、同

書の二編以下とはほぼ並行して執筆刊行された『文明論之概略』全六巻は、カタカナまじりの楷書体で板刻させた。前者が初学者を対象とした著述だったのに対して、後者は最大の敵である儒学者や漢学者を説伏することが目的の著作だったからである。現在から見れば行書体や変体仮名よりも平易と思われるがちな楷書体漢字やカタカナのほうが、より「学識」ある読者を対象としていたのだ。どちらも同じ明朝体活字の岩波版全集からは、福澤研究にとって決定的に重要な、実践的思想家福澤とその読者との関係、福澤思想の営みの相互主体たちの、緊張と生気と危険とにみちた関係は、読み取りようもない。

もっとも戯画的な実例は、『啓蒙手習の文』の場合である。平仮名から順を追って次第に難しい文字を習いながら、地球上の諸地域の現況と諸民族の平等を考えるとところまで読者を導いていく、この真の意味での啓蒙書、初期福澤の感動的な労作は、上下二冊の全文が、門下生の書家、内田晉齋のみごとな筆致を木版に刻んで上梓された。そういう字体を、福澤は読者に学んでほしかったのである。ところが、岩波全集版の、たとえば「ひらがな」の章には、いろいろの文字がただの活字となつて無意味に並んでいる。この形骸から、著者の思想が、ましてやそれを撰取する読者たちの姿が、見えるはずもないだろう。

福澤研究に限らない、とAは言う。生きた人間への情熱を欠いたまま、機械データや形骸的資料に寄りかかり、全集どころかその複写を典拠とさえしかねない学風は、福澤が蔑んだ虚学の全領域に蔓延している。だが、虚学が実学に抗して真の生命を獲得するためには、これとは正反対のオタク精神、原点と根底とを求めて執拗に遡及する偏執狂的「惑溺」をこそ、虚学は自己の本分とすべきではなからうか。

インタビュー

尾池和夫

Kazuo OIKE



日本は地震の活動期に入ったか

●聞き手

高橋義人

Yoshio TAKAHASHI



阪神大震災や中越地震の後、日本は地震の活動期に入ったと耳にすることが多くなりました。今日は、地震研究の大家であり、以前から京都大地震の可能性について絶えず語ってこられた尾池和夫先生に、地震研究を始められた切っ掛け、地震研究の面白さ、これまでの研究生活のなかで思い出に残る出来事、日本が地震の活動期に入ったか否か、地震学者にとっての時間のスケール、地震によって培われた日本人のメンタリティ等、興味深いお話を色々うかがうことができました。

●尾池和夫（おいけ かずお）

京都大学総長。一九四〇年、東京生まれ。京都大学理学部地球物理学科卒業。同防災研究所助手、助教授を経て、京都大学理学部教授。二〇〇三年より現職。理学博士。専門は地球物理学。地震学会委員長、日本学術会議地震学研究連絡委員会委員長、京都府、京都市、大阪府、大阪市活断層調査委員会委員長などを歴任。「氷室」同人、俳人協会会員。『中国の地震予知』（日本放送出版協会、一九七八年）、『地震発生のしくみと予知』（古今書院、一九八九年）、『日本地震列島』（朝日新聞社、一九九二年）、『俳景——洛中洛外・地球科学と俳句の風景』（宝塚出版、一九九九年）など著作多数。近著に『新版活動期に入った地震列島』（岩波書店、二〇〇七年）、『俳景（三） 洛中洛外・地球科学と俳句の風景』（宝塚出版、二〇〇七年）。

●高橋 義人（たかはし よしお）

京都大学大学院人間・環境学研究科教授。一九四五年、栃木県生まれ。慶應義塾大学助手、京都大学教養部助教授を経て、現職。文学博士。専門はドイツ文学・思想。主著に『形態と象徴』（岩波書店、一九八八年）、『ドイツ人のこころ』（岩波新書、一九九三年）、『魔女とヨーロッパ』（岩波書店、一九九五年）、『グリム童話の世界』（岩波新書、二〇〇六年）などがある。

あの頃の京大理学部

高橋 総長としてご多忙な毎日を送っておられるのに、時間を割いてくださり、ありがとうございます。先生のお名前が学問の世界だけでなく一般社会でも知られるようになったのは、一九九五年の阪神大震災のときからだと思いますが、先生はどのような切っ掛けで地震研究の道に進まれたのでしょうか。

尾池 それは、じつはあまりアカデミックなものではないんです。学生にとつての京大理学部の仕組みはご存知ですか。

高橋 いいえ。

尾池 これはけっこう有名な話なんです。京大の理学部には登録もなにもない。どの種類の講義を何単位とらなければならぬ、というような義務があるだけで、とにかくいろんな講義を聴いてみて、自由にカリキュラムを選んでいけばいいんです。この前、あるシンポジウムで茂木健一郎さんが「京都大学は登録制のない驚天動地の

大学です」と言っておられましたよ。他の大学の人からすれば驚くべきことなんですね。

高橋 まさしく自由の校風ですね。

尾池 そうなんです。京大は、そういうやり方をずっとやっているんですから、一回生、二回生の時は、学生が自分の好きな講義を自由に受けに行く。そもそもこの何回生という呼び方が、カリキュラムの自由さに対応しているのです。

よくが理学部に入ったのは、実験物理をやりたいからでした。高校生の時には、核融合について勉強しようと思っていたんです。しかし京大に入ってみると、誰も彼もがその分野をやりたいがっている。それで、あまりみんながやることをやっても仕方がないな、と思うようになり、実験物理学に興味を持てなくなっていました。もちろん、物理学に対する興味は、失わなかったですけどね。

高橋 湯川秀樹先生がまだおられた時代ですね。

尾池 そうです。よくも湯川先生の講義を聴きました。最初の講義の出だしをよく覚えています。湯川先生は、教室の前でトボトボ歩きながら「浦島太郎の話というのは物理学的に成り立つ話なのかどうか」と話を始められた。

高橋 へーえ！

尾池 あれは、浦島太郎が竜宮城へ行って、帰って来たら時間がすごく経っていた、という話でしょう。それは、相対論からするとあり得る話なんだ、とおっしゃるんです。光の速さで進むと時間が進まなくなる。時計の進み方が非常に遅くなります。帰って来た浦島太郎はお爺さんになるわけですが、それは「帰って来る」という動作が大変な作用をするからです。ものすごい速度で進んでいるときには、時計は進まない。しかし、逆に帰って来ようとする、今度は反対の方向に加速しなければならぬ。その際に、時間を一挙に取り戻すことになるんだ、と。そんな話を延々と講義されていたね。

高橋 テレビでしている「おもしろ学問人生」が取り上げたくなるようなお話ですね。

尾池 もう一つよく覚えていたのは、田村松平先生の講義です。先生の講義はとても難しかった。期末試験を受けに行くと、その問題も難しい。一題しかないんですが、どう考えても解けないんです。

だから後になって先生のところへ質問しに行きました。そうすると先生は「ああ、あの問題か、あれは何年も出しているけど、まだ誰も解いとらん」と言うんです（笑）。そんな先生でした。単位はもらいましたけどね。

高橋 それもまたいいお話ですね。

「生物物理学教室」創設運動

尾池 そんな講義を一・二回生の教養の講義で受けました。そして三回生になるときに、どの学科に進むのか決めなければいけなくなる。ぼくたちの頃は、教室が一〇くらいありました。物理学第一教室、第二教室だとか、数学、化学、植物、動物、地球物理、地質学、鉱物学といった教室があった。ただ、生物物理学の教室はなかったんです。

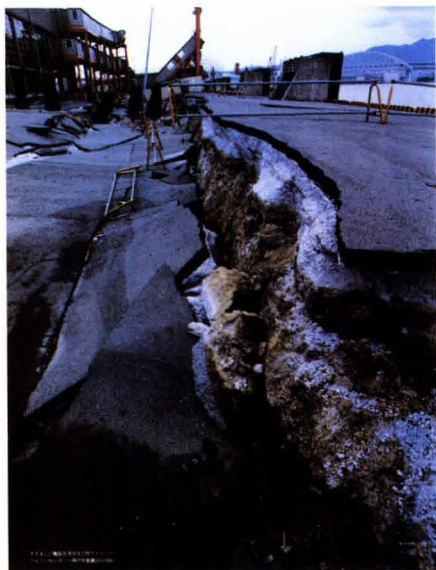
高橋 今では信じられないような話ですね。

尾池 そうです。当時でも生物物理学は、これからの時代の学問としてもものすごく大事なものだ、と言われていました。ぼくのクラスメイトには、後にノーベル賞をとることになった利根川進さん^③がいましたし、利根川君が尊敬していた渡辺格先生^④もいらした。だから、生物物理学に関するいろんな議論をしていたんです。それなのに、生物物理学の教室はない。

そこである日、ぼくたちは、「生物物理学教室を創ってほしい」という申し入れ書を書いて、理学部長のところに持って行ったんです。当時の理学部長は北村四郎^②という先生でしたが、その先生が「二回生の学生が要求してきたんだから、創ってみようやないか」と言ってくれた。偉い人だなあと思いましたね。それで植物学教室のなかに、生物物理学学科が、仮にですが創られることになったわけですね。

高橋 いいお話ですね。先生と似ていらつしやるじゃないですか。

尾池 ところが、せっかく生物物理学



六甲アイランド・フェリセンター
（『阪神大震災全記録』、神戸新聞社、1995）



湯川博士像
（基礎物理研究所前）

（1）湯川秀樹（一九〇七—一九八二）。京都大学・大阪大学名誉教授。理学博士。理論物理学。京都市名誉市民。従二位勲一等。中間子論の提唱などで原子核・素粒子物理学の発展に大きな功績をあげ、一九四九年、日本人として初めてノーベル賞を受賞。

（2）田村松平（一九〇四—一九九四）。京都大学名誉教授。京都大学理学部物理学科卒業。理論物理学専攻。著書に「ブランク」（弘文堂、一九五〇年）ほか。訳書にマルクス・ワイールツ『力学の発展史』（みすず書房、一九七七年）ほか。

（3）利根川進（一九三九—）。マサチューセッツ工科大学教授。生物学者。京都大学理学部化学科卒業。京都大学大学院理学研究科に進学。渡辺格の薦めでカリフォルニア大学サンディエゴ校へ留学。同校博士課程修了。

一九八七年、「遺伝子工学的手法による抗体生成に関する

科を創ってもらったんだけど、そんなふうには創ってほしいという運動をやった当のぼくは、いよいよ教室を選ぶ段階で、そこを第一志望にしなかったんです。

高橋 それはまたどうしてですか。

尾池 当時は、希望を出す時期になると、どの学科に何人の希望がある、ということが毎日張り出される。ぼくは毎日その掲示を見ていたんですが、そうしたら、どうやら地球物理学科には誰も申し込んでいないということが分かった。それで「誰もやらないことをやってやろう」と思って、地球物理学科を第一志望にしたんです。

高橋 一か八かですね。

尾池 いまよく「私は無口な人間で」なんて言うけどみんなが笑うんだけど（笑）、ぼくはもともと人と喋るのは好きではないし、家にこもって一人で本を読んでいるほうが好きなんです。いまは仕事上、無理に喋っているだけで、だいたいは無口なほうです。そういうこともあって、あまり人が希望しないところがいいなと思った。

それで三回生になると、いろんな分野の課題演習をやり、四回生になるとさらに絞り込まなければいけない。今度は、どの研究室に所属して、どんな卒業論文を書くのか、それを選ばなければならなくなりました。

ちょうどその頃は、南極観測が始まっていて、大変なブームになっていた。オーロラが話題になり、地球電磁気学というのが注目されるようになりました。そうすると、やっぱりみんなが地球物理学のなかでも地球電磁気学をやりたいがるわけです。それでまた三回生のときと同じことが起きる。

入る研究室を決める時期になってからは、しばらくの間、どの講座にどのくらいの人かが申し込むのか、毎日それを見ていた。そうしたら今度は、誰も地震学を希望していないということが分かったんです。それで、「じゃあぼくは誰もいないところへいこう」ということにした。そういう経緯でぼくは、地殻物理学講座というところへ入ったんです。

高橋 意外なお話ですね。人生って、けっこう偶然で決まるんですね。

地震学に入る

尾池 ぼくはもともと「地球」にもそれなりに興味がありました。理学部には、地球を研究対象にする学問としては他に地質学がありました。しかし地質学は、「質」を対象としますからケミストリーをやらなければならない。ぼくは化学が苦手ですね。構造を覚えたり、化学の妙な式を覚えたりするのが嫌で、結局、化学の単位を落とすことになった。

実験は好きだったから、化学の実験には出たんですよ。そこではまず無機物質の入った水をもろう。それで、その水のなかにどんな物質がどれくらい含まれているのかを分析して、レポートを書いていと言われた。でも、いくらやっても、含まれている物質が出てこないんですよ、なんにも。だからレポートには、「ぼくのもらった水はただの水でした」なんて書いて提出した。そうしたら零点がついて返ってきました（笑）。

高橋 零点になっても仕方ない気がしますけど（笑）。

尾池 地震というのは、大地が揺れる物理現象ですが、どうして大地が揺れるのかということにはぼくは興味があった。だから、三回生になるまでに講義を聴いて、実習でもいろんなことをやりました。しかし、地震がどうしたら起こるのかという、その肝腎の仕組みについては結局よく分からなかったんです。講義では、妙なモデルばかりが出てきて、それを説明されるんですが、よく分からない。ただ「よく分かっているんだな」ということは、よく分かりました。それで逆に面白いと思うようになった。他にやる人もいないもんで、学問としてやり始める切っ掛けでした。

高橋 分かっていることを明らかにできたら学問の醍醐味がありますが、しかし大変ですね。

卒業後の進路

尾池 卒業論文は、紀伊半島に起こる地震をテーマにしました。その頃には、どれくらいの大きさの地震がどこに起こるのか、ということぐらひは分かっていたから、調べてみると、紀伊半島では、

免疫グロブリンの構造解明により、ノーベル生理学・医学賞受賞。

(4) 渡辺格（一九一六—二〇〇七）。慶応義塾大学名誉教授。分子生物学者。東京帝国大学理学部化学科卒業。東京大学理学部生物化学科教授、京都大学ウィルス研究所教授を経て、慶応義塾大学医学部教授（分子生物学研究室）。一九七八年、日本分子生物学会を設立し、初代会長に就任。

著書に「ライフサイエンスと人間」（日本経済新聞社、一九七四年）、「人間の終焉—分子生物学者のことあげ」（朝日出版社、一九七六年）、「新しい人間観と生命科学」（講談社学術文庫、一九八九年）、「物質文明から生命文明へ」（同文書院、一九九〇年）ほか。

(5) 北村四郎（一九〇六—二〇〇二）。京都大学名誉教授。植物分類学者。キク科を中心とする植物分類学を確立。日本・中国・ヒマラヤの植物研究に顕著な業績をあげる。著書に「北村四郎選集」（保育社、一九八二—一九九三年）。

少し深いところで地震が起こっている。深いところで起こっている地震は、どういう波を出しているのか。そういう記録を集めて分析し、卒業論文を書いたんです。指導していただいたのは三雲健先生でした。

その論文を書くに当たっては、それまでにあったモデルや計算の仕方でも分析したんですが、どうしても満足できない。全然納得できなかったんです。だから論文にも「納得できない」と書いて提出しました。しかし、それがもとで病み付きになって、いったい地震はどうやって起こるのか、そういうことを研究したい、と思うようになったんです。そこで、大学院を受けようと決心して申し込みをしました。

卒論指導は三雲先生だったんですが、学部時代の受け持ちの教授は西村英一さんという先生でした。その西村先生という人が面白い人ですね。いよいよ明日が大学院の試験だという日に、私は先生に呼び出された。先生は私に「鳥取で大事な観測を始めるから、お前、明日から下見に行ってください」と言うんです。私はもちろん「いや、明日は大学院の入学試験がありますので、行くことはできません」と言いました。それなのに先生は、「何をつまらんことを言っているんだ、急いでいるんだから、とにかく行ってこい」と言っただけ、私も取り合ってくれません。私も、「そんなことを言われても、試験を受けないと」と言い張って、しばらくやりとりが続いたんです。そうしたら西村先生は、「なら助手になればええやろ」と言いました。よし、それです。

高橋 今じゃ信じられないような話ですね。

尾池 今であれば「助教にしてやる」なんて言われれば、みんな大喜びでしょう。しかし当時は、助手なんかになったら、先生の手伝いばかりやらされて、碌なことはないと思われていました。勉強したいから大学院に行きたい、入試を休むわけにはいかない。そう思って、その後もだいたい先生と論争しました。だけど、結局巧みに説得されて、とうとう押し切られてしまったんです。

それで仕方なく鳥取に観測の準備に行きました。鳥取に行ったのは、小さな地震を測るためです。地震学は実験科学ですから、その小さな地面の揺れを地震計で記録して分析しなければならぬ。それ以前には、まだ地震計がそんなに発達していなくて、小さな地震

をキャッチできるほど高感度の地震計はなかったんですが、それを東大の先生が工夫して作った。しかし小さな地震を観測するために、ものすごく静かな場所が必要になります。それを置く場所を探してこい。そう言われたんです。幸か不幸か、それが、ぼくが仕事を始める切っ掛けになりました。

高橋 偶然が先生を大学者にしたんですね。

世界初の「微小地震」観測

尾池 その年の四月、ぼくは京都大学防災研究所の助手になりました。すると、「鳥取に新しい観測所を作るから、お前、行け」と言われて、また鳥取に行くことになる。鳥取の市内に市所有の墓地があつて、墓地なら静かだろうということで、まずそこに本拠地をつくりました。さらに中国地方東部の何ヶ所かに地震計を置いた。そうしてやったのが、マグニチュード一とかゼロといった、ごく小さな地震を測る「微小地震観測」というものです。当時そんな小さな地震を測るなんてことは、世界中の他の誰もやっていなかったから、ぼくたちがやったのが世界で最初の微小地震観測でした。それがぼくの仕事の出発点になったんです。

微小地震観測を行うには地震計の感度を上げなければなりません。それには中高校時代の趣味が役に立ちました。ぼくは高知の土佐中高校の出身ですが、その頃からエレクトロニクスが好きで、それを趣味にしていた。音楽も好きで、オーディオマニアでもありましたから、LPレコードを聴くために、ハンダ付けをしたり、アンプを作ったり、ステレオを組み立てたりしていたんです。

高橋 私もオーディオマニアでしたが、アンプもステレオも作れませんでしたね。

尾池 ぼくはオーディオ装置を作るために、一所懸命バイトして、あるとき、LPレコードのターンテーブルを回すためのモーターを注文しに行った。すると店の人が、「これは、高知で二台目や」と

岩波科学ライブラリー 138

新版 活動期に入った 地震列島

尾池和夫



一〇〇年周期で繰り返す「南海トラフ」の活動期
二〇一〇年X月
M8を超える巨大地震が
西日本を襲う？
なぜ日本には地震が多いのか
活動期に入った
活動期とは？
急激な地殻変動は
どんな対策が必要か

活動期に入った地震列島

(6) 三雲健(一九二九—)
京都大学名誉教授。理学博士。
京都大学大学院理学研究科地球物理学専攻博士課程退学。
京都大学防災研究所教授、京都大学防災研究所上室地殻変動観測所長、京都大学防災研究所地震予知研究センター教授を歴任。
この間、カリフォルニア工科大学地震研究所研究員、カリフォルニア大学バークレイ地震観測所研究員、カリフォルニア大学バークレイ校客員教授なども歴任。

(7) 西村英一(一九九七—一九八七)
京都大学名誉教授。地震学者。理学博士。日本の地震予知計画の発足に貢献し、環太平洋地殻変動観測網を計画した。

(8) 現在の助教

言う。「一台目はどこですか」と聞いたら、「NHKの高知放送局や」と言われた。それくらいオーディオに凝ってたんです。

そしてその技術が、微小地震観測に役立った。小さい振動を増幅させる回路だとか、ノイズを抑制する技術だとか、そういうことが理解できていましたし、もともとそういうことが好きだったから、夢中になって、地震計の感度を上げたんです。

高橋 趣味と実益を兼ねたということですね。いや、先生の場合はオーディオ趣味という偶然に助けられたというより、オーディオマニアから微小地震観測器にいたるまで、必然的な道が一本通っていたのじゃないでしょうか。

尾池 そうかもしれません。そして、そうやって観測を始めてみたら、小さい地震はしょっちゅう起こっているということが分かった。そして、世の中では大きな現象は減多に起こらないけれども、小さな現象は頻繁に起こる、という当然のことに気づいた。そこから、小さな地震が起こる仕組みについて次第に興味を湧いてきたんです。自然現象のなかでは、小さな地震は当たり前のようになくさん起きているはずだ、しかしそれについてはまだ誰も言っていない、ならば、ぼくがもっと小さい地震を観測してやろう。そう思ってためり込んでいったんです。

高橋 ラマルクが誰もいない無脊椎動物の研究を始めて、ダーウィン以前の進化論の創始者になったのと、似たお話ですね。

静かな場所を求めて

尾池 もう一つ大事な要素がありました。それは、ぼくが「旅行好き」だったということです。黙って汽車に乗って、どこかに行くのが大好きだった。うれしいことに、助手になると、旅費をくれたうえに、色々なところへ行けるんですからね。あちこちにやたらと出かけていって、その都度、静かな場所を探しました。たとえば、兵庫県の三日月町というところへ行ったら、駅から離れたところにお寺があって、そこがとても静かなんです。そのお寺のお坊さんと仲良くなって「ここに地震計を置かしていただませんか」とお願いしたりしましたね。そうやって旅行しながら、だんだんと地震計を置く場所を増やしていったんです。

高橋 静かな場所というのは、要するに、自動車の振動なんかがないところということですか。

尾池 そうそう、地面が揺れているとダメですからね。普段なるべく揺れない場所を探すんです。探していると経験的に、どうも土の上は揺れやすくて、岩盤のところは揺れにくいようだ、などということが次第に分かってくる。だから防空壕の跡だとか、鉱山の跡だとか、そういうところを探すようになりました。愛宕山の裏でマングンを掘っていたらしいと聞いて、そこにも行きましたね。しかも、毎日、記録の紙を代えてもらわないといけないから、日頃なるべく家にいる人がいいわけで、お寺のお坊さんとか小学校の先生とか、そういう人を探しました。

高橋 そういう意味でもお寺がいいんですね。

尾池 そうやっておもに田舎を旅行したんですが、田舎には山もあれば谷もあり、色々な地形を見ることがになります。その過程で大地の仕組みのようなものにも関心を抱くようになりました。それが後になってから生きてくるんです。

地震と活断層

尾池 ずっと記録を取っていくと、なぜか地震の起こる地点が並ぶんです。地震はどこにでも万遍なく起きているわけではなくて、妙なことに並んで起きている。それが分かって面白くなったので、地図の上に地震が起こった場所を書いてじつと眺めてみました。しばらく眺めているうちに、地震が起きるのはどうやら鉄道線路沿いなのではないか、と思うようになったんです。よく旅行していたので、鉄道のことはよく頭に入っていましたからね。たとえば京都を出て亀岡を通る山陰線の線路がありますが、そこに地震が起きている。あるいは鳥取から島根にいたる線路もありますが、そこでもやはり線路沿いに地震が起きている。

高橋 面白そうな発見です。

尾池 そうです。ぼくもこれは大発見だと思いました。



中国・漢の時代の地震計

Kazuo Oike 2001

たから、線路の地図の上に地震分布を書いて、地震学の先生のところを持っていきました。その地図を見せて「微小地震は鉄道線路沿いに起きます」と言ったんですが、「アホなこと言うな」と先生にえらく怒られました(笑)。「そんな鉄道の地図なんかと比較するんじゃないくて、せめて地質図と比べなさい」というんです。

しかし、いくら地質図と比べてみても、何も関係らしきものが見つかからない。そこで、「やっぱり関係あるのは鉄道です」と言っ、しばらく頑張っていたんですが、先生から返ってくるのは、「そんなアホな」という反応ばかりでした。

高橋 自然が作る地震を、人が作る鉄道と比べることはできないという論理ですね。

尾池 ところがあるとき、そのことを大阪市立大学の藤田和夫さんに話したら、藤田さんは「そりゃ面白い」と言ってくれた。そこで、また新しい図面を作って持っていきました。そしたら、その図面を見た彼は、「この鉄道が走っている所ちゅうのは断層や」と言ったんです。「断層運動は破碎帯を作る。そこは柔らかくなるから浸食されて谷ができる。鉄道や道路というのは、そういうところに行けるんや。だから、断層があるところに地震が起きるちゅうことやないか。それやったら地質なんか関係ないで」。藤田さんはそう看破したんです。その頃すでに「活断層」という言葉はあるにはありましたが、このとき初めて、断層に沿って小さい地震が起きるということを見つけたんです。そのことを学会で発表したら、「ほー」ということになりましたね。

高橋 「活断層」という言葉は、今では小学生でも知っていますが、その頃はまだ真新しい概念だったんですね。

プレート理論

高橋 私の学生時代に小松左京さんの『日本沈没』が出ました。その頃が、プレート理論が脚光を浴びてきた時代ではなかったかと思いますが。

尾池 そうですね。では、ちょっとプレート理論との関わりについてお話ししておきましょう。

先ほど、ぼくが大学を卒業するときには、どうやって地震が起き

るのか、まだ分かっていなかったという話をしました。しかし、ぼくはあるとき、丸山卓男さん⁽⁹⁾という東大の若い先生が「dislocation」理論なるものを導入した論文を見つけた。岩盤が「dislocation」する、つまり「ずべる」ことによって地震波が生まれるという理論です。ぼくはその論文を読んで、「これだ!」と思いました。この理論が一番ビツタリくる。岩盤のなかで「ずべる」動きが起きたときに地震波が出るということなんですが、それがぼくの取った観測データとよく合う。岩盤のなかの運動と、活断層の動きがよく合ったんです。それで、その論文を周囲の人に紹介したり説明したりしていたんですが、あまり分かってもらえなかった。でもぼくは、そのことを追求していった。

高橋 若いながら、先生は地震学の最先端に到達されたんですね。

尾池 ぼくの学位論文は、自分が観測したデータをプレート運動に関わせたものでした。鳥取から兵庫にかけてぼくが置いた地震計は、小さな地震を測るためのものでしたが、感度は世界中で最もいい。ずっと遠くで起こった大きい地震も記録されるほどいいんです。たとえば、インドネシアの五〇〇キロくらいの深さで起きた深発地震も、その記録が取れる。当時そういう地震は、気象庁などの感度の低い機械では記録できなかった。ですからぼくは、遠いところで起きた深い地震の記録も必死に集めました。

その記録を見ると、四秒ぐらいの間隔を空けて二回揺れている。これは何だろうと思った。後になって分かりましたが、それはポンポンと二つの地震が起こっていたためだった。今でこそ地震のときに岩盤がポンポン多重に割れるのは当たり前のことになっていますけど、一つの地震だと思われていたものが、じつは二つの地震だったということがその時初めて分かったんです。それについて書いた論文が、ぼくが初めて英語で書いた論文でした。

小さい地震の観測ばかりやっていたはずなのに、深発地震で学位論文を書いたんです。副産物みたいなものですね。ぼくは小さい地震の観測によって



阪神高速道路
(『阪神大震災全記録』、神戸新聞社、1995)

(9) 藤田和夫(一九一九—)
大阪市立大学名誉教授。地球科学者。専門は構造地質学。京都大学理学部卒業。第二回秩父宮記念学術受賞。

著書に『日本列島砂山論』(小学館、一九八二)、『日本の山地形成論—地質学と地形学の問』(蒼樹書房、一九八三)、『変動する日本列島』(岩波書店、一九八五)、『アルプス・ヒマラヤからの発想』(朝日新聞社、一九九二)ほか。

(10) 丸山卓男(一九一九—)
東京大学名誉教授。東京大学、同大学院を経て、東京大学地震研究所教授。定年後、中国国家地震局北京地球物理研究所に一年滞在。その後、国際協力事業団(JICA)の技術協力プロジェクト「地震防災研究センター」のJICA専門家として、トルコ共和国に約一年半滞在。

活断層との関わりを発見できました。

高橋 研究というのは、偶然に大きく左右されることがあります。その偶然をうまくキャッチできるかどうかで学者の人生は決まりま

すね。
尾池 そうですね。ほくが、鉄道の線路と地震の分布が重なることに気付いたとき、「そんなアカン！」という先生もいれば、「そりゃあオモロイ！」という先生もいたわけで、そこで人生が分かれていった。

小さな地震は何故起きるか

高橋 地震の予知はどれくらいできるようになっているんでしょうか。

尾池 最近では、なぜ小さい地震が起るのか、興味をもって調べています。大阪管区気象台のウェブサイトに毎日、一週間分の地震分布が載っています。そのデータをプリントして並べてみると、地震というのは、小さな地震でも、いつも同じところで起きているということが分かる。あっちにいたり、こっちにいたりしてはしない。何年ものデータを並べてみても、同じところに起きているんです。

なぜなのか。最初は最初、活断層が動いているのかな、と思いました。ところが、どんな測定をしてみても、活断層はふだんは動いていない。他の国には動いている活断層もあるんですが、日本の活断層は止まっている。今だったらGPSで測っていますから、ずれていたら必ず分かりますが、やはりずれていない。だとすると、小さい地震が起るのには、「ずれ」とは別の理由があるということになります。

今は、活断層の周りに小さい地震が起る理由を次のように考えています。

神戸のような大きな地震が起ると、活断層が動きます。動いたところは力の分布が変わるので、今まで割れずに残っていたところが割れることになる。それで、大地震の後には、その周りに小さい地震がたくさん起る。いわゆる余震ですね。

高橋 阪神大震災の後はずいぶん余震に苦しめられましたね。

尾池 ひとつの推測は、活断層の周りに小さい地震が起る理由は、

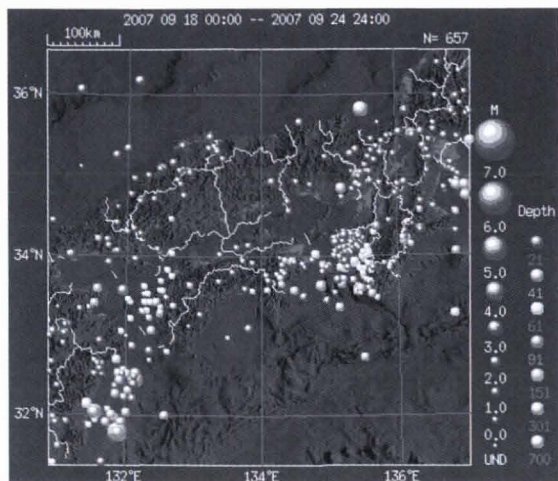
昔大きな地震があつて、その余震がまだに続いているからだということ。事実、一九二七年の丹後地震の後には、そのあたりの活断層の周りに小さい地震が起きましたし、一九四三年の鳥取地震の後でも、やはり小さい地震が並んで起きています。活断層に沿って小さい地震が起るの、昔あつた大きな地震のストレス解消のためだ。とりえずはそう考えられますね。

ところが、昔大きな地震が起ったわけでもないのに、活断層に沿って小さい地震が起きているところがある。山崎断層はそういう断層です。これについては、色々な研究をしました。調べてみると、そこでは、千二百年ほど前に大地震が起ったことがあるんです。しかし、いくらなんでも千年以上経ってから余震が起るなんてことは、ちょっと考えられない。実際、二百年前や三百年前に動いた活断層のところでは余震が見られませんからね。つまり余震はそう長くは続かない。

そこで考えられるのは、小さな地震は次の地震が起る前兆なのではないか、ということ。これは、先ごろ京都賞をもらわれた金森博雄⁽¹¹⁾さんが言い出されたアスピリティモデルというものです。岩盤に応力をずつとかけていくと、弱いところがピシピシ割れる。うんと強いところだけは残るが、しかしそれも最後にはドンと動いて、大きい地震が起る。金森さんはそういうモデルをつくられた。

要するに、長いあいだ大きな地震がないところにエネルギーが溜まってきて、弱いところがピシピシと割れはじめる。それが、小さい地震が起る理由だということです。山崎断層はそれではないかと思われま。長期の前兆現象ということですが、他にもいくつか理由が考えられるんですが、決め手はまだない。

もう一度、この地震分布図(下)を見ていただきますと、小さい地震が和歌山県に固まって起きていることが分かるでしょう。ここは、中央構造線⁽¹²⁾があるところですが、この和歌山の中央構造線は長いこと動いていないんです。つまり、これはいよいよ次の大地震が起る前兆である、ということになります。だから、和歌山県の方にはよく



大阪管区気象台による地震分布

(11) 金森博雄(一九三六―)。カリフォルニア大学名誉教授。理学博士。東京大学理学部卒業。東京大学地震研究所教授、カリフォルニア工科大学教授、カリフォルニア工科大学地震研究所所長などを歴任。日本学士院賞、文化功労賞などを受賞。二〇〇七年には京都賞を受賞した。

(12) 関東から九州へ縦断する日本最大級の断層系。

境界が緩むと休みになるの
で、西日本の活断層帯には、
地震の活動期と静養期が交互
にやってくる。そういうこと
が分かってきた。そういう発
見は、古文書の研究にもとづ
いているんですよ。

高橋 まさしく文理融合のよ
うなご研究ですね。

尾池 そうなんです。そうい
うことは大体一九八〇年代に
分かってきましたし、九〇年
代に入ってから大学院生た
ちとも一緒になって色々な分

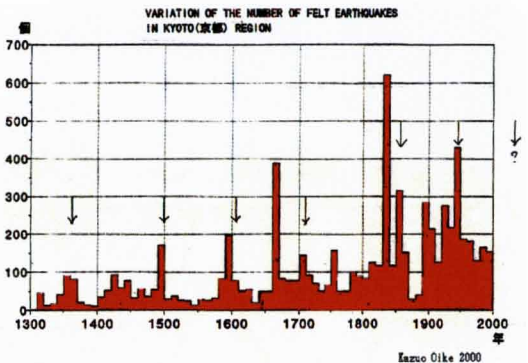
析をしました。そうやって研究を進めると、経験則だけでも、
二一世紀に入るか入らないあたりに、この地域は地震の活動期に入
る、と言えるようになってきた。しかし、そういうことを言い始め
ても間もなく神戸の地震が起きてしまった。ちよつと間に合わなかつ
たんです。神戸の大震災があったとき、地震予知連絡会の会長だつ
た茂木清夫さんが、「西日本は地震の活動期に入ったと思われる」と
いう談話を発表しましたね。

「地震火山庁創設」運動

高橋 地震の活動期に入ったということは、もう学会の通説になっ
ているんですか。

尾池 もう誰も異論がないですね。ただ、なぜそういう活動期があ
るのかについては色々な説があります。シミュレーションをした結
果、これだろうとほくたちが主張している仕組みがありますが、そ
れに対して今のところはまだ対抗馬は出てきていません。でもまだ
確実ではありませんね。活動期が生まれる仕組みは、きちんとシミ
ュレーションをやれば分かることなので、今後それができるスーパ
ーコンピュータの登場が期待されます。

神奈川県には「地球シミュレータ」というスーパーコンピュータ



歴史上で起こった地震のグラフ

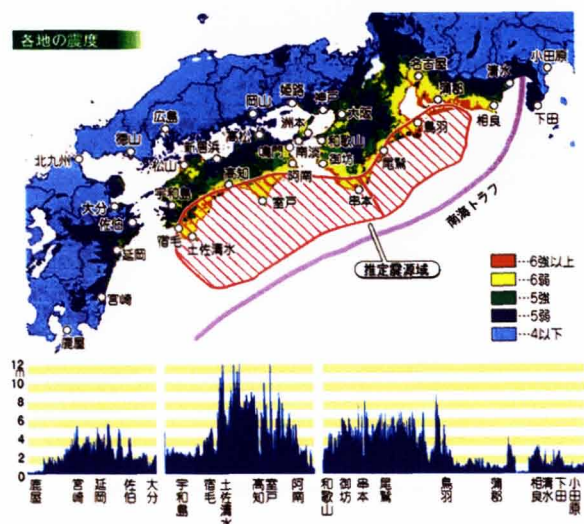
ーがあつて（下）、南海トラフで起こる巨大地震については、これ
を使つてもうシミュレーションができています。しかし内陸の活断
層がどのくらい前に活動期になり、いつ大きい地震が起こるのかと
いうところまでは、ちよつと要素が多すぎて、まだシミュレーショ
ンできていません。だけど、スーパーコンピュータができれば、
そうしたシミュレーションもできるだろうと期待しているんです。
そのシミュレーションを動かして南海トラフの研究しているのが、
堀君という僕の弟子で、彼の仕事を楽しみにしているんですが、
高橋 先生の見込みですと、あと何年くらいしたら地震が予知でき
るようになるのでしょうか。

尾池 南海地震なんかはもう長期的に予知できています。ほく
も長生きして実際に見たいんだけど、二〇三〇年か二〇四〇年
までには確実に起こるというシミュレーションがもうできていま
す。それは、世界の地震学者の誰もが認めている予測です。もちろ
ん「明日起こります」というところまではまだいつていない。しかし、
近いうちに起こることが分かっているんだから、センサーをいっぱ
い置いて、直前にどういう前兆現象が起こるのか、見ようじゃない
か、そう言っています。

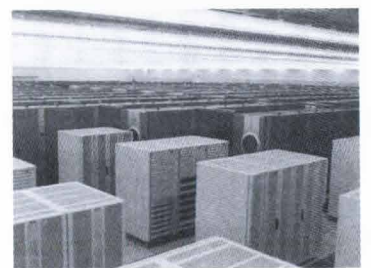
これは壮大な実験になります。少なくともデータは残せるわけ
ですから、間違いなく世界に貢献できる。起こる
ことが分かっている巨大地震があるのだから、
こんないいことはないわけで、ぜひ観測して、
日本が貢献しましょうよということを言ってい
るんですが、なかなか実現しません。

高橋 そりゃあ、こっちは大変な被害にあうわ
けですからね。ところで中国はなまらずを導入し
ていますが、あれはどう思われますか。

尾池 なまらずは参考情報であつて、経験主義に
基づく予測です。たとえば昔の天気予報は観天
望気で、空を眺めながら予報をやっていたわけ
ですが、今は数値予報で予報をするようになって
たでしょう。地震の予報も、本当はそこまでや
りたいんです。でも、それにはまだまだ時間か
かるんです。



(13) 茂木清夫（一九二九—）
東京大学名誉教授。日本大学
教授。専門は固体地球物理、
地震学、岩石力学。東京大学
地震研究所所長。地震予知連
絡会会長、地震防災対策強化
地域判定会会長を歴任。
著書に「地震—その本性を
さぐる」（東京大学出版会、一
九八一年）、「日本の地震予知」
（サイエンス社、一九八二年）
、「地震予知を考える」（岩波書
店、一九九八年）、「地震のは
なし」（朝倉書店、二〇〇二年）
など多数。





江戸時代の「なまず絵」

高橋 先生は「地震火山庁を創れ」とおっしゃっていますね。

尾池 そうなんです。データを組織的にとる仕組みとしての地震火山庁がとりあえず必要です。データ採取を始めて百年も経てば、地震も予報できるようになるだろうというのが、多くの持論です。

気象庁は明治時代から天気の詳細なデータ採取をやってきたから、今では見事に携帯電話にまで衛星写真を配信できるようになっ

た。今では、後一時間したら雨が降るぞ、というところまで分かるわけですが、そうなるまでには、衛星をあげるなど、長いあいだの取り組みがあったわけです。地震や火山に関しては、まだそこまでいっていない。

高橋 雨が降るぞという予報より、地震が起きるぞという予報のほうがはるかに重要ではないでしょうか。

尾池 今やっと、「地球」という船をつくり、地球の構造を調べるためにドリルで穴を開けることができた。それで喜んでいる段階ですからね。たとえて言うなら、戦後になってロケットをあげ、やっとデータが取れたと言っているのと同じことです。それくらい遅れている。将来は、「いま和歌山のあたりの地震が活発になりました、いよいよ明日くらいには大きい地震が起きるかもしれない」と予報できるようにしないといけない。そのためには、「地震火山庁」が必要なんです。

緊急地震速報の意義

高橋 私の学生時代に、ヨーロッパの名だたる地震学者が日本に集団視察に来たことがありました。日本は世界に冠たる地震国だから、地震の研究がよほど進んでいるだろうと思っていたが、非常に期待を裏切られたと言っていました。

尾池 多くの時代にやっと分かってきたばかりですからね。

高橋 今だったらもう大分分かってきていると言えますか。

尾池 昔に比べれば、ずいぶん分かってきましたね。地震が起こったからのことは非常によく分かっていた。ですから「緊急地震速報」ということが可能になったんです。地震が起きたらP波を検出し、「ここに揺れますよ」と直前に言うことができる。もちろん、ほんの直前で、一〇秒もないわけですが、たった一〇秒前でも、それなりに意味がある。たとえば花折断層で大地震が起これば、京都では間に合いませんが、大阪では構えることができます。離れたところでは役に立つ情報なのです。

高橋 一〇秒あれば、料理中の火を消すくらいのはできますね。

尾池 そういうわけで、地震が起こってからのは非常によく分かっていた。しかし、地震が起こる直前に何が起これるかはまだ分かっていません。地震の位置については大体言えるけれども、巨大地震が起こる直前に何があるのか、ということが分からない。それが分かるようになったら、みなさんの期待する地震予報が可能になるでしょう。

高橋 やはり地震予報は可能なんです。

尾池 天気予報は出せるけど、地震の予報は出せないと言っている人がいますが、それは間違いです。気象だって、いつ、どこで台風が生まれるかまでは分からないんです。気象庁は、台風の進路を予測して「もうすぐ風が強くなりますよ」とか「まもなく雨足が強くなりますよ」と言えるだけです。それと同じで、地震が起こったら「もうすぐ揺れますよ」と言うことはできる。しかも地震のほうがあるかに正確に計算できる。台風の進路予報なんか、当たらないことが多いでしょう。台風がどこへ行くかなんて、あまり分からないんです。だから、起こってから先のことで言えば、天気よりも地震のほうが予測はるかに正確なんです。

活断層のおかげで今の日本文化がある

高橋 ヨーロッパから日本に来た学者と話をしていると、日本はひどく危険な国だと言われることがあります。地震は起これば、津波は来るし、火山は噴火するし、こんな危険な国はない、というの

です（笑）。

尾池 そうですね。津波や噴火の心配こそないものの、京都だって地震だけはすごいですからね。しかし視点を変えてみると、違ったことが見えてきますよ。

先ほどお話したように、京都では、活断層が運動して盆地ができ、厚い堆積層ができた。そこに水が溜まるようになり、それで茶の湯が生まれました。日本で美味しい日本酒が造れるのは、活断層の破砕帯から出てくる水がよいからです。しかも堆積層が厚いから良質な米が実るし、破砕帯が崩れるのを防ぐために竹を植え、おかげで筍を食べられる。湯葉や和菓子にしても、友禅染や和紙にしても、いい水があるからこそ発展してきたものです。京都、ひいては日本の文化は、活断層に大きな恩恵をこうもっているのです。それがほかの言う「変動帯の文化」です。

高橋 温泉はどうでしょうか。

尾池 活断層の破砕帯からは温泉がたくさん出ます。和歌山にも白浜温泉があるし、京都には亀岡温泉というよい温泉がありますね。あるときシンポジウムのために、市田ひろみさんたちと一緒に亀岡温泉に行くことがありました。そうしたら、その旅館の女将が、ほくにこう言ったんです。「亀岡には火山がないから熱いお湯が出てきません。ですから情けないことに、私どもの温泉はお湯を沸かしている温泉なんです」と。そのとき僕は「あんだ、それは大間違いや」と言ったんです。「熱い温泉が湧いてきたら、水で埋めなきゃいかんやろ。それじゃあ成分が薄められて偽もんになってしまふ。温泉の定義は、温度ではなくて成分で決まる。冷たい水を沸かすんなら成分は全然変わらんから、亀岡の温泉こそ真正正銘一〇〇%の温泉やないか」。そう言ったら女将さんはずいぶん喜んでね、市田さんも「あんだ、ええこと言うなあ」と言われてた。そう言われてみたら分かるでしょうが、言われるまでは誰もなかなか気づかない。物事をそういうふうに見ることが学問なんだと思います。

地震と俳句

高橋 先生は俳人でもいらっしゃいますが、日本人が俳句をつくることと地震の国であることは、何か関係がありますか。

尾池 そもそも地震が起きたり火山が噴火したりすることによってできた日本列島では、山あり谷ありという起伏に富んだ地形が造られました。そしてその起伏に富んだ地形が、じつに多様な気象現象を起こしています。

プレート理論から見ると、次のように言うこともできます。日本海や日本列島は、プレートが潜り込んでいくことによって、大陸の淵にくっついていてた部分が割れ、そこが開いて形成された。そういう仕組みはヨーロッパの安定大陸にはない。内海のような縁辺海になったところがないのです。日本海があるから大量の水蒸気が生まれ、大陸から空気が流れてくるから、大量の雨や雪が降る。何メートルも雪が積もるなんてことは、ドイツなんかではないでしょう。

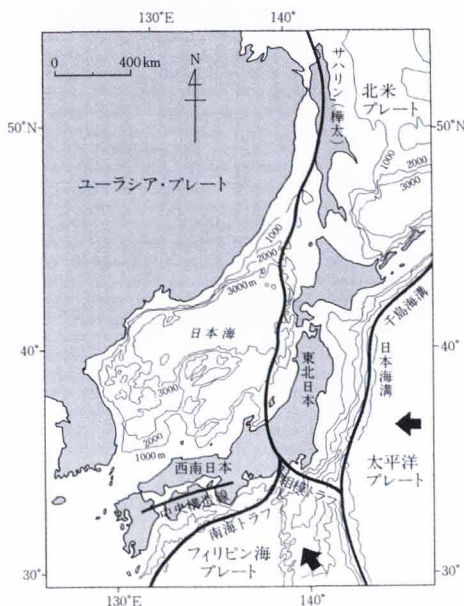
高橋 ないですね。北欧でもそれほど降りません。

尾池 雨もチラチラとしか降らない。北欧で傘を持っている人なんて、まずいない。巨大地震が起これないところでは海はできないし、海がないところでは雨も降らない。雪も積もりません。ところがたくさん雨が降るといことが、四季折々の風物を産み出す元なんです。日本のように自然が豊かに変化するのは、縁辺海があり、起伏に富んだ地形があり、そしてそれが中緯度にできたおかげなのです。インドネシアなんかも同じような仕組みですが、四季折々というわけではない。縁辺海も陸も熱帯だからです。縁辺海と島が中緯度にあるのは日本だけなんです。

高橋 小学校唱歌に「今は山中、今は浜、今は鉄橋渡るとき……」というのがありますね。ああやって歌にもうたわれた景色というのは日本にしかないわけですね。

尾池 そうです、日本にしかありません。季語を詠み込むというのが俳句の鉄則ですが、その季語を生み出した四季折々のものは日本に特徴的なものなんです。そういう意味でも俳句は、日本固有のものだと言っていいでしょう。

別にそんなことを思っ俳句をや



プレートの図

り始めたわけではないんですけどね。俳句を一〇年もやっているうちに、季語を詠むということの意味が分かってきましたし、他方では、季語が生まれたことの意味を地球科学で説明できるということも分かってきた。ですので、しばらく前から俳句の雑誌に『京都の地球科学』という連載を始めたんです。この連載はもう一六〇回を超えていて、それをまとめた本もちょうど三冊目が出版されたところです。

高橋 私が存じあげている自然科学者のなかでも、有馬先生と尾池先生が俳句をなさりますが…。

尾池 俳人は自然科学者にはわりと多いんですよ。工学の人にはあまりないかもしれませんが、文学と理学は何といっても隣同士ですからね。それに、京大の基本理念のなかにある「地球社会の調和ある共存」にも俳句が関係してきます。そう思って、今回出した三冊目の『俳景（三） 洛中洛外―地球科学と俳句の風景』という本の帯には、「地球社会の調和ある共存と変動帯の文化」と記しておきました。

地震学者のバースペクティブ

高橋 私は学生の指導に際して、長期、中期、短期の三期に分けて物事を考えなさい、というんです。長期といっても人によって違いますが、ふつうは人生を終えるくらいまでの長さのことです。しかし尾池先生の場合は違いますね。先ほど、やがて大地震が起きると予想される西暦二〇三〇年頃が短期で、長期となるとはるかに先になるようですね。

尾池 地球が生まれて四六億年です。そこまでは言わないにしても、今の大陸分布をつくりあげたプレート運動は一億年間くらいのもの、それより前は別の世界があり、今とはまったく違う世界地図になっていた。そういうスケールで物事を考えていますから、たとえば環境問題でも違った見方になってきますね。世間では一〇〇年で二センチほど海面が上昇したといって騒いでいますが、一万年単位では一〇メートル上昇しているんです。そういうスケールで見ると、ケチケチしなさんな、と言いたくなりますね。

このままどんどん温暖化が進めば、シベリア全体が田んぼになり

ますから、皆そこへ移住すればいい。温暖化を防ごうといっても、いずれは人間の行動とは関係なく氷河期になるんだから、大したことはないんじゃないか、なんて思ってしまうんです。どういうスケールで物事を見るかによって、考え方も自ずから変わってくる。小山勝二さんのように宇宙の光ばかり見ている方は、一〇〇億年単位の話を書きますしね。

高橋 うちが人間・環境学研究科で環境問題をやる研究科なものですから、このまま温暖化が進んだら大変なことになる、と言わざるをえません。

尾池 大変なことになるかもしれないが、その代わりにラッキーなことも起こるかもしれない。バン格拉デッシュなんかでは外国で、ダムを開けると水没してしまうような、元々人が住んではいけない三角州に人が住んでいるわけですよ。それよりは、シベリアの大地で米が穫れるようになったら、そちらへ行つたほうがいいんじゃないか、と思ったりしますね。むしろ暴論です。でも、国際問題を議論するならば、そういうことまで考えて対策をしなければならぬんじゃないか。京都大学の基本理念にある「地球社会の調和ある共存」というのは、そういうものだと思います。



(14) 有馬朗人(一九三〇―)。東京大学名誉教授。物理学者(原子核物理学)。理学博士。俳人。政治家。東京大学総長、文部大臣兼科学技術庁長官を経て、現在、(財)日本科学技術振興財団会長、科学技術館館長、武蔵学園園長、JST中国総合研究センターアドバイザー委員会委員長。

著書に『原子と原子核量子力学の世界』(朝倉書店、一九八二年)、『量子力学』(朝倉書店、一九九四年)、『物理学は何をめざしているのか』(筑摩書房、一九九五年)ほか多数。俳人としては、国際俳句交流協会会長、俳誌「天為」主宰。主な句集に『母国』『知名』『天為』がある。

主な受賞歴は仁科記念賞、俳人協会賞、日本学士院賞、レジオンドヌールなど。

(15) 小山勝二(一九四五―)。京都大学教授。宇宙物理学者。専門はX線天文学。

京都大学理学部物理学科卒業。同大学院修了。東京大学宇宙科学研究所、名古屋大学を経て、一九九一年より現職。井上芸術賞、林忠四郎賞、仁科記念賞、紫綬褒章などを受章。

著書に『X線で語る宇宙』(培風館、一九九二年)。共著に『見えないもので宇宙を観る』(京都大学出版会、二〇〇六年)ほか。

東北アジアの水事情

杉山雅人

MASAHITO SUGIYAMA



杉山雅人（すぎやま まさひと）
一九五七年、岡山県津山市生まれ。京都大学大学院理学研究科博士
後期課程（化学専攻）修了。京都大学大学院地球環境学教授（大
学院人間・環境学研究所主任）。分析化学・地球化学を専門として、
現在は主に水圏での物質動態・物質循環機構について研究している。
日本、ロシア、中国の湖や河川の比較研究を進めている。

はじめに

昨年の冬、琵琶湖は近來まれにみる危機に瀕していた。異常な暖冬のために表層の湖水の冷却が不十分で水の鉛直混合が完全には起こらず、湖底への酸素の供給が滞って、このまま春を迎えたら底層では溶存酸素が涸渇するのではないかと危惧されていた。

湖の水は水温の季節変動によって、鉛直方向への循環と成層を繰り返す。琵琶湖の場合、一月から三月にかけては湖水の冷却が活発で、表層の水は冷やされて重くなり湖底に向かって沈降する。これに伴って下層の水は表層へと上昇する。この水もやがては湖の表面で冷却されて、再び下層に向かう。こうしてこの時期、湖水は鉛直方向に循環する（この期間を循環期と呼ぶ）。その結果、水温は上から下まで均一となる。春から夏に向けて日射が増大すると、湖水は温められ湖の表層に暖かくて軽い水が形成される。この水は湖の上部で一つの層を作り、冷たくて重い下層の水とは混ざらなくなる（この現象を水温成層、この期間を停滞期と呼ぶ）。例えば盛夏、琵琶湖では表層の水温は三〇℃を超えることもあるが、

水深数十mの湖底のそれは七℃前後の低い温度にある。このため水深が一五mほどのところに水温が急変する層、水温躍層が生まれる（図1）。夏から秋にかけて日射が減少すると、表層の水は冷やされて重くなり、下に向かって沈降し始める。このため上層での部分的な水の鉛直循環が起こって、水温躍層は次第に深い場所に移っていく。表層と底層の温度差も小さくなる。冬に向かって、この動きが加速されると、やがて水温躍層は消失し、表層から底層にいたるまでの完全な鉛直混合が起こるようになる（これを鉛直全循環と呼ぶ）。

湖が停滞期にあるとき、底層の水では溶存酸素濃度が減少する（図1）。湖底に棲む生物による呼吸・有機物の分解により溶存酸素は常時消費されているのに、水温成層によって湖水の鉛直混合が起こらず表層から底層への溶存酸素の供給が止まるからである。それゆえ水の停滞が長期化すると、底層の溶存酸素が涸渇することになりかねない。昨年の琵琶湖は暖冬のために、湖の最深部周辺では三月上旬でも湖水の鉛直混合が底にまで達せず、鉛直全循環が起こることなく次の停滞期を迎えようとしていた。このことは湖底では停滞期が前年の春から翌年の冬まで二年近くに及ぶことを意味し

ており、底層の重篤な水質悪化を招くと懸念されていた。

われわれ生物、特に地上に生きるものにとって、湖や河川などの淡水域はその生存に不可欠のものである。確かに太古、生物は海で生まれたかもしれない。しかし、たゆまぬ進化を経て、地上へと進出した生物にとって生命の糧としての水は、もはや淡水であって海水ではない。水惑星と呼ばれるように、地球には水が豊富に存在している。ところがそのほとんどは海水であって、われわれが容易に利用できる形にある淡水は実はごく僅かしかない。しかしながら、その淡水の環境は近年の生活・産業構造のすさまじい変容によって、今、大きく変貌しようとしている。本稿では私達が生きる東北アジアを例に、それを概観する。

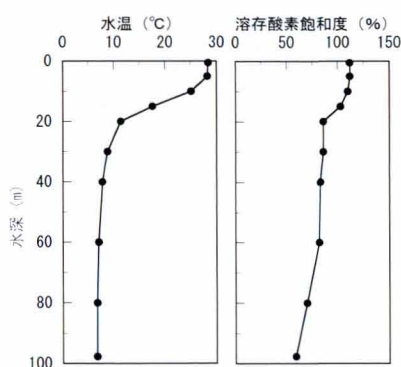


図1 停滞期における琵琶湖での水温と溶存酸素飽和度の鉛直分布
今津沖（水深98.7m）。2006年8月21日。
滋賀県琵琶湖環境科学研究センターの観測値をもとに著者作図。

（1）水深の深い湖の深層や湖底には太陽光が届かないので、これらの層では光合成は起こらない。したがって、このことによる酸素の供給もない。このため、深層や湖底への酸素の供給は、植物プランクトンの光合成や大気との接触によって溶存酸素を充分に含んだ表層水が湖水の鉛直混合によって深層や湖底に沈降することによってのみ起こる。

表1 地球での水の分布

所在	水量(×10 ³ km ³)	全体に対する割合(%)
海水	1,348,850	97.4
水河	27,500	1.99
地下水	8,200	0.59
塩水湖	107	0.0077
淡水湖	103	0.0074
土壤水	74	0.0053
大気中の水	13	0.00093
河川水	1.7	0.00012
生物中の水	1.3	0.00009
総計	1,384,850	100.0

理科年表(2008)

地球の水

地球には総量で一三・八億km³の水がある(表1)。これらが液体の水として地球表面を覆ったとすると、その深さは二・七二kmとなる⁽²⁾。地球には膨大な量の水が存在していることが分かる。この中で最も多いものは海水であって、全体の九七・四%に値する。次いで水河、地下水、塩水湖の順となる。これらで総量の九九・九九%を占める。しかし、これらの水はその存在場所や形態のために、利用が簡単ではない。淡水でしかも地球表面に存在していてわれわれが容易に利用できるもの、すなわち淡水湖や河川の水は地球総量の僅か〇・〇〇七%でしかない⁽³⁾。われわれにとってすぐさま利用可能な水は案外少ない。

淡水湖の水総量のうち、一二%はロシアのバイカル湖に、一七%はアフリカのタンガニイカ湖にある。また、アメリカとカナダにまたがる五大湖の水は合計で淡水湖総

量の二二%に相当する。すなわち、これら七つの湖で総量の六一%を占めている。淡水は地球上に偏在していることが分かる。ちなみに、日本最大の湖である琵琶湖の水量は二七・五km³で、淡水湖総量の〇・〇二%でしかない⁽⁴⁾。

水の豊かな国、日本?

日本には「湯水のごとく」という語があり、「どこにでも沢山あるもの」(広辞苑)の意で使われる。まさに日本では水はありふれていて豊富にあるものなのである。しかし、本当に日本には水が豊かなのだろうか。

日本の年平均降水量は一六九〇mmである(表2)。同じ東北アジアに位置する中国、韓国、モンゴル、ならびにアジアと世界での年平均降水量はそれぞれ六四二、一四一八、二八二、一〇八一、一〇六七mmであるから、これらとの比較に立つ限り、日本は水の豊かな国と言える。しかし、この降水量を少し視点を変えて眺めると、そうも言えないことが分かる。

年降水量に国土面積をかけると、一年間にその国に降る雨の全量(国別降水量)が得られる。この値を人口で割ると、住民一人当たりの降水量となり、これは私達が日常生活を送るうえで水の豊富さを示している。また、国別降水量を国内総生産(GDP)で割った値は、産業への利用という面から見た水の豊富さと言える。日本におけるこれらの値(表2)は、いずれもアジア平均や世界平均より格段に低い。水を利用するという観点からは、日本は決して水が豊かであるとは言えない。中国や韓国も同じ傾向にある。モンゴルは他の東北アジアの国に比べ人口密度と国内総生産が極端に低いので、降水量が少ないにもかかわらず、これらの値は他の国よりも高い。

表2 東北アジアの降水量

国	降水量 mm/年	国土面積 万km ²	人口 万人	GDP 億ドル	国別降水量 億m ³ /年	1人当降水量 m ³ /年/人	GDP当降水量 m ³ /年/万ドル
日本	1690	38	12777	45340	6387	4999	1409
中国	642	960	130756	22343	61574	4709	27559
韓国	1418	10	4829	7876	1417	2936	1800
モンゴル	282	156	256	19	4407	172028	2344336
アジア	1081	3190	403000	113421	344870	8558	30406
世界	1067	13610	667000	441138	1451779	21766	32910

理科年表(2008)、世界国勢図会(2007)。

水の有効利用という点から見ると、降水量の季節変化も東北アジアの国では望ましい形にはない。図2はヨーロッパ・北アメリカ・オセアニアと東北アジアの都市での降水量の季節変化を比較したものである。アジアモンスーン域に位置する後者の降水量は前者のそれに比べ、季節変化が激しい。

- (2) 地球の表面積は五・一〇億km²である。
 (3) もちろん、湖の底深くにある水を使うのはそう簡単ではない。
 (4) 琵琶湖の面積は六七〇km²、平均水深は四一・二m、最大水深は一〇三・八mである。
 (5) 湯水という語は、中近東や砂漠地帯では「非常に貴重なもの」という意味で使われるらしい。言葉は国の事情を反映していて面白い。
 (6) 人口密度は一km²当たりで、モンゴル：二人、日本：三四三人、中国：一三六人、韓国：四九五五人である。

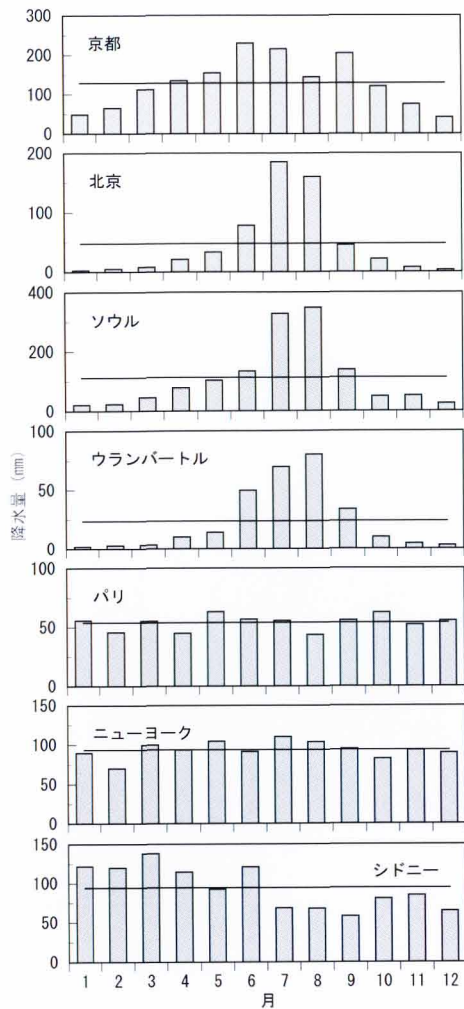


図2 月別降水量の季節変化
理科年表(2008)。図中の直線は年間の平均値。

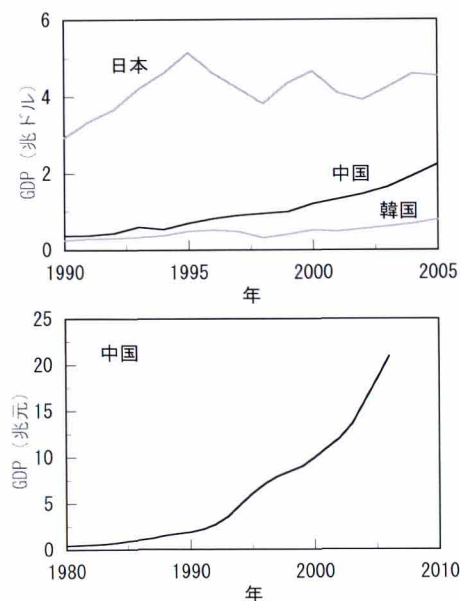


図3 国内総生産 (GDP) の推移
世界国勢図会 (1985~2007)、中国情報ハンドブック (2007)。

一年のある時期に集中して雨が降るために川や湖での水量が年間を通して安定せず、水の有効利用が難しい。これに加えて、日本では流程が短く急峻な河川が多いこともあって、一時期に集中した降雨はすぐさま海に流出してしまう。このことも水の利用を難しくしている。韓国でもそのことが言える。

日本は島国である。河川の上・下流に他の国はない。したがって、他国での水の利用を気にすることなく、日本に降った全ての雨を自由に使うことができる。しかし、その一方で他国に降った雨が河川を通して日本にもたらされるということもない。大陸に位置し長大な河川の下流域にある国々は、自国に降った雨に加えて、上流の他国に降った雨も利用できる。もちろん、下流に位置するために水がひどく濁っていたり上流域の生活・産業排水の影響を受けるということもあるが、場合によっては自国に降る雨よりもずっと多くの水をその河川から得ることができる。そのような国の一つ

がメコン川を擁するベトナムである。チベット高原に源を発し、中国、ミャンマー、ラオス、タイ、カンボジアを通りベトナム南部から南シナ海に注ぐこの川は、長さ四三五〇kmの世界的な長大河川である。メコン川の流域面積は八一万km²で、ベトナムの国土面積三三万km²の二・五倍に及んでいる。このため河口域での流量は五七七〇億m³/年と極めて多い。これはベトナムの国別降水量五六〇億m³/年を超える。メコン川だけでベトナム全土に降る雨に匹敵する水を供給している。アジアの川ではないが、ドイツに源流を持ち東欧各国を経て黒海に注ぐドナウ川も、その最下流に位置する国、ルーマニアに多量の水を運んでいる。この川の長さは二八五〇km、流域面積は八二万km²、河口での流量は二二〇億m³/年である。ルーマニアの国土面積が二四万km²、国別降水量が一四六〇億m³/年であることを考えると、同国におけるこの川の重要性がよく分かる。

東北アジアにはメコン川やドナウ川と同

じ特徴を持つ川はない。もちろん、黄河、長江(揚子江)、エニセイ川などはメコン川やドナウ川を凌ぐ長大な河川である。しかし、これらはいずれも単一あるいは二ヶ国を流れる川であって、上流域に広大な流域面積を持つようなものではない。こうしてみると日本を含め東北アジアの国では、水は必ずしも潤沢ではない。降水量だけで水の豊かさを計ることはできない。

富栄養化と水質汚濁

急激な経済の発展と人口の集中は、さまざまな国で都市周辺の湖や河川の水質悪化を引き起こしている。日本では一九七〇年代からそれが顕著となり、琵琶湖では一九七〇年代後半から赤潮がたびたび発生するようになって、一九八〇年に「琵琶湖富栄養化防止条例」が施行されるに至った。東北アジアの国で今まさにその問題に直面し、解決に苦慮しているのは中国である。図3、図4はそれぞれ中国の国内総生産と人口の

(7) 札幌 那覇間の距離が二二四四km、日本の国土面積が三十八万km²、日本で最も流量が多い川は信濃川で、その値は一五二億m³/年である。これらの値と比較すると、メコン川がいかに長大で多量の水を運んでいるかが理解できる。



写真1 滇池

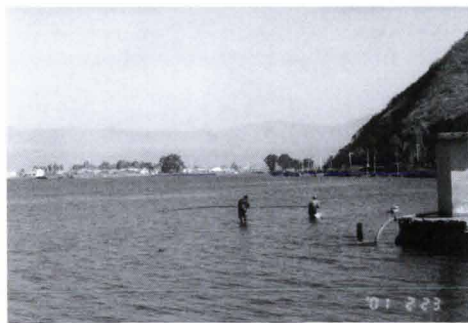
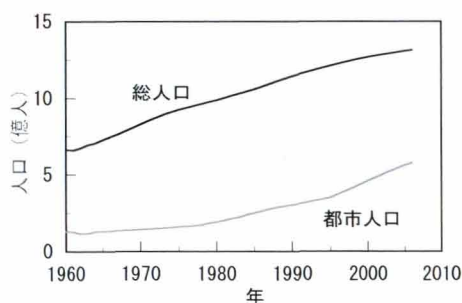


写真2 星雲湖



写真3 諏訪湖のアオコ

図4 中国の人口の推移
中国情報ハンドブック (2007)。

推移を示している。国内総生産は一九九〇年代から、都市人口は一九八〇年代から急増している。このことによって、都市域の生活・産業排水が膨大なものになったことは想像に難くない。その一方で、中国の下水道普及率は現在でも都市部人口の約三分の一、全人口の一〇分の一の程度に過ぎないと言われる。このため都市周辺の湖や河川には未処理の排水が多量に流入して、富栄養化と水質汚濁を急速に進行させている。その典型的な例が、中国南部、雲南省の省都、昆明にある。一九八二年に一二二万人だったこの都市の人口は、二〇〇〇年には三〇四万人に倍増した。滇池は昆明市の南に広がる、琵琶湖の半分ほどの面積を有する浅い湖である(面積三〇五km²、平均水深五・〇m、最大水深八・〇m)。周囲に龍門石窟などの景勝を持つ風光明媚な観光地として知られる。この湖ではほんの三〇、四〇年前まではそこで泳ぐことができたと言われる。しかし、今では汚染と富栄養化が進み湖水は過栄養となって、湖には大量

のアオコが発生している。その水質は中国の湖や河川の中で最も劣悪なレベルに分類されていて、湖は現在極めて危機的な状況にある(写真1)。

都市部だけでなく、農村部にある湖でも富栄養化が進行している。滇池の南、約四〇kmの位置にある星雲湖(面積三九km²、平均水深五・九m、最大水深九・六m。写真2)はその流域人口の九一%が農業関係者で占められる典型的な農村湖沼である。しかし、この湖は滇池と同じく極度に富栄養化していて、高濃度のアオコの発生が一年を通して見られる。中国での人口の増大は農業生産の拡大を引き起こした。このことが農村湖沼の富栄養化に繋がっている。一九九〇年に九六五六万ヘクタール、四九五億四億四千万であった中国の耕地面積と農業生産額は、二〇〇四年にはそれぞれ一億五五六四万ヘクタール、二兆一五四九億元に増加した。これに伴って、肥料の消費量も一九八六年から二〇〇五年までの一九年間で窒素は二・二倍に、リンは三・六倍に増大し

(図5)、湖の富栄養化のもととなった。耕地面積の拡大は風雨による地表の侵食にも繋がって、河川や湖に多量の土砂が流入することによる水質汚濁も引き起こした。

中国では各地で滇池や星雲湖のような極度の富栄養化が起こっていて、水質汚濁のはなはだしい湖が増えている。中国屈指の広大な淡水湖である太湖や巢湖はその中でも水質悪化が激しい湖として知られている。

河川や湖の水質汚濁は、飲料水の質の低下を招いている。中国では水道水は直接の飲用にあまり適さない。このため、近年ではミネラルウォーターの消費が増加している。都市部では、無料のミネラルウォーターが用意されているホテルも多い。そのため地下水が多量に使用されるようになり、今後このことが中国の水不足に拍車をかけるのではないかと危惧されている。中国の水不足は既に顕在化していて、例えば黄河はたびたび断流している。このためもある、南水北調プロジェクトなどが既に動き始めている。

(8) 太湖は江蘇省、蘇州の近くにある面積二三八km²、平均水深一・九mの湖。巢湖は安徽省、合肥の近くにある面積七五三km²、平均水深三・〇mの湖。

(9) 降水量の減少と上流域での水需要の増加などにより黄河の水量が減って、ときには下流に全く水が流れなくなることがある。この現象が黄河の断流である。断流は一九九〇年代以降、顕著になった。年によって一〇〇日以上に及ぶこともある。水資源の豊かな長江流域などの南部から、それが乏しい黄河流域などの北部に水を送ろうとする計画が南水北調プロジェクトである。



写真4 撫仙湖

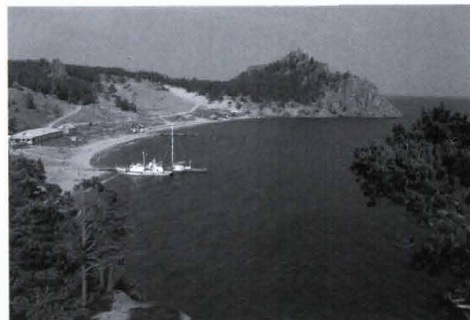
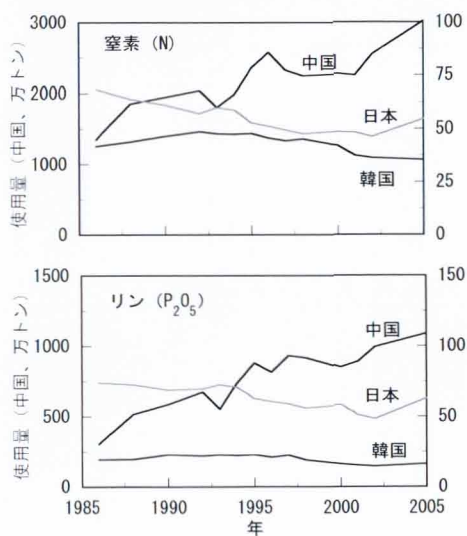


写真5 バイカル湖

図5 肥料使用量の推移
世界国勢図会 (1985~2007)。

温暖化の影響

地球規模での気候温暖化は、東北アジア各地の湖にも着実に影響を及ぼしつつある。

富栄養化の問題は中国だけのものではない。韓国や日本でもさまざまな湖でアオコが発生していて、各地の自治体はその除去に頭を痛めている。韓国には天然の大きな湖はないが、ダム湖の数は二万に近い。これらの中にはアオコの発生が甚だしいものも少なくない。大型ダムほとんどと農業ダムの六割が富栄養であるとの報告もある。日本でも主な湖沼七二のうち二八が富栄養湖に分類されている。中でも長野県の諏訪湖はアオコの発生が激しく、湖上に風が吹くとアオコは湖岸に打ち寄せられ異臭を放ち、岸辺に石を投げれば緑のしぶきが上がる(写真3)。琵琶湖は全体としては中栄養湖に分類される。しかしながら、南湖に限れば富栄養湖である。アオコは南湖だけでなく、今では北湖でも発生している。

表面水温の上昇は、冬季における湖水の鉛直循環の脆弱化も引き起こす。前述した

図6は琵琶湖、撫仙湖(写真4)、フスグル湖での気温の変化を示している。琵琶湖では一九八五年ごろ、撫仙湖では一九九五年ごろ、フスグル湖では一九七五年ごろから気温が上昇している。このことが表面水温の上昇をもたらし、ひいては表層での生物生産の増大に繋がるであろうことは容易に想像される。事実、バイカル湖(写真5)ではこれらが連動していることが報告されている。図7はバイカル湖南湖盆の気温と表面水温、図8は湖水中の平均溶解ケイ素濃度の長期変化を示している。気温と水温とともにこの一〇〇年で約一℃上昇している。この温度上昇によって生物生産が活発になったために、湖水中の栄養塩の一つであるケイ素が植物プランクトン(ケイ藻)によって多量に摂取されて水中の濃度が減少している。植物プランクトンによる最近のケイ素消費量は、以前の四倍以上になっている。

ように琵琶湖で湖水の鉛直全循環が始まるのは通常一月下旬から二月上旬にかけてである。例えば二〇〇三〜二〇〇五年、今津沖、水深九三mの地点ではそれぞれ二月三日、二月一六日、二月七日に、二〇〇六年は冬の冷え込みが早かったため一月一〇日に鉛直全循環が起こった。ところが、二〇〇七年は近來にない暖冬のために三月上旬でも鉛直全循環は起こらず、三月一九日になってやっとそれが確認された。しかしながら四月三日には早や次の停滞期が始まって、湖表面には湖底よりも一℃近く水温が高い水塊が形成され鉛直全循環は再び停止してしまった。気候温暖化がさらに進めば、このような湖水の鉛直循環の脆弱化は今後もたびたび起こると考えられる。場合によっては鉛直全循環が全く起こらず湖底での湖水の停滞が越年・長期化することもあり得る。こうなると表層から底層への酸素の供給が長期に渡って途絶えるので、湖底では溶存酸素が涸渇して、好氣的生物は死滅し水質も急速に悪化する。なぜなら、湖底

(10) 撫仙湖は雲南省にある中国で二番目に深い湖。面積二二二km²、平均水深九〇・一m、最大水深一五七・〇m。フスグル湖はモンゴル北部に位置する同国最大・最深の湖。面積二七七〇km²、平均水深一三八m、最大水深二六七m。

(11) バイカル湖はロシア、シベリアにある世界最大・最深・最古の湖。面積三万一五〇〇km²、平均水深七四〇m、最大水深一七四一m。



写真6 池田湖

急激な経済発展、人口の増大と都市への集中、気候の温暖化などによって、東北アジアの水事情は大きく変わりつつある。水は既にわれわれにとって「湯水のごとき」ものではなくなりつつある。水に対する意識を変えて、その維持と保全に努めるべきときが来ている。

おわりに

が還元的になって堆積物から重金属の溶出や硫化水素の発生が起こるからである。鹿兒島県にある池田湖(写真6)は最大水深が二三三mであることもあって、現在でも数年に一度、厳冬のときしか鉛直循環環が起らない。このため水深一五〇m以上の層では、溶存酸素は涸渇している。温帯域に属する東北アジア一帯で、今後このような湖が多数増えるのではないかと危惧される。

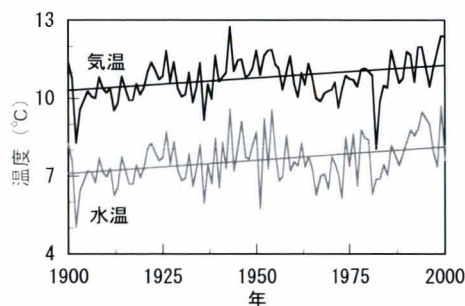


図7 バイカル湖南湖盆での気温と表面水温の推移
図中の直線は最小二乗法による近似直線。
Shimaraev and Domysheva (2004)。

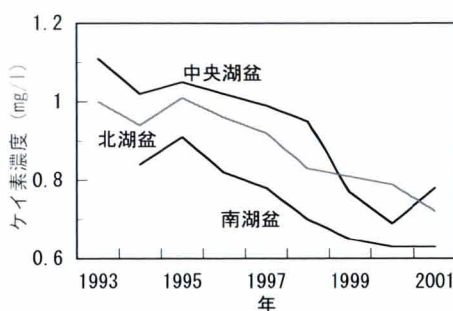


図8 バイカル湖での平均ケイ素濃度の減少
Shimaraev and Domysheva (2004)。

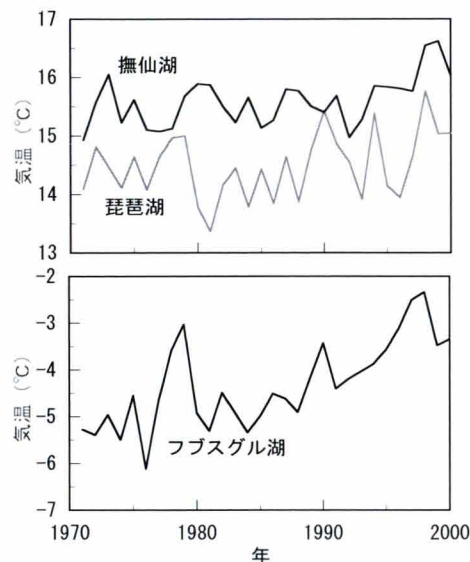


図6 湖での気温の変化
坂本充、熊谷道夫 (2006)。

- 参考文献
世界国勢図会 (一九八五、二〇〇七年版)、矢野恒太記念会編集・発行
中国環境ハンドブック (二〇〇七、二〇〇八年版)、中国環境問題研究会編、著者社
中国情報ハンドブック (二〇〇七年版)、二一世紀中国総研編、著者社
理科年表 (二〇〇八年版)、国立天文台編、丸善
陸水の事典、日本陸水学会編、講談社
東アジアモンスーン域の湖沼と流域、坂本充・熊谷道夫編、名古屋大学出版会
中国の環境問題 今なにが起きているのか、井村秀文、化学同人
滋賀県琵琶湖環境科学研究センター、ホームページ、<http://www.lben.jp/fool/jp/bk/index.htm>
Climate and long-term silica dynamics in Lake Baikal, M.N. Shimaraev and V.M. Domysheva, Russian Geol. Geophys., 45, 284-291 (2004).

初めてロシア人を見た日本人の姿

木村 崇

TAKASHI KIMURA



木村 崇（きむら たかし）
一九四四年、中国東北部生まれ。東京外国語大学大学院外国語学
研究科スラブ言語専攻修士課程修了。中京大学教養部教授（ロシア
語）を経て現在京都大学大学院人間・環境学研究科教授。専門はロ
シア語教育、ロシア文学、ロシア文化論。著書に『カフカース二
つの文明が交差する境界』（共編著、彩流社、二〇〇六年）、論文に
「文学作品にもつづく日露の死生観比較」（露文、Japanese Slave and
East European Studies, 2007, Vol.28）などがある。

はじめに

人間は、付き合ってみなければ分からない。いわんや異文化人同士においておや。しかし、付き合えば即分かれるというものでもない。これについては個人的経験がある。私はバトリス・ルムンバ名称民族友好大学という、発展途上国の若者たちを受け入れるためにソ連がモスクワに新設した、少々毛色の変った大学へ留学した。歴・文、経、法、物・数、工、医学部からなる総合大学で、現地ソ連出身の学生が、どの学部でも定員の半数を占めていた。当時の日本は東京オリンピックを一年後にひかえ、首都高速や新幹線の建設が急ピッチで進んでいたくらいで発展途上国とはいえなかったが、日ソ友好団体の強い要請に応えるために特別の受け入れ枠ができたと聞いた。軍縮でいらなくなった施設を改造した教室や寄宿舎は、東南アジアや中近東、アフリカ、中南米各国に加えて、ソ連の構成共和国各地から集まった、数十の諸民族からなる文字通り「異邦人たちのつぼ」だった。留学の五年間に私と寄宿舎で同室となった学生たちの出身地だけでも、一〇カ国にはなる。しかし四〇年後のいま、はたしてそ

の間にどれほど異民族や異文化への理解を深めたかと問われたら、自信はひどく揺らいでしまう。あまりの多民族的環境に慣れてしまつて、私は彼らを異文化の人として見るのをすっかり忘れていた。他者理解は、ただ付き合うだけでは不十分で、認識対象に対する自分の好奇心を自覚して駆り立てなければ、見えているものも見えてこない。それに加えて、他者をながめることのできる適当な距離も必要になる。

日本人とロシア人、正確には多民族国家であったロシア帝国臣民、との出会の歴史はせいぜい二百数十年でしかない。しかし、実際に会おう前に、お互いの存在を意識していた時期がかなりの時間続いた。ロシアには日本に対して、北米にまで達した東方への急激な版図拡大にともなう並々ならぬ実利的関心があり、日本には、迫り来るロシアという大国へのおびえから生じた警戒心と危機感があった。いいかえれば、お互いに旺盛な「好奇心」があり、双方は一衣帯水の微妙な距離によって隔たれていたのである。しかし当初から日露間に生じていたこの「思いの掛け違い」は、形を変えながら今日まで尾を引いている。

波乱の幕開けとなった日露関係

ロシアの使節アダム・ラックスマンが漂流民大黒屋光太夫ら三名を根室に送り届けた一七九二年時点では、エカテリーナ二世から託された交易実現の外交的使命は不首尾に終わったけれど、日本政府（徳川幕府）の対応に、この若い陸軍士官は一縷の期待を抱いて帰国の途についた。今も昔も日本の役人というのは、目先の困難を先送りすることはばかりに腐心し、一難去れば責任は果たしたと思うらしい。日露が険悪な関係に入るまでには、少しの猶予があった。

それから一〇年ほどして、レザノフという人物が、ロシア皇帝の親書と前回幕府が発行した「信牌」とを携え、ふたたび日本の漂流民を伴って正式の遣日使節として長崎へ来た。しかし江戸への回航はおろか、親書の受け取りも休息のための上陸さえも拒否され、通商などけんもほろろの状況に遭遇したのである。いまや日本のまわりの海を徘徊するのはロシア船ばかりではなかった。日本が置かれた国際政治的環境は一〇年前とは大きく違っていた。この新状況下で幕府がとった方針は、食料や水は別として「とにかくお引き取りねがえ」の一点

張りだった。これでは、レザノフがおさまるはずもない。国家間の信義が裏切られたわけで、その憤りは尋常ではなかった。彼は時の皇帝アレクサンドル一世に武力報復を具申するが、裁可は下らなかった。そこで彼は、露米会社の人間でもあったので、会社の金で勝手に船二隻をアメリカで調達し、会社の部下であったフヴォストフ大尉とダヴィドフ少尉に日本襲撃の訓令を出した。

実行を目前にしながら、レザノフ自身はフヴォストフを置き去りにしてなぜかオホーツクから陸路ペテルブルグへ帰るが、途中で客死してしまう。旅立つ前に彼はダヴィドフに先の訓令の返却を命じるが、計画自体をどうするかについては、どうともとれる置き手紙を遺していったのである。この無責任な処置がサハリン、ついでエトロフ、利尻などでの襲撃事件勃発の引き金となる。一八〇六、七年のことである。これは幕府の上層部だけでなく日本人全体を震撼させた大事件だった。ありがたいことに情勢収集とその分析に能力を発揮する優れた役人たちはいつの時代にもいるもので、襲撃時に連れ去られ、のちに放還された良左右衛門こと五郎次が陳述した捏造情報を質し、徹底的に取り調べた結果、少なくとも幕府中枢は事件の核心をほぼ正確につかんでいたと思われる。このときすでに高官たちは鎖国政策ロシアとの交易・国境確定問題はもはや回避したいと認識したであろう。しかし事態打開は、役人的思考を脱した「政治家」、前松前奉行荒尾但馬守のような傑出した人物がぎりぎりになって英

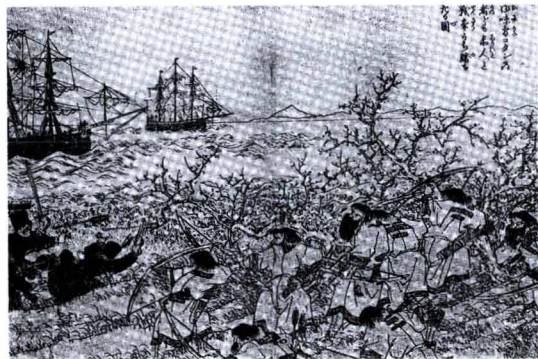


図1 フヴォストフとダヴィドフの攻撃
(和田春樹『開国一日露国境交渉』日本放送出版協会、1991より)

断を下すまでまたねばならなかった。

蝦夷地の行政府所在地松前は、江戸から二三日の道程であった。蝦夷地防備の急を訴える国論の沸騰していた「熱い状況」で、辺境防備のため幕府直轄地松前に赴任していた行政官は、東北各藩から派遣された部隊の対外認識の浅薄さもあって、現実の対応において窮するところが多々あったはずである。一八一一年、ゴロヴニンが指揮するディアナ号が薪水入手を口実に択捉島の入江に着岸したとき、彼らは島の警護をしていた松前奉行配下の武装役人と遭遇する。この時は無事、島を離れることができたが、国後島に再上陸した際、奸計に陥って捕らえられてしまう。日本の役人の「だましうち」は、一八〇八年に松前奉行四名が連署で出した蝦夷地警備心得に沿った行動であったけれど、指示された対処方法自体に、どこか弱者の虚勢の感があるのは否めない。一方ロシア側にしても、レザノフときが

どれほど切歯扼腕しようと、力づくで日本に要求を飲ませる意志も能力もなかった。捕らえられたゴロヴニンは取り調べで、カムチャツカに配備されている軍艦や兵員の数を誇張して伝え、情報攪乱を計ろうとするが、江戸では現地からあがってくる報告を精査して、それなりに実態把握をしていたと思われる。

ディアナ号が南千島沿岸を航行していたのは測量のためであった。艦長ゴロヴニンは海軍幼年学校入学以来一貫して海軍軍人としての教育と訓練を受け、イギリス留学の経験もある教養人である。フヴォストフ事件のことはかなり知っていたけれど、日本側をいたずらに刺激せぬよう細心の注意を払った。フヴォストフとの関係を察知されたら、命さえ危ういと思ったからである。彼は部下の二士官と水兵四名、アイヌ人通訳一名とともに函館まで縄をかけられて徒歩で護送され、尋問の末に松前の牢屋に閉じ込められてしまう。日本の官憲にたいしてゴロヴニンは、測量にきていることをひた隠しに隠しながら、ひたすら害意のないことを力説した。一方、尋問中ウソを言っているロシア海軍の軍勢力を「誇示」したのは、釈放のチャンスを少しでも広げたかったからである。ゴロヴニン逮捕の後、その報復措置として廻船業者高田屋嘉兵衛がロシア軍艦に捕らえられたが、捕虜交換という形で保釈されるまでの、二六ヶ月と二六日間におよんだ幽囚体験は、帰国後ゴロヴニン本人の手で自伝三部作としてまとめられ出版された。これにはロシア人による、おそらく史上初の本格的日本人描写がふん

(1) この著書は『ゴロヴニン船長が一八一、一八一二、一八一三年に日本人のもとで捕虜とされた椿事ならびに日本国および日本国民についての彼の論評を交えた手記』という長い題名を持ち、サンクト・ペテルブルグで一八一六年に出版された。これはただちに欧米各国語に翻訳されて広く読まれ、ペリー提督も日本へ来る前に熟読玩味したという。邦訳は、古くは『日本幽囚記 上・中・下』（井上満訳、岩波文庫、昭一八）があるが、入手は困難。他に『日本俘虜実記 上・下』、『ロシア士官の見た徳川日本』（徳力真太郎訳、講談社文庫）がある。

だんに盛り込まれている。

ゴロヴニン艦長は日本人の何に驚いたか？

護送中ゴロヴニンたちは緊縛のきつさに音を上げる。擦れた箇所が化膿するほど過酷であったが、道中の観察眼は冷徹であった。休泊地に着くたびに、寄ってきた人物たちから質問を浴びせかけられ、その「好奇心」の旺盛ぶりに驚かされる。それは上官からの命令によるものかもしれないと警戒するけれど、やがてそれは上下を問わず日本人に広く見られる、国民的性格であることに気づく。しかしこの「好奇心」は体系的な知識に根ざしたものではなく、答えさせられる方にすれば、迷惑きわまりない愚問が多かった。当時蝦夷地にいた日本人には、光太夫帰還のいきさつも、フヴォストフ・ダヴィドフによる樺太・千島での日本集落襲撃事件のことも知れわたっていたから、それに関する質問であれば、あちこちでくり返されても不思議はなかった。ゴロヴニンが閉口したのは、質問者の知的水準が疑われるような質問が、なんの脈絡もなしに、高官の口からさえ執拗に発せられることだった。

ゴロヴニンはアイヌのことを「クリール



図2 ゴロヴニン
(出典は図1と同じ)

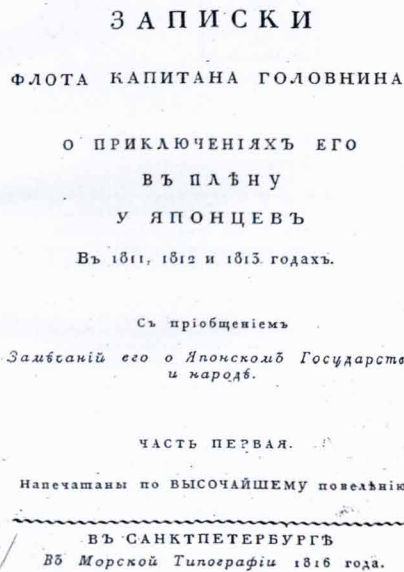


図3 『ゴロヴニンの手記』初版扉（正式書名は注1参照）

人（「千島人」の意）」と呼び、彼らの集落と日本人のそれとの違いにも注意深い目を向けている。一言でその違いを言うなら、「清潔度」ということができよう。彼はいたるところで、街路や建物に附属する菜園や庭園、屋内の綺麗さに感嘆する。また日本人住民はアイヌに比べて活気があり、顔面に「満足の色」が浮かんでいると指摘する。一方で食事の粗末さにはいたるところで苦情をもらしている。じつは、ゴロヴニンは無意識のうちに、ロシアの、けっして清潔ではない町並みや家並み、ロシア人の生活ぶりと比較していたのであろう。

日本人が風呂水を換えずに複数の人が順に入浴する習慣に対しては、現在でもロシア人なら十人が十人顔をしかめる。この「奇習」を体験させられて、ゴロヴニンも驚く。ただ、かれが並みのロシア人でなかったことは、つぎのコメントによく現れている。「しかし驚くことには、われわれの見張りをする直参の獄卒たちが三四人で、われわれの入ったあとの風呂水に一滴も新しい水を加えないで、入浴した。これを見るとわれわれは、すっかり安心した。彼ら直参の身分は、前にも述べて置いたように日本では相当の尊敬を受けている。これを見ても、多くのアジア人が汚れた存在として認めるキリスト教徒を、日本人が少しも毛嫌いしたり、卑しめたりしていないことが判る」。一点の事実認識から、その背景や文脈を読み取るこの能力は、ゴロヴニンがすぐれた文化論学者に匹敵する資質の持ち主であったことを語っている。

人間性にみちた感情の交歓

ゴロヴニンが観察した同時代の日本人の職種は、囚人であったからおのずと限られてはいたが、意外に幅広い。彼らだけでなく、松前や函館の町民や農漁民も、サハリンや南千島でフヴォストフらによる襲撃の被害を知りながら、ゴロヴニンたちが脱走

(2) 『日本幽囚記』上、二三四頁。ただし、田漢字、田坂名遣いは現代の表記にあらためた。以下同じ。

に失敗して逮捕され、縄を打たれて連れ戻される道すがら、侮辱したり嘲笑したりする者は皆無で、みな同情のまなざしを向けたのである。ゴロヴニンたちが幽閉から解放されたれ、無事帰国できることを知ると、老若男女やこどもたちまでもが集まってきて、心から祝ってくれた。

虜囚たちが話を交わした頻度をもっとも高かったのは、当然ながら番人と通詞である。当初通訳にあたったのは、アイヌ語通詞で五〇がらみの上原熊次郎一人であった。おそらく中央政府は事態の重大性を認識したのであろう、若くて語学的才能に秀でた人物を松前に派遣する。名を村上貞助といい、ゴロヴニンたちから直にロシア語を会得し、たちまち優れた日本初のロシア語通詞となった。貞助が優れていたのは言語習得の才ばかりではない。彼は幕府の最高機関へ届けられるロシア語文書の翻訳に際して、問題解決の障害となりそうな部分を慎重に「改竄」さえた。ゴロヴニンも滞在が長引いたおかげでかなり日本語が分かったので、翻訳は事実上、日露の共同作業になった。貞助は一貫して虜囚たちに同情的で、法と規則の許す限り、場合によってはそれを犯してまで、あらゆる便宜をはかった。しかし、疑心暗鬼だったゴロヴニンは、貞助だけでなく、番卒その他接触のあった日本人たちから寄せられた好意を素直に受け止めず、しばしばその裏を読み取ろうとした。

ゴロヴニンにそうさせたのは、「日本人は猜疑心が強い」という先入見であった。フヴォストフが略奪した日本商品について

いた荷札を、うっかり葉にして本に挟んでいたことが露見したとき、ゴロヴニンは自分の軽率さをくやんで「他の場合なら何の注意も惹かぬようなこんな愚にもつかぬものが、ここでは事件を益々紛糾させるのだ。それも相手もあるうに、どんな些細なことでも針小棒大に騒ぎ立てる、この用心深く、臆病で、猜疑心の強い日本人の目の前で起こったのだから堪らない！」と書いている。⁽³⁾

二年二ヶ月以上にわたる「強制的日本滞在」の期間で、いよいよ釈放されそうだと安心して居住できたのは、ゴロヴニン自身の言に従えば、わずかに最後の六ヶ月のみであった。先の二〇ヶ月の半ばには、六晩ものあいだ松前の嶮岨山中をさまよい、谷に落ちて負傷したりした脱走事件もあった。心休まる日は一日もなかったといつてよいだろう。冷静沈着なゴロヴニンでさえ、日本人の「不可解な言動」の裏の裏を読まずにはおれない心理は、十分理解できる。

「野蠻視」からの脱却

ロシア人捕虜にたいして同情的だったのは、彼らを近くで見かけることのできた人たちがかりではなかった。国後から函館へ護送される途中ゴロヴニンは、「婦人のうちには、われわれに水や食物を出して、涙を浮かべて見つめる者もあった。現在ヨーロッパの文明人たちから野蠻人と思われる日本人は、実にこんな感情をもっているのだ！」と感激している。⁽⁴⁾ また牢屋の待遇について、その清潔さや食事の質から

「日本の法律はこの点では多くの西洋諸国

の法律よりも比較にならないほど人道的だと断言して憚らない」とも書いている。⁽⁵⁾ 公文書への署名の仕方を見て、ロシア側の文書に対する態度が杜撰かどうかという議論に触れ、「この双方の意見のうちどちらが正しいか、又日本人は未開人という名にふさわしいかどうか、読者の判断にまかせよう」と言って、ゴロヴニンは西欧やロシアの「常識」に疑義を挟んでいる。⁽⁶⁾

一方通詞たちが、老中職の権威者たちも交渉相手からの文書に啓発され、「ロシア人は熊でも、野蠻人でもなくて、人道的な同情心ある人間と悟るであろう」と言い合っていることにも言及している。つまり当時日露は実際に会おうまで、お互いに相手を非文明人と見ていたわけである。ゴロヴニンは文明にまつわる差別意識に毒された時代の人間であったが、彼は自分の体験から、それを相対化して見るための一歩を踏み出したといえるだろう。ゴロヴニンがえて足立左内や馬場左十郎との交流を詳しく紹介しているのは、この蘭学者たちが西欧にひけをとらない学識をそなえた人たちであることを言いたかったからであろう。これは「日本Ⅱ非アジア」論という、オリエンタリズムの一変形であるが、時代的制約を考え合わせるなら、同時代人の中での彼の識見の高さは認めるべきだろう。

(3) 『日本幽囚記 上』、三三五頁。

(4) 『日本幽囚記 中』、四七頁。

(5) 同書、六九頁。

(6) 同書、一九八頁。

パレスチナ問題における「アジア」

岡 真理 MARI OKA



岡 真理（おか まり）
一九六〇年生れ。東京外国語大学アラビア語科卒業、同大学大学院外国語学研究所修士課程修了。京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。現代アラブ文学専攻。現代世界に生きる人間の普遍的思想課題としてパレスチナ問題について考えている。著書に『葉椰子の木陰で 第三世界フェミニズムと文学の力』『彼女の「正しい」名前とは何か 第三世界フェミニズムの思想』（以上、青土社）、『記憶／物語』（岩波書店）など。

1. オリエンタリズムと信仰の人種化

今年二〇〇八年、パレスチナ問題はその発生から六〇年目を迎えた。一九四七年十一月、国連総会は、ヨーロッパにおけるユダヤ人難民問題の解決のために、パレスチナを分割し、そこにアラブ国家とユダヤ国家を建設するという案を採択する⁽¹⁾。翌四八年、ユダヤ人国家イスラエルがパレスチナに誕生し、その結果、この地に暮らしていたユダヤ人ならざる者たち、すなわちイスラーム教徒とキリスト教徒のパレスチナ先住民八〇万以上が、故郷を追われ、難民となった。イスラエル出身のユダヤ人の歴史家イラン・パペは、パレスチナ人に対するこの民族浄化は、パレスチナにユダヤ人国家の建設を目指すシオニズムのプロジェクトに本質的かつ不可避的に内在するものであったと論じている⁽²⁾。

「パレスチナ問題」と言うとき日本では、「遠い中東」の問題と思われがちだが、地理的には「中東」はヨーロッパよりはるかに日本に近い。西アジアと北アフリカから成る中東の東半分はアジアであり、東アジアと地続きなのだ。いや、「地続き」と言うなら、ヨーロッパとも地続きのはずだ。

だが、なぜかユーラシアは、私たちの認識の中で、ヨーロッパとアジアという二つの異なる「大陸」に分節されている。ヨーロッパと北アフリカの関係についても同じことが言える。私たちはあたかも地中海をはさんでヨーロッパとアフリカという二つの異なる世界があるかのように考えているが、ローマ帝国がそうであったように、地中海は二つの大陸を分かつのではなく、むしろ環地中海文明圏と呼ぶべきひとつの有機的世界を形成しているのである。

世界をヨーロッパと非ヨーロッパに二分するこの思考様式こそ、エドワード・サイードが「オリエンタリズム」と名づけ批判したものであり、ヨーロッパの「ヨーロッパ中心主義」が生み出したものにほかない。ユーラシアを「ヨーロッパ」と「アジア」に分断し、地中海世界を「ヨーロッパ」と「アフリカ」に分断して怪しくない私たちの世界認識とは、世界がそのようなものとしてあるから、では決してなく、オリエンタリズムの「効果」であり、私たちがいかに根深くヨーロッパ中心主義的な世界観に冒されているかの証左でもある。ヨーロッパの近代が地球規模に拡張された現代世界では、ヨーロッパ中心主義の思考もまた地球規模で私たちの世界観、歴史観

を支配しているのだ。

このヨーロッパ中心主義の思考において「ヨーロッパ」と「非ヨーロッパ」を分かつメルクマールは「信仰」である。ユーラシアにおいてトルコ以东が、そして、地中海の南側が「オリエント」とされるのは、これらの地域がイスラームを信仰しているためである。だが、ヨーロッパ中心主義は、単に信仰を弁別するのではない。信仰の違いをもとに、「オリエント」とされた世界の人間たちは「オリエンタルズ」（東洋人）、すなわちヨーロッパ人とは異なる人種とさ



エルサレム旧市街
キリスト教会とイスラーム寺院が並ぶ

(1) 国連総会決議一八一号。

(2) Ilan Pappé, "The Ethnic Cleansing of Palestine" 2006, One World.



エルサレム旧市街
ユダヤ教の聖地、嘆きの壁に隣接するイスラームの聖地、ハラム・アル＝シャリフの岩のドーム

れるのである。これにより、トルコ人は「アジア人」、北アフリカの人々は「アラブ人」と人種化される。つまり、信仰が人種化されるのである。ヨーロッパにおけるユダヤ差別は日本語で「反ユダヤ主義」と呼ばれるが、英語ではAnti-Semitism、直訳すると「反セム主義」である。「セム」とは、ユダヤ人とアラブ人を人種として同定する呼称であり、そこには、「われわれ」ヨーロッパ人とは違う、アジアに出自を持つ人種的他者という含意が孕まれている。

信仰によって人間を「人種」化し差別する思考、それが歴史的にヨーロッパ・キリスト教社会を特徴づけてきた。ユダヤ差別はヨーロッパの歴史的宿痾であるが、その根源には、信仰によって人間を差別的に人種化する、この価値観が存在する。パレスチナ問題が巷間一般的に、「ユダヤ人」と

「アラブ人」の、あるいは「ユダヤ」と「イスラーム」の、数千年にわたる宿命の民族対立、宗教対立として理解されているのも、こうしたヨーロッパ的思考の結果ないし効果にほかならない。なぜなら、アラブ・イスラーム世界においては、ユダヤ教徒も「アラブ人」として、イスラーム教徒やキリスト教徒の隣人として千数百年にわたり共生してきたのだから³⁾。それが、イスラーム世界の歴史である。そうした歴史的事実が私たちの世界認識からすっぱり欠落し、あたかも、社会の多数派とは異なる信仰をもつマイノリティが、その信仰を理由に差別されることなく社会の対等な一員として人権を保障されることが、ヨーロッパ近代によって初めてこの世界に誕生しえたものであるかのように私たちが考えてしまふということ、それこそがヨーロッパ中心主義にほかならない。

内面化されたヨーロッパ中心主義が、古くはイスラーム革命直後のイラン社会や近年ではタリバン支配下のアフガニスタンのイメージとも相俟って、私たちはイスラーム社会というと、イスラームの「掟」によって一元的に支配された、異なる価値観や異なる信仰に対して不寛容な社会を思い浮かべやすい。だが、事實はまったく逆だ。イスラーム世界とは、モスクもあればキリスト教会も、シナゴーグ（ユダヤ教寺院）もある、異なる信仰をもつ者たちが隣人として共生する、他／多なる者たちに開かれた社会である。イスラーム法下ではユダヤ教徒もキリスト教徒もイスラーム教徒と同じ「啓典の民」として、為政者は彼らの信

仰の実践、宗教共同体の維持、生命・財産の安全を保障する義務を負った。これがイスラーム社会の原則である。三宗教の聖地であるエルサレムとは、イスラームの統治のもとで、三つの宗教が歴史的に共生してきた象徴なのである。

2. アジアに移植された ヨーロッパ問題

現代世界に生きる私たちは、ある特定の政治体制のもとでの、異なる思想、異なる価値観に対する徹底的な不寛容や非民主的な社会のありようを、たとえば二〇世紀のヨーロッパ社会におけるナチズムやソ連東欧社会の共産主義を通して知っている。にもかかわらず、それをもつて私たちは、そうした不寛容がドイツ民族、あるいはヨーロッパ社会に固有かつ本質的なものであるとは考えない。だが、イスラーム世界の場合は、ある特定の体制のありようが、「イスラーム」の本質として敷衍され、了解されてしまう傾向にある。

私たちはまた、ユダヤ教徒がキリスト教徒ヨーロッパ人の「他者」、異質な人間として、ヨーロッパの歴史を通じ、差別され迫害されてきたことを知っている。たとえばイベリア半島は西暦八世紀以来八百年間にわたりアラブ・イスラーム世界だったが、十五世紀末、最後のイスラーム王朝が破れ、ヨーロッパ人によるレコンキスタが完了したアンダルシアで住民たちをいかなる運命が襲ったか。イスラーム教徒とユダヤ教徒、すなわちキリスト教徒以外の者たちに対する「改宗か追放か」の二者択一だった。

(3) 「アラブ人」とは、アラビア語を母語とする者、アラビア語という言語で培われた歴史や文化に自らの歴史的、文化的アイデンティティを見出す者たちのこと。アラブ社会のアラブ人は、イスラーム、キリスト教、ユダヤ教など、さまざまな宗教を信仰している。他方、アラビア語で「ヤフド」Yahūdは、「ユダヤ教徒」を意味し、アラブ社会では、「アラブ人」であることと「ユダヤ教徒」であることはなんら矛盾しない。



占領地に建設された分離壁、いわゆる「人種隔離壁」

「ヨーロッパ」とどまるためには、キリスト教徒でなければならなかった。こうして、故郷にとどまるために多くの者が先祖代々の信仰を棄てることを余儀なくされ、また、信仰を守った者たちは故郷を去らねばならなかった。そして、二〇世紀のヨーロッパにおける「ユダヤ人」に対するジェノサイド……。異なる信仰に対する不寛容とは歴史的に見ればむしろ、ヨーロッパ・キリスト教社会の特質にほかならず、しかもそれは、歴史を貫いて「ヨーロッパ」なるものの根源を蝕む病理なのだが、にもかかわらず、私たちがヨーロッパをそのようなものとしてなかなか認識することができないのは、かくも根深くヨーロッパ中心主義の価値観に絡めとられてしまっているためである。

さて、「パレスチナ問題」とは、巷間通

俗的に理解されているような「アラブ人」と「ユダヤ人」の歴史的対立、あるいは聖地をめぐる「イスラーム」と「ユダヤ」の宗教対立ではなく、ヨーロッパにおいて「ユダヤ人問題」として歴史的に発現してきた、信仰を理由に人間を人種化し差別するという、ヨーロッパ社会特有の病理をパレスチナに移植したものにほかならない。イスラーム社会においては、イスラーム教徒と信仰を異にしようとして、キリスト教徒もユダヤ教徒も同じ社会で共生してきたのであり、アラブ社会にあつては、ユダヤ教を信仰する者もまた、アラビア語を話すアラブ人なのだから「ユダヤ人」と「アラブ人」の対立など論理的に起こりえようはずがなかった。だが、そのアラブ・イスラーム世界の一部であるパレスチナに「ユダヤ人」の国家がつくられることで、ユダヤ教を信仰するものは「ユダヤ人」、イスラーム教徒とキリスト教徒は「アラブ人」とされ、信仰を人種化するというヨーロッパの論理がアラブ世界にもたらされたのである。こうしてユダヤ教以外の信仰を持つ者たちは民族浄化の対象となり、また、イラクやモロッコ、イエメンなどアラブ諸国でアラブ人として生きてきたユダヤ教徒たちは彼らの歴史的文化的アイデンティティを形づくってきたアラブ性を否定され「ユダヤ人」とされて、新生ユダヤ人国家に移植されたのだった。

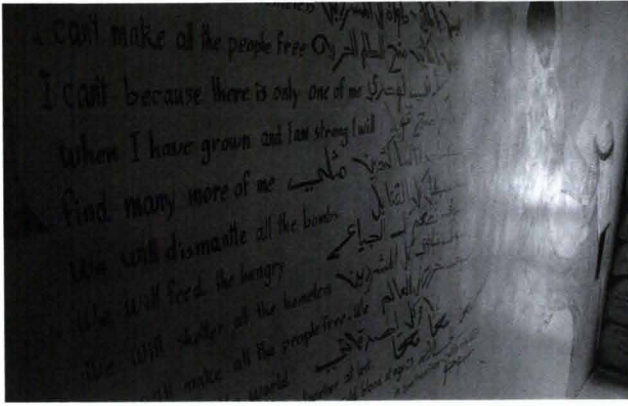
パレスチナ問題の歴史的起源とは遡ってもせいぜいのところ、ヨーロッパで、パレスチナにユダヤ人国家建設運動が始まった十九世紀後半に端を発する、近代百年あま

りの問題に過ぎないが、しかし、ヨーロッパ・キリスト教社会の歴史的病理がパレスチナ問題の根源にあると考えるならば、問題の起源とは、イスラーム世界ではなくヨーロッパ・キリスト教世界の歴史を千数百年、遡行しなくてはならないことになるだろう。「パレスチナ問題」とは「ユダヤ人問題」であり、そして、「ユダヤ人問題」とは、近代のヨーロッパ社会が考えたような、ヨーロッパにおいてアジア人種が引き起こす問題ではなく、信仰の違いによって人種的他者を生み出す「ヨーロッパ問題」そのものである。十九世紀末、シオニズムの指導者は、ヨーロッパ社会においてキリスト教ではなくユダヤ教を信仰する者たちを「ユダヤ人」という「民族」nationであると考え、大英帝国の軍勢力を支えに、パレスチナというアジアの地に、ヨーロッパのユダヤ人のためのネイション・ステイトの建設を目指したが、彼らは、当時のヨーロッパ社会の時代精神であつた帝国主義列強の植民地主義とアジア人に対するレイシズムを共有していたのみならず、信仰の人種化というヨーロッパ社会固有の価値観をも内面化していたのだつた。その意味で、ヨーロッパ人キリスト教徒がいかに彼らを人種的他者と見なそうと、彼らもまたまぎれもない「ヨーロッパ人」であつたと言えよう。

3. パレスチナ問題の脱構築

二〇〇二年、イスラエルによる占領に抗する占領下住民の抵抗運動に対しイスラエ

(4) アラブ諸国出身のユダヤ教徒はアラブ系ユダヤ人のはずだが、アラブ人をユダヤ人の人種的他者と規定することでユダヤ人国家から排除したイスラエルにおいて、ユダヤ人がアラブ人でもある、というのはいかなる矛盾である。そのため、これらアラブ系ユダヤ人は、「ミズラーヒム」(東方系ユダヤ人)と呼ばれ、その「アラブ性」を抑圧される。他方、イスラエル総人口の二〇%を占めるパレスチナ系の人々は、「イスラエルのアラブ人」と呼ばれ、イスラエル建国以来しばしば、アラブ諸国への移送(追放の婉曲表現である)が国会で議論される。「アラブ人」とは、この地に対して住まう権利を否定された者たちを名指す呼称なのである。



ベツレヘム近郊のディヘイシャ難民キャンプにある青少年センターの壁に描かれたアメリカの黒人少年ジョージの抵抗詩。英語原文にアラビア語の対訳がついている。ジョージはのちに殺された

ルの攻撃がエスカレートし、パレスチナ人住民のあいだに多大な犠牲を出していた頃、サンフランシスコのカトリック教会のラビ・コプティ神父は、「世界のクリスチャンよ、恥を知れ」Shame on All Christians という激烈なタイトルを冠した一文を著している⁽⁵⁾。その中でコプティ神父は、パレスチナの地でキリスト教徒同胞が被っている犠牲に対しくも世界のキリスト教徒が無関心を決め込んでいるのは、イスラーム教徒を「アラブ人」という、ヨーロッパ人の人種的他者と見なし、自分たちと同等の人間性を認めてこなかったヨーロッパの歴史的なレイシズムを世界のキリスト教徒もまた共有しているせいであるとして、厳しく告発している。

コプティ神父が指弾するこのレイシズムはパレスチナ問題だけに限らないのではな

いか。イラクのアブ・グレイブ収容所やキューバのグアンタナモ基地にある収容所における米兵による被拘留者に対する虐待や拷問の背景には、イラク人やアフガニスタン人やパキスタン人などイスラーム教徒である彼らに対するアメリカ人のレイシズムが作用しているように思えてならない。アブ・グレイブ収容所における米兵による人権侵害の実態が明らかになってもなお、多くの米国民が、テロリストに対してならば拷問をしてもかまわないと回答しているのは——それは、「テロリスト」には「われわれ」と対等な人権や人間性はないということである——、「テロリスト」とされるのがイスラーム教徒であり、アラブ人という人種的他者であるからではないだろうか⁽⁶⁾。

パレスチナ問題を「ユダヤ人」と「アラブ人」の歴史的な民族対立と見なすのは端的に歴史的誤謬であることはすでに述べた。同時にこの問題を、パレスチナという土地の領有をめぐる「ユダヤ人」と「パレスチナ人」が民族的に対立していると見なすこともまた、問題を矮小化し、問題の本質を見逃すことになるだろう。では、パレスチナ問題においては、いったい何と何がせめぎ合っているのか。

イスラエル国家は自らを世界のユダヤ人の祖国と謳う。そして、反ユダヤ主義が遍在するこの世界でホロコーストが二度とユダヤ人の身に起こらないためにユダヤ人国家が必要なのだと主張し、パレスチナ人に対して行使された、そして今なお、行使され続けるありとあらゆる暴力を正当化して

いる。だが、イスラエルのそうした主張に、ユダヤ人のすべてが同意しているわけではない。たとえばユダヤ教徒のモロッコ人作家エドモン・アムラン・マリーフ（一九一七年〜）は、自らをあくまでもユダヤ教徒のモロッコ人であるとして、ユダヤ人国家に移住することを拒み、アラブ世界であるモロッコにとどまり続けている。また、アメリカの大学で教鞭をとるイラク出身のユダヤ人研究者エラ・シヨハットは、「アラブ系ユダヤ人」Arab-Jewであることを自らのアイデンティティの前面に押し出す。シオニズムはユダヤ教徒をすべて「ユダヤ人」というネイションに同定し、「アラブ人」をその人種的他者と見なすが、マリーフもシヨハットも自らのアイデンティティの多源性を主張することで、シオニズムが捏造する「ユダヤ人」対「アラブ人」という虚構の民族対立を脱構築し、シオニズムの主張そのものに明確な「否」を突きつけているのである。彼らが示しているのは、パレスチナ問題とは、信仰を異にする者たちを自らの人種的他者と見なし、彼らに自分たちと同等の人間性を認めず、他者を排除した社会で自分たちと同じような者たちだけで生きる、そのような社会を求める思想と異なる価値観をもった多様な他者すべてに對し開かれた社会で、他者とともに隣人として生きる社会を求める思想の闘いであるという事実にはかならない。

(5) ラビ・コプティ「キリスト者の恥」『現代思想』二〇〇二年六月臨時増刊号。

(6) アレック・ギブニー監督『米國・闇へ』(民主主義 世界10人の監督が描く10の疑問)より。

日韓関係における「文化」の問題

小倉紀蔵

KIZO OGURA



小倉紀蔵（おぐら きぞう）
一九五九年東京生まれ。ソウル大学哲学科博士課程単位取得。専門
は韓国思想。著書に『韓国、ひき裂かれるコスモス』（平凡社）、『歴
史認識を乗り越える』（講談社）など。

1. 「問題系」としての日韓関係

日本では（中国・台湾などに遅れて）二〇〇三年から韓国大衆文化ブームが起きた。

これを「韓流」と呼ぶ。日本における「韓流」ファンは中高年女性が多く、また彼女たちの若干奇矯ともいえるファン行動がマスコミに大々的にとりあげられたことにより、「韓流」といえば多少とも揶揄や軽侮の口調で語られるということが多かった。しかしながら、実はこの現象には、現代社会をわれわれがいかに認識しそれをどう構築してゆくに關するヒントが数多く含まれているのである。換言すれば、現代社会における様々な「問題」の類型や原型を、われわれは日韓関係やその背後に横たわる日朝関係に見ることができるのである。このような観点で朝鮮半島に相対するとき、それは「方法論」「問題系」という新たな相貌を呈しつつわれわれに立ち現れることになるだろう。

そもそも「日本」という国家が成立する以前から、朝鮮半島は日本列島に住む人びとにとって、世界認識における「方法論」「問題系」そのものであったということもできる。朝鮮半島から漢字・仏教・儒教が

伝わったときも、このグローバルイズムに対してどのような態度決定をするか、ということは日本列島に住む人びとの社会構成および権力構造自体を決定する最も重要な問題系であったはずだからである。

その後も、たとえば戦国時代から江戸時代への移行期に当たっては、朱子学というイデオロギーをどのように把えるかという問題は、朝鮮半島認識と密接にリンクした形で時の為政者に認識されていた。

またたとえば戦後の日本における朝鮮半島認識は、共産主義や開発独裁をどう考えるかという問題と直結していたし、さらにいえば、七〇年代から活発化した日本の左翼陣営による贖罪意識に蔽われた植民地支配研究は、西欧においてその後活発化するポストコロニアリズム研究との関係性の中で把握されるべき現象であった。

このように、日本における朝鮮半島認識には、時代に密着した深刻かつ本質的な「問い」が内包されてきた。今般の一種低俗ともみなされうる「韓流」ブームにおいても、その点は同断である。…これが、私の基本的な視角なのである。

本稿では、紙幅の関係上、「韓流」をめぐる「問題系」の一側面として、東アジアにおける「文化」というテーマに関して考

えてみることにする。

2. 「文化」の二面性

「韓流」はまず何よりも、東アジアにおける「文化」をめぐる現象であったという点に注目すべきである。

東アジアをどのように構築するか、という議論において「文化」という分野が登場したのは、実は最近の出来事である。従来は政治・外交・安全保障・経済といった分野が主流であったが、これらは各国のナショナル・インタレストが衝突する分野であった。これに対し、文化という分野はトランスナショナルな媒介の役割を担うものとして期待されている。それを端的に表したのが「文化はセーフティネット」という考え方であろう。政治や外交の分野で摩擦が大きくなっても、市民同士の間で相手国の文化に対する好感度が高ければ、両国間のセーフティネットとなる、という考えである。

しかし当然ながら、文化にはこれとは正反対の側面もある。というのは、文化はまさに「アイデンティティ」という概念と強く結びついているからである。特に東アジアにおいては、各国の儒教的な「文化Ⅱ文

「明」論的アイデンティティ（文化自尊）が、相互の摩擦を生んできた。儒教的伝統と国民国家の枠組みとの合体によって、自国の文化が他国の文化よりも上位にあると認識する序列的「文化Ⅱ文明」論（つまり自国の特殊な文化こそより優れた普遍的な文明であると認識するパターン）を東アジア各国が共有することによって生じる競合的摩擦である。

この裏側には、文化をハイブリッドなものと考えるのか、あるいは「純粋性」「本質」という概念で考えるのか、という立場の違いも介在している。多くの場合、前者は「文化ⅡトランスナショナルⅡセルフ・ネットワーク」派と相性がよく、後者は「文化ⅡナショナルⅡアイデンティティ」派と相性がよいと考えられている。しかし近年、グローバル化の浸透とともに、そのような二分法的思考に根本的な修正が加えられた。その一現象として「韓流」という動きが起こった、と考えられるのである。

3. 文化と文明の融合

文化の問題を考える際に参照すべき理論的枠組みは、いくつもある。ポスト構造主義、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアリズムは、その中でも最も有用な枠組みとして挙げられるであろう。しかし、文化の越境性と本質性をめぐる議論は、東アジアにおいてはまず、儒教的伝統との関係という文脈で考えられるべき問題であると私は考えている。以下、その内容について簡単に述べよう。

そもそも儒教においては、「文明と文化の同一視」という思想的枠組みが強力に存在した。これは、「普遍的な文明がそもそも文化でもあり、ある特殊な文化が人類の文明でもある」という考え方である。

儒教においては、きわめて特殊な夏・殷・周という王朝の制度・価値観・文物すなわち「文化」を、人類の理想的な普遍的「文明」とであると規定する。そして儒教的思想運動の根幹は、人類の「文明」的進歩をこの三代の「文化」へと遡及して回帰してゆくことにありと規定し、現実を果敢に改革してゆくことにある。

韓国の文化的状況を大きな視野で捉えてみることにすると、そこには、朝鮮王朝時代（一三九二～一九一〇、ただし一八九七～一九一〇は大韓帝国）から現代にまで続くひとつの巨大なパラダイムが存在するのに気づく。すなわち、「伝統（前近代）Ⅱ儒教」対「近代Ⅱ西洋化Ⅱ反儒教」というようなダイコトミー（二分法）を私は採らない。韓国の伝統（前近代）も近代も脱近代も、その裏側には儒教という軸がある。いうならば儒教という思想との関係によって、それらは規定されていると考えるのである。

朝鮮が朱子学をその国家イデオロギーの中核に据えたとき、儒教の「文化Ⅱ文明」コンセプトは電撃的に「東夷（つまり非文明）」たるこの地に移入された。

朝鮮王朝の儒教において、最も重要なのは「老論」というキーワードではないかと私は考えている。「老論」は朝鮮王朝時代の党派のひとつであり、十七世紀以降、朝

鮮政界において圧倒的な支配力を維持した執権党である。

老論派が最も強い影響力を誇っているのは、その執権期間が長かっただけではない。朝鮮後期の文明的アイデンティティ（これはすなわち文化的アイデンティティでもある）を規定した最も強力な枠組み、ひとつの巨大なパラダイムを創造したからである。

老論思想の枠組みをひとことというならば、「小中華パラダイム」といえる（近年、「朝鮮中華主義」という言葉もよく使われている）。明（二三六八～一六四四）が滅んだ後に中華の伝統を継承したのはオランケ（夷狄Ⅱ野蛮人）たる女真族の清（一六一六～一九一二）ではなく、朝鮮なのだ、という思想である。すなわち、「完全に朱子学化された朝鮮の文化こそ世界の文明的中心である」というのが「小中華パラダイム」ないし「朝鮮中心主義」であり、朝鮮は十七世紀以降二十世紀に至るまで、この幻想的な「文化Ⅱ文明」パラダイムに自閉しつづけたのである。

ㅏ	[ア] [a]	日本語のアよりも もっと強くはっ きりしたア	ㅑ	ㅓ	ㅕ
ㅓ	[イ] [i]	はっきりと強いイ	ㅕ	ㅗ	ㅛ
ㅗ	[ウ] [u]	口を丸めて前に 突き出してウ	ㅛ	ㅜ	ㅠ
ㅜ	[ウ] [u]	唇を左右に真一 文字に引っぱってウ	ㅠ	ㅡ	ㅚ
ㅡ	[オ] [o]	口を丸めて前に 突き出してオ	ㅚ	ㅜ	ㅠ
ㅚ	[オ] [o]	口をゆるく開けて オ	ㅠ	ㅓ	ㅕ
ㅓ	[ヤ] [ja]	日本語のヤとはば 同じ	ㅕ	ㅗ	ㅛ
ㅠ	[ユ] [ju]	口を丸くして前に 突き出してユ	ㅠ	ㅜ	ㅠ

図1 ハングル
「韓流」の影響で、韓国語（朝鮮語）を学習する日本人が急速に増えた。

4. 文化と文明の相克

「文明と文化の同一視」というプロジェクトが進行したのと同時に、それと表裏一体のものとして他方では、「文明による文化の疎外」というプロジェクトが企画され実行されていたことが忘れられてはならない。

この背景には、「文化の分裂運動」がある。これは、文化を「高級な文化」と「低級な文化」に、「好ましい文化」と「忌むべき文化」に、完全に分離することである。「文明による文化の疎外」における「文化」というのは、文明と同一視されるところの（普遍的）文化Ⅱ中華ではなくて、文明に排除されるものとしての（特殊）文化である。

すなわち儒教的発想によって文化という概念が文明という普遍に吸収されてしまった結果、特殊としての土着文化や固有文化、非儒教的なさまざまな文化というものが、排除される対象となってしまったのである。

5. 一九九〇年代の変化

さて、「小中華パラダイム」における「文化Ⅱ文明」観はその後、植民地時代として解放後の開発独裁の時代には空しく崩れ去ることとなった。ひとことといえば、朝鮮・韓国の「文化」と、西欧や日本がもたらしてくる「文明」との間に等号は成り立たず、その摩擦と齟齬のみが強調される時代が長く続いたのである。この経緯に関

してはここで言及できないので、拙稿『小中華パラダイム』のコスモスと亀裂：伝統・近代・脱近代の韓国文化』（韓国、ひき裂かれるコスモス』所収、平凡社、二〇〇一）を参照していただきたい。

本稿で語りたいのは、ごく最近の現象である。具体的には、一九九〇年代の動きに焦点を当てたい。

九〇年代の韓国の変化を最も象徴的に表わすコンセプトが、金泳三大統領（任期一九九三～九八）の唱えた「世界化」である。八〇年代には、新しい文明のパラダイムの可能性を模索しつつ、「韓国の特殊性にこそ普遍的な価値・理念の可能性が宿っている」ということが盛んに唱えられたのだが、この観念は九〇年代になると、「文化の商品化」のスローガンとして「最も韓国的なものが最も世界的」という資本主義的フレーズに吸収されてしまったのである。そしてこれがまさに「世界化」の中身なのであった。

すなわちグローバルizmという「文明」の潮流の中で、グローバル・マーケティングによって商品化Ⅱ普遍化Ⅱ文明化された固有「文化」の力を高める、という意味で、ここに再び、植民地時代以降分裂していた文化と文明とは劇的に合体をしたのである。これは画期的なことであった。

このように伝統的な「文明と文化の一致」という、おそらく韓国人にとって非常に心地よい文化心理の状態というものが、グローバルizmによって復活した。

そしてこれこそは、かつての「小中華パラダイム」がその「中身」を変えながら

「枠組み」として復活したことを意味する。もちろんここでの「文化」は、かつての

ように「中華」としての高級文化のみを指すのではなく、「孝思想」から映画やテレビドラマなどの大衆文化、そしてキムチなど韓国の生活文化すべてを指すわけである。さらには、それらは「純粋性」という尺度でなく「ハイブリッド性」という尺度で評価されるようになった。なぜならそれらはポストモダン的な「商品化」という普遍的尺度によって裏打ちされ、価値を与えられる存在として規定しなおされたからである。グローバルizmという新文明において、自らの文化をよりハイブリッド化し、高度に商品化Ⅱ普遍化したものが勝者となる、というのが「世界化Ⅱ文明化」の論理である。

そしてこの流れを決定づけたのは、韓国社会のＩＴ化と金大中大統領（任期一九八八～二〇〇三）による文化開放政策である。それまでは「韓国文化の世界化」が叫ばれながらも、外国文化の韓国への流入は制限されていた。このような矛盾を、金大中大統領は取り除こうとしたのである。そしてこれによってついに韓国は、自国の固有文化を文明が疎外することなく、文明と文化が融合するという幸福な時代に突入することができたわけである。

無論「文化の商品化」つまり「商品化」という意味での文化の普遍化Ⅱ文明化」には、様々な問題が内在している。しかしながら、それら諸問題をめぐる韓国社会での摩擦が、かつてのような激烈さを伴っていないのは、上述したような文化と文明の「整理」が



図2 お祭りの写真

日韓の文化的親近感が増し、2005年から毎年ソウルで、「日韓交流おまつり」が開催されている。写真はソウル市庁舎前で披露される秋田の竿灯の様子。植民地支配の記憶が残る韓国で日本の伝統的なお祭りが開催されることは、一昔前では考えられないことだった。

(少なくとも現在のところは) 整合的になされているがゆえなのである。

6. 「嫌韓流」の動き

おおよそ以上のような「文化Ⅱ文明」論的パラダイムが、「韓流」の背景には横たわっている。

すなわち、韓国大衆文化の魅力の背景には、東アジアが近代化以前に持っていた「文化Ⅱ文明」パラダイムの復活という動きがあり、それゆえ必然的に、そこにはナショナリズムの問題が含まれているのである。日本で、「韓流」の直後に「嫌韓流」の動きが顕在化したのも、このことと強い関係がある。大衆文化のレベルでの現象が、歴史認識や領土問題と密着して語られるようになったのにも、理由があるのである。

九〇年代以降、「文化」と「文明」の合致、という心地よい「小中華パラダイム」への憧れが、日本人の中にも急速に頭をもたげてきた。この中の一部が、「日本の文化は文明なり」と叫ぶ保守のグループであり、ポストモダンの時空間を浮遊する孤独な個を強く吸収して一気に勢力を伸ばした。このような右派の理念はそれゆえ、その根っこを掘れば韓国の「小中華パラダイム」主義者と同型の思考様式なのである。すなわち歴史認識問題というのは、日韓の「小中華パラダイム」主義者同士のヘゲモニー争いという一面を持っているのである(ただしそれだけでないのは言を俟たない)。

7. 東アジア共同体は「思想」から

このように考えると、「韓流」「嫌韓流」は、これから二十一世紀に、日韓両国が東北アジアの市民意識をどのように共有しながら、いかなる共同体を形成してゆくのかという問題に直結している。「新しいリージョナリズム」構築への意志が、われわれには必要なのである。

現在、東アジア共同体に関する議論が活発になされている。その際、支配的な議論のパターンは、経済や安全保障など各国の利害を機能主義的に調整してゆく、というものである。ヨーロッパ共同体は石炭・鉄鋼というきわめて「機能的」な問題から発しており、東アジア共同体もまた機能的な連携という観点から出発すべきである、という議論である。

しかし私は、そうは考えない。東アジアにおいてまず必要なのは、「価値の共有」であり、「新しいリージョナリズムの思想」であると考ええる。「価値の完全な共通はできない、という価値の共有」という多文化主義的な理念でもよい。そのような「思想の土台」がないままに、機能主義的な側面の調整を推進することは困難であり、逆に摩擦を高める結果にも通ずるのである。

8. アジアの将来へ

日韓の文化は一方ですでにインタラクティブの時代に突入しており、文化的感性という意味では、境界がなくなりつつある。

しかし他方で、歴史認識問題や領土問題が介入すると、日韓関係は途端に悪化する。

われわれにとって大切なのは、日韓関係をクリエイティブな関係に鍛え上げてゆくことである。そして文化的なクリエイティビティという意味での国境は、もはやなくしてもよいと考える。「イデオロギーの日韓関係」や「反発感情の日韓関係」ではなく、「クリエイティビティの日韓関係」に転換してゆく。そのような関係を、まずアジアの中で日韓から始めて、そしてアジア全域に広めるべきである。

アジアは今まで、全体が西欧にまなざしを向け、アジアの中で互いに見つめ合うということをしてこなかった。政治的な異質性、経済的な対立、安全保障上の摩擦、宗教的な相違などがあるのなら、文化・思想によって東アジア共同体の基礎をまず形成する、という方向性の可能性が議論されてよいであろう。そのためにはどのような新しい人間観・文化観が必要なのかを、アジア全体の関係性の中で考えてゆくのである。その際、儒教的な「文化Ⅱ文明」パラダイムをどのように脱構築してゆくべきかが最も重要な課題となる。「韓流」と「嫌韓流」の現象は、そのことをわれわれに教えてくれた。単に西欧的な学問の方法論をあてはめるだけでは、アジアの問題は解決しないのである。

そしてやがては、アジアがアジアの中で相互に見つめ合い、学び合い、創造し合うという関係を構築しなくてはならないと、私は考えている。

江戸の万国人物図

松田 清

KIYOSHI MATSUDA

来日外国人のイメージ

現代日本人は一般に、外国人だからといって相手を好奇の眼差しでジロジロみつめはしない。外国人の映像はテレビ、映画、ネット上にあふれかえっている。町中でも外国人は特異な存在ではない。大都市の街路ではすれ違う相手の素性は問題にならない。人々は互いに無関心に行き交う。

幕末明治初期に来日した西洋人は長崎、横浜、兵庫などに作られた居留地にしか居住を認められなかったため、市中に繰り出したり内陸旅行などすれば、たちまち好奇の的となった。長崎絵、横浜絵とよばれた土産物の刷り物に描かれた彼らの映像は庶民の想像力をかき立てた。

幕末開国以前ともなれば、出島に押し込められていた十二人あまりのオランダ人商館員と「スワルトヨング」（訛ったオランダ語で、黒人少年の意）と呼ばれたマレー系の従僕たち、また唐人屋敷の住人たちが長崎見物のお目当てとなった。数多くの長崎見聞録の挿絵や刷り物、また長崎の絵師の手になる巻物や掛図に召使いを従えたオランダ人が登場する。なかでも、司馬江漢『西遊日記』の挿絵はよく知られているが、

江漢の向こうをはって、諸国を漫遊した近江の画家金谷上人こと横井金谷（一七六一—一八三三）も、黒人少年と遊女を従えた、ほほえましい出島のオランダ人図を遺している（写真1）。

朝鮮通信使や琉球使節の一行、蝦夷のアイヌの人々、長崎に回送された漂着外国人



写真1 横井金谷筆 オランダ人図（扇面） 犬山市岩田洗心館蔵



松田 清（まつだ きよし）
一九四七年愛知県生まれ。名古屋大学大学院文学研究科修士課程中退。京都大学博士（人間・環境学）。京都大学人文科学研究所助手、高知大学文学部助教授等をへて、京都大学大学院人間・環境学研究所教授。専攻は洋学史、近世日欧知識交流史。主な著書に『洋学の書誌的研究』（臨川書店、一九九八）、「国際日本文化研究センター」所蔵日本関係文庫目録（一九九八）、「香雨書屋洋書目録」（武田科学振興財団、二〇〇六）などがある。

の図像も多い。これら「鎖国」日本に隣接する「異域」の人々の画像については、「鎖国」観の見直しの成果として、数年前にすぐれた展示会『描かれた「異国」「異域」——朝鮮、琉球、アイヌモシリの人びと』（大阪人権博物館、二〇〇一年四月）が開催されている。

舶載洋書の銅版画

しかし、来日することもない、また渡海して自分の目でみることもできない世界の人々の姿や風俗を鎖国下の日本人はどのように思い描いていたのだろうか。この問いを解く鍵となるのが舶載された書物の挿絵や図版、世界地図、版画集に描かれた人物像であろう。しかも、写実性に優れた銅版技術を活かしたヨーロッパ製の挿絵や図版や地図である。それらを実際に閲覧したり観察したりすることができた日本人は、阿蘭陀通詞、唐絵目利き（渡来画の検査役）、蘭癖といわれた西洋趣味の大名や幕府の官僚、その周囲に集められた蘭学者や絵師、あるいは自ら蘭癖収集家となった富裕な町人など、きわめて限られた人々であったが、模写や模刻、さまざまな通俗書への転録などによって徐々に庶民にまで浸透していっ

た。

大航海時代以来、ヨーロッパ各国で蓄積された非ヨーロッパ人の身体情報は十七世紀後半にはじまる世界旅行記や世界地図帳の出版ブームに支えられ、民族、宗教、風俗などに関する画像を通して、銅版の挿絵や図版によってヨーロッパ域内に流布した。また、十八世紀における学芸の発達は、聖書物語に依拠する宗教画や宗教書、古代神話を描いた絵画に加えて、人体解剖図集、医学書の挿絵、肖像画、風俗画、少数民族の風俗図集など、ヨーロッパ人の身体的特徴を伝える様々な銅版画を大量に生産した。こうしたヨーロッパ内外の身体情報を舶載洋書の銅版画を通して受容した江戸時代の蘭学者たち、その周りにいた絵師たちは、それをどのような知的な枠組みでとらえたのだろうか。江戸時代の蘭学者の博物学的

な枠組みは、基本的には李時珍『本草綱目』（一五九六）とドドネウス『草木誌』（蘭語版、一六四四年版など）で培われたといつてよい。東西の違いはあれ、いずれも博物学的な情報も加味した伝統的な薬学書である。したがって、彼らの博物学は人間不在、人間論なき実用的な博物学といつてよい。『本草綱目』に「人部」があるとはいえ、おもに薬種としてのヒトが記述されているに過ぎない。

一方、彼らの手に届いたビュフォン『博物誌』オランダ語版二〇巻（一七七三—一八〇二）やハウトゥイン『リンネ氏の体系による博物誌』三七巻（一七六一—一七八五）は、カトリックとプロテスタントという宗教的背景の違いはあれ、いずれも第一巻は人間博物誌から始まっている。第一巻に関する限り蘭学者たちの関心は両者の論

ずる体系的な人種論に向かわず、奇形や肥満、類人猿（オランウータン、チンパンジー）に関する記述とそれらの銅版図版が利用されたに過ぎない。

蘭学者に比べれば、ある意味で石川大浪や谷文晁などの洋風画家の方が、西洋画法の研究を通して、文晁の小野蘭山像、大浪の各種西洋人物画にみられるように、西洋的な物のとらえ方を身につけたといつてよいだろう。

江戸の万国人物図

江戸時代を通じて幕末までもっとも長く影響を及ぼした世界人物図鑑は何と言つても西川如見『四十二国人物図説』二巻（一七二〇）であろう。四十カ国の男女図からなる、いわゆる正保版「万国人物図」（一



写真2 正保版 万国人物図 個人蔵

枚、初版一六四五、写真2は再版）と同じく、本書の男女図もオランダ人がもたらした原図を長崎の絵師が模写したものであるという。『解体新書』の翻訳刊行（一七七四）をもって蘭学の勃興とする福沢諭吉流の洋学史観のために、如見は洋学者として論じられることは余りないが、福沢のように漢学を敵視せず、むしろ漢洋折衷の立場にあった同年生まれの細川潤次郎（一八三四—一九二三）は、『如見遺書』（明治三二—四〇）に寄せた序文で如見を日本における洋学の開祖と位置づけていることはここで想起してもよいであろう。

大槻玄沢の一番弟子であった地理学者山村才助は新井白石の『采覧異言』に蘭書からの新情報を盛り込んで『訂正増訳采覧異言』を著したように、如見『四十二国人物図説』についても『訂正四十二国人物図説』なる絵巻物を遺しており、これが嘉永七年（一八五四）に『海外人物輯』として刊行された。

如見『四十二国人物図説』も正保版「万国人物図」も、その典拠となった原図が何

であるかは解明されていない。しかし、石川大浪筆「西洋婦人図」と出会い、そのルーツを解明する探索の旅を通して、十七世紀ヨーロッパで流行した世界男女衣裳図集、いわゆるコスチューム本が舶載され典拠として使われたのではないか、と思うようになった。コスチューム本については古典的な書誌、コラス『コスチューム・モード総合書誌』Colas, R. *Bibliographie générale du costume et de la mode* が知られている。しかし、原書探索は容易ではない。

同じような壁に阻まれ、前進できないでいる研究テーマに伝平賀源内画「西洋婦人図」（神戸市立博物館所蔵）の典拠探がある。見つけた人には懸賞金十萬円を払う、と十年以上前に芳賀徹先生が新聞紙上で呼びかけたことがある。それ以前から気になっていたので、レイ十四世時代に流行の先端を切っていた宮廷女官の銅版肖像画が典拠にちがいないと見定めてパリに出かけ、リシュリユー街のビブリオテーク・ナショナル版画部に通い詰めた。大量の版画をしらみつぶしに調べたが、懸賞金の数倍かけ

ても徒労に終わった。カルナヴァレ図書館にある膨大な同種の版画のなかから、将来一枚の原画が見つかるかも知れない。

石川大浪筆「西洋婦人図」の典拠を突き止めた経緯を簡単に述べよう。大正昭和初期にキリシタン研究のプロモーターであった言語学者新村出の遺した来簡のなかに、昭和二年夏長野から届いた一通の手紙があった。所蔵する「西洋婦人図」のスケッチを同封して、潜伏キリシタンの描いたマリア像ではないか、と教えを乞う内容であった。新村はさすがに、書き込まれた蘭文署名からターフェルベルフと号した石川大浪の筆であることを返信で解説したのであった。偶然のことからこの所蔵者の子孫宅になお問題の「西洋婦人図」（写真3）が伝わっていることを知り、現物を調査した。

この婦人の頭上には最初「HAVANA PORTUS」（ハバナ港）の文字をもつリボ



写真3 石川大浪筆 西洋婦人図 個人蔵



写真4 ラム『世界服装図』新版

〔1〕詳しくは、拙稿「石川大浪筆『西洋婦人図』の源流」、大和文庫第一〇五号、文晁・大浪特輯号、二九—四七頁、参照。

ンが描かれていたが表装時に脱落してしまったという。これと同じポーズの婦人図が神戸市立博物館所蔵「世界四大洲図・四十八国人物図屏風」(池長孟コレクション)、早稲田大学図書館所蔵「蛮国人物図」、京都府立総合資料館所蔵「万国人物図纂」にあること、そしてドイツ人の論文から、プラハ北方ムニホヴォ・フラデイスティ城所蔵のファルク製壁地図「アメリカ」図(写真5)にもあったことが分かった。現地に飛んだが残念ながら、当時「アメリカ」図は盗難に遭って行方不明のことだった。唯一残った「ヨーロッパ」図の周囲に貼り込まれた男女衣裳銅版彩色図の特徴をしっかりと把握し、撮影した。その後、再度渡欧し、オランダ国内図書館とパリのビブリオテーク・ナショナルを探索した結果、ついに、ビブリオテーク・ナショナル所蔵のオランダ人版画家ヨハネス・デ・ラムによる『世界服装図』新版(一六七〇年頃) *Johannis de Ram, Costumes des quatre parties du monde*. (全四八葉) が、典拠と判明した。写真4はその第三五図、ハバナ港図である。

ラム自身が典拠とした世界服装図の流れをさらに遡れば、如見『四十二国人物図説』や正保版「万国人物図」の典拠となった銅版画にたどり着くことができるであろう。

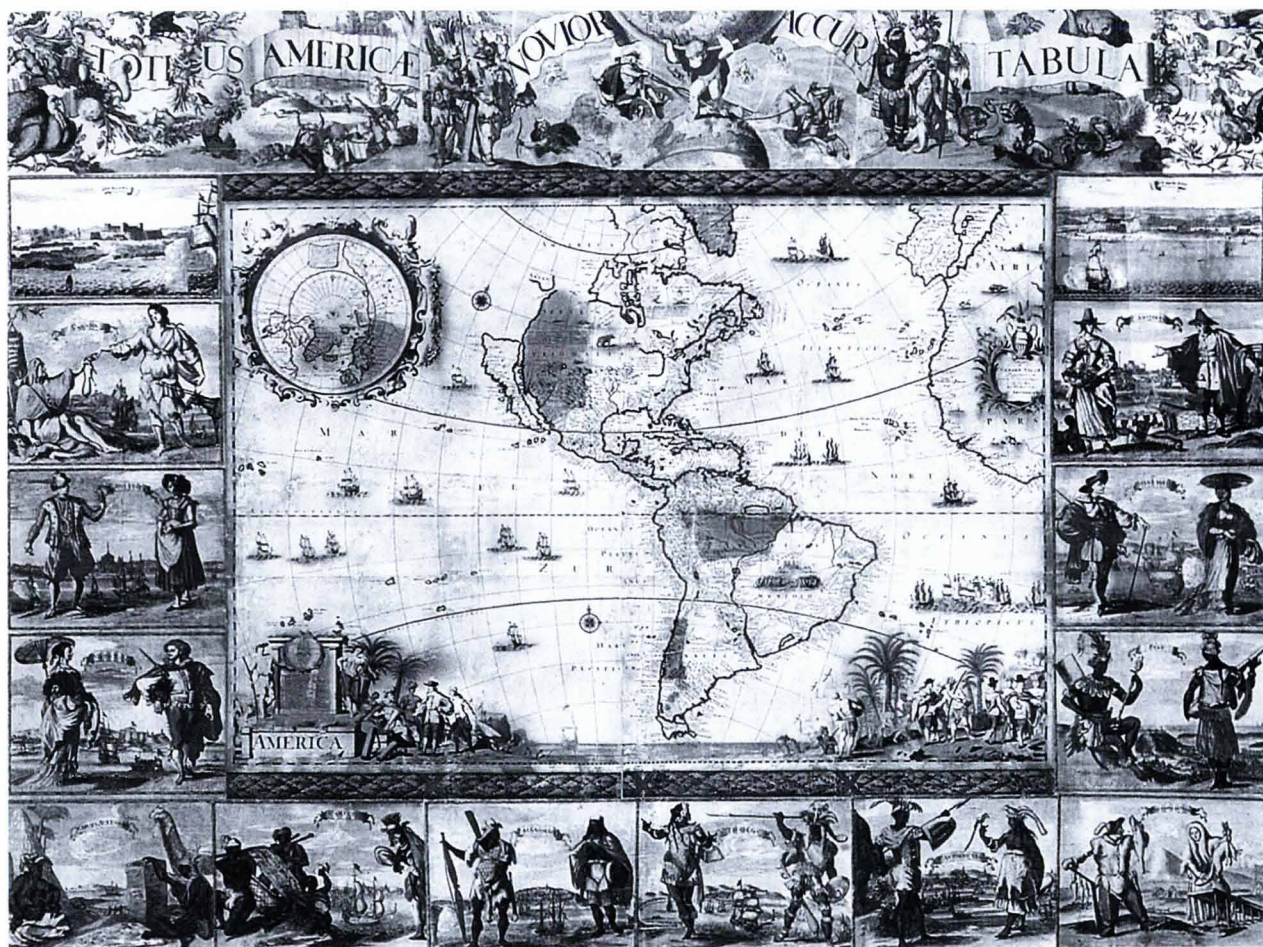


写真5 プラハ郊外ムニホヴォ・フラデイスティ城のファルク製壁地図「アメリカ」

Shirahara, Yukiko (ed), *Japan Envisions the West. 16th-19th Century Japanese Art from Kobe City Museum*. Seattle Art Museum, 2007, p.47より転載

(2) ムニホヴォ・フラデイスティ城のファルク製壁地図「アメリカ」は最近「となり」カラー写真で、神戸市立博物館所蔵「世界四大洲図・四十八国人物図屏風」とともに、Shirahara, Yukiko (ed), *Japan Envisions the West. 16th-19th Century Japanese Art from Kobe City Museum*. Seattle Art Museum, 2007, p.47に初めて掲載された。

●リレー掲載● 環境を考える

琵琶湖に生育する 海浜植物と保護

瀬戸口浩彰

HIROAKI SETOGUCHI



瀬戸口浩彰（せとぐち ひろあき）
一九六二年東京都生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程（植物学専攻）修了。博士（理学）。一九九三年東京都立大学理学部助手、京都大学総合人間学部助教授を経て、現在京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。専門は植物の進化多様性科学。

京都盆地から東へ山を越えようとするとすぐに琵琶湖にたどり着く。琵琶湖は日本最大の湖であり、湖とそこに流れ込む多くの水系は古代から人々の暮らしを支えてきた。近年、琵琶湖と周辺河川では水質汚濁や外来魚の増加、ダム建設の是非などの問題が着目されるようになり、報道を介してこれらの問題を認識されている方も多いと思われる。その一方で、注目されることはないが、湖岸には学術的に興味深く、かつ保護が必要な植物が多く生育している。本稿では、琵琶湖の湖岸に生育する海浜植物についての研究と、ハマゴウという植物の保全の取り組みについて紹介する。

琵琶湖の形成史

本題に入る前に、琵琶湖に海浜植物が生育する地史的な背景について説明する。

琵琶湖の歴史は大変に古く、世界の中でもカスピ海やバイカル湖に次いで三番目に古い湖である。しかも現在とは全く異なる場所から徐々に移動してきたとされている。この見解は琵琶湖移動説と言われ、一般的に受けいれられている。これによると、琵琶湖は約四〇〇万年前にいまの三重県の上

野盆地あたりに形成され（大山田湖）、徐々に北上しながら新しい湖を形成しては消えることを繰り返しながら（阿山湖、甲賀湖、蒲生湖、堅田湖）約四〇万年前には現在の位置にたどり着いたとされる。ちなみに琵琶湖移動説を最初に提唱した横山卓雄氏によると、琵琶湖は現在も3cm/年で北東に移動し、北部は3mm/年で沈降しているという。

琵琶湖の海浜植物の由来

琵琶湖には多くの固有生物が生息している。セタ（瀬田）シジミ、ビワコオオナマズ、鮒寿司に使われるニゴロブナなどの魚貝類は有名であろう。これらの固有種は、琵琶湖が上記の形成過程を経るなかで、湖内に取り残されて生き残った、あるいは取り残されて独自に進化したと考えられている。また、東京大学の研究グループによる解析では、日本からユーラシア大陸に広く分布するコイ（鯉）のDNA種内系統で、琵琶湖のコイが際立って異なった遺伝子型を保有していることが明らかになった。不思議なことに日本の一般河川のコイは、琵琶湖よりもドイツやロシアのコイに遺伝的

に近いのである。これらの知見は、琵琶湖に「封入」されてしまった生物が、長期に渡って周囲の集団から隔絶されてきたことを示唆している。

話題を植物に戻そう。琵琶湖の湖岸には、本来ならば海岸に生育する植物がいくつも見られる。クロマツ（マツ科、内陸部で見られるのはアカマツである）、ハマエンドウ（マメ科）、ハマヒルガオ（ヒルガオ科、図1）、ハマゴウ（クマツヅラ科、図2）、ハマダイコン（アブラナ科）、タチスズシロソウ（アブラナ科）はその代表的なものである。これらの海浜植物は、琵琶湖の形成史の過程で移入し、内陸の淡水湖に封入されているのではないと思われる。

そこでDNA実験を進めると共に、古い書物に記載がないか調べてみた。すると、和漢薬の材料として使われるハマゴウの記載が、平安時代の書物にあることがわかった。日本最古の本草書である本草和名（深江輔仁 九一八年）には、ハマゴウの薬名である蔓荊實（まんけいし）が近江国から供給されていたこと（深江輔仁は宮廷医師であったことから、おそらく平安京への供給であったと思われる）、和名が「波末波比（はまばい）」とされていたことが記述



図1 ハマヒルガオ



図2 ハマゴウ。A：花 B：果実

されている(図3)。ハマゴウは平安時代には琵琶湖にあったものと思われる。

DNAの解析では、現在までのところハマヒルガオで結果がまとまり始めた。琵琶湖のハマヒルガオは、日本国内のどの海岸のものとも全く異なる3タイプのDNA型のみを保有している。「いつ」「どこから」やってきたのかという疑問には答えることが出ていないが、コイと同様に、ハマヒルガオもやはり琵琶湖で長期間にわたって隔離されていたらしい。また、植物の葉は光合成をするために光を受容する器官であるが、同時に有害な紫外線をふんだんに浴びている。琵琶湖と海岸のハマヒルガオの葉を比較すると、紫外線を吸収するフラボノイドの構造と組成が異なっていることが判ってきた。琵琶湖のハマヒルガオは、海岸のものよりも「マイルドな日焼け止め

クリームを使っている」らしい。ハマゴウでは、葉の厚さが琵琶湖と海岸で有意に異なっており(琵琶湖の葉は薄い)、光合成の特性も異なっている。琵琶湖は淡水湖であるので、海浜植物は淡水に適応することによって、耐塩性を失っていると思われる。現在は耐塩性の比較実験を進めている。同一種が長期間の隔離を経て、生育環境に対して適応進化を起こしているとすれば、これは種内の小さな進化を検証することにつながる。ちょうど餅を両手で引っ張って、真ん中が細くなりつつも左右がつかない状態を解析することが出来る実験系なのである。琵琶湖の植物は進化多様性研究の対象として優れており、今後はゲノムDNAのレベルで研究を深化させたいと考えている。

危機に瀕したハマゴウ

こうした研究は実験室の中で着々と進むのであるが、サンプリングのために現場を見ながらとても気になることがあった。海浜植物のなかでも、ハマゴウの個体数が少なく、現存集団の生育環境が極めて悪いのである。他の海浜植物はいわゆる「草」や

樹木なので、種子による生活史更新が早く、あるいは湖岸林としての保護を受けている。これに対して、ハマゴウは更新が遅くむしろ駆除される傾向があった。この植物は匍匐性の木で、琵琶湖ではきめの細かい砂

浜で広い面積に枝を広げて生育する特性がある。従って生育場所は広い砂浜に限られている。白砂青松を謳う水泳場を管理する自治体や会社にとっては、邪魔であることが極まりない植物である。落葉広葉樹であるが、春の芽吹きが特に遅く、隣でスミレやハマダイコンが花を咲かせているのに枯れ枝のようになっており、葉が展開するのは五月のゴールデンウィークごろである。湖畔が人で賑わうGWに備えた掃除で、枯れ木と見なされて刈られてしまう場所もあった。

現在の琵琶湖におけるハマゴウの生育地は、野洲市の「マイアミ浜」、近江八幡市の「佐波江浜」、彦根市の「新海浜」の三箇所である。マイアミ浜では、湖岸整備事業(オートキャンプ場整備)で集団が残されていた。しかし十年来に渡る競合植物の侵入や樹木による被陰によって生育環境が悪化していた。佐波江浜には自然群落が残されていたが、善意の清掃活動で抜根され、湖岸を乗りまわす車両に轢かれて数を減じていた。新海浜では北米原産の帰化植物(ニセアカシア)が繁茂しており、一集団が残されている以外は、地元自治会によって植え戻された二集団があるだけである。

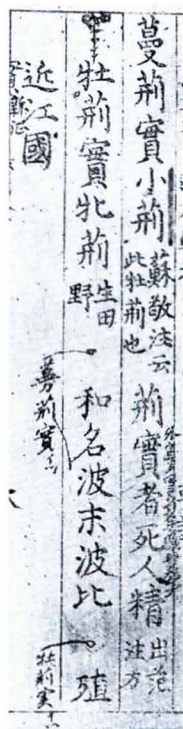


図3 深江輔仁著「本草和名」(918年)におけるハマゴウの記載箇所。

寛政八年(1796年)に多気元簡が写して脚注などを加えたものの写真。与謝野寛、正宗敦夫、与謝野晶子共編；日本古典全集一回、本草和名、上巻 大正15年、日本古典全集刊行会、東京より転載。

京都大学、東京大学、国立科学博物館の標本記録（明治時代以降）によると、ハマゴウは琵琶湖東岸の「菖蒲（野洲川北流の河口、野洲市）」「佐波江（日野川河口、近江八幡市）」と西岸の「和邇（和邇川河口、大津市）」の三箇所で見られる。さらに標本記録がないが、京大理学部教授であった北村（一九六八）は滋賀県植物史のなかで、北比良から雄松崎（近江舞子）にかけての湖岸砂浜にハマゴウが生育することを記述している。村瀬・谷本（一九七四）は、ハマゴウがかつて湖西北部のマキノと近江舞子付近に相当量が分布していたと記述している。これらの場所も、ハマゴウの生育に適した広い砂浜が広がっている場所である。従って標本記録では検証ができないものの、かつての自生地が湖北と湖西にも存在していたと推測することができ

る。現在では、和邇でハマゴウを見ることは出来ない。また、湖西のその他の湖岸にも生育していない。その一方で標本での記録はないが、彦根市の新海浜には生育している。また、菖蒲の北側に位置するマイアミ浜にはハマゴウが残存するが、その一方で菖蒲とされる場所には残されていない。

なぜ減ったのか？ 歴史的な背景を探る

古代に琵琶湖に封入されてしまった海浜植物が、内陸の淡水湖に生き残っていることは進化的に重要であり、将来に渡って残したい自然遺産である。自生地が本来はどのような自然環境であったのかを調べ、

なぜ自生地と数を減じたのかを知ることは、将来に渡ってハマゴウを維持するために役立つはずである。本稿ではそのうちのマイアミ浜と佐波江浜について紹介する。

マイアミ浜

ここまで読んでこられた方は、マイアミ浜という名称に違和感を持つておられるかもしれない。この名称は、それまで利用価値がなく名称が漠然としていた湖岸に、太湖汽船（現在の琵琶湖汽船）が観光開発用につけた名称である。以前のマイアミ浜に該当する場所には明確な地名が無く、州崎吉川、八ッ崎、仲瀬、八丁島、あるいは近傍の菖蒲と表記されてきた（中主町教育委員会、一九七八年）。

マイアミ浜は野洲川の北流が形成した奥行き約一・五kmほどの岬の西北側に位置する。野洲川はその語源が八洲川とされていたように、河口付近で多くの支流に分岐して琵琶湖に注いでいた。明治二六年（一八九三）の地形図（大日本帝国陸地測量部、明治二六年測量、明治二八年発行）では、現在のマイアミ浜に該当する箇所が、ちょうど野洲川北流の三本の支流のうちの中央と西側の二支流によって挟まれた三角州であることがわかる（図4左側）。この三角州の湖岸部は砂浜であり、湖に対して前面は荒地、内陸側に向かって針葉樹（おそらくクロマツであると思われる）が生えていることを示している。三角州の大部分は荒地であった。このように、マイアミ浜は元来、野洲川北流が堆積させた砂が形成した三角州の砂浜であったことがわかる。

野洲川は琵琶湖流域で最大の河川（六一・二五km）であり、鈴鹿山地から大量の砂礫を供給していた。ハマゴウの生育地の砂浜は、このような河川が運搬する大量の砂礫が河口付近で堆積したことに起源しており、他の自生地やかつての分布が報告されている場所も全て共通している。

この三角州は明治二六年から昭和初期までの間は大きな変化はなかったようである。これは三角州の部分が農業等の使用に適さずに住民の関心の対象外にあったことを示唆しているのかも知れない。また、琵琶湖の東岸は交通の便が悪かったために、たとえきれいな砂浜であっても観光開発の対象になりにくかったことも要因として考えられる。江若鉄道が早く開通していた琵琶湖西岸は、近江舞子などが水泳場として昭和初期から開発されていたのと対照的で

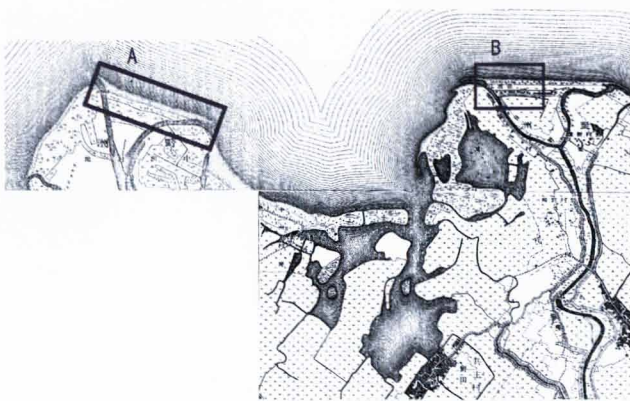


図4 明治26年（1893）における野洲川北流河口から日野川河口付近にかけての地形図。

A：現在のマイアミ浜に該当するエリア B：現在の佐波江浜に該当するエリア。

出典：

左：大日本帝国陸地測量部発行二万分一地形図和邇（明治26年測量、明治28年発行）の一部

右上：同八幡（明治26年測量、明治28年発行）の一部

右下：同北里村（明治26年測量、明治28年発行）の一部



図5 マイアミ浜ポスター（太湖汽船株式会社）。ポスターの作成年は不明であるが、1951年（昭和26年）に社名が琵琶湖汽船になったことから、それ以前のもので考えられる。制作者は国際的に評価が高い洋画家・版画家の菅井汲（すがいくみ）であり、美術品としても貴重なものである（大津市歴史博物館 木津勝学芸員による）。発行年月日は不詳。琵琶湖汽船株式会社保有、大津市歴史博物館収蔵資料。

一箇所は一五m四方ほどの比較的大きな群落であるが、残りの四地点はいずれも小規模であり、生育個体も非常に矮小化している。これらの五箇所の群落はそ

同年（一九七九年）には野洲川放水路が完成・通水すると共に野洲川北流の流路から水と砂の供給がほぼなくなった。この時

状態であつたかは記録がなかった。琵琶湖汽船の水泳船就航は、一九七九年（昭和五四年）まで続いたが、利用客の減少によって終了した。

以降、マイアミ浜には野洲川由来の砂の供給や河川水による攪乱はなくなった。さらに昭和四七年に始まった琵琶湖総合開発事業の一環で湖岸堤道路（県道近江八幡線、通称、さざなみ街道）が建設されると、車を利用してマイアミ浜を訪れる人が増えた。このときの湖岸には車が多数乗り入れて、多くの人々が立ち入ってキャンプをしている様子の資料が当時の水資源開発公団に残されている。この時の湖岸利用は無規制の状態であつた。ハマゴウがこの状態のもとでどのような影響を受けたかについては資料がないが、利用者や車両による踏圧枯死や炊事に伴う焼失、キャンプ地設営のための草刈りによる消滅などによって個体数をさらに減じたのではないかと思われる。

そして平成四年に、現在のオートキャンプ場を備えた施設（ビワコマイアミランド、マイアミ浜オートキャンプ場）が中主町湖岸開発株式会社（現野洲市湖岸開発株式会社）によって建設される際には、その環境影響調査の資料のなかで、敷地内に五箇所のハマゴウ群落があることが報告された。

のまま残され、最も大きな群落は柵で囲われて保護された。しかし残りの四集団は通常の除草管理下に置かれてきた。



図6 マイアミ浜水泳場の様子。北西側から南東側（菖蒲浜方向）を撮影したもの。撮影年月日は不詳。琵琶湖汽船株式会社保有、大津市歴史博物館収蔵資料。

現在まで、マイアミ浜では一地点のハマゴウを柵で保護してきたものの、貴重な植物ゆえに干渉しない管理方法をとって今日に至った。しかし十年以上の間に柵内のクロマツが生長して日陰を作ったために陽地生のハマゴウはその周囲にはなく、また隣接するニセアカシアから散布された種子が大量の実生を柵内に供給していた。また、セイタカアワダチソウやヒメムカシヨモギなども繁茂しており、ハマゴウと競合している状態にあつた。この群落には過少見積もりで四〇個体を確認した。規模の小さな四集団は一箇所を減じて三集団になった。これらは除草作業を繰り返して受けるために、土中の匍匐枝だけが残存している状態で、個体は極めて貧弱である。しかしながら過少見積もりで三〇個体、十五個体、六個体が確認された。現在のマイアミ浜には、少



図7 マイアミ浜水泳場のパンフレット。背景はマイアミ浜水泳場の東南側である。桟橋に停泊する左側の船は、当時の琵琶湖汽船を代表する京阪丸である。発行年月日は不詳。琵琶湖汽船株式会社保有、大津市歴史博物館収蔵資料。

なくとも四集団九一個体のハマゴウが生育している。

佐波江浜

もう一つの自生地である佐波江浜もマイアミ浜と同様な立地である。ここでは日野川が佐波江浜の手前で左右に二分岐しており、この間に挟まれた三角州であったことが明治二六年測量の地形図からわかる(図4右側)。佐波江浜も鈴鹿山地から日野川によって運ばれた大量の砂礫が堆積して形成された洲であると理解される。この年代の地形図には、佐波江浜の三角州は湖岸部が砂浜であり、内陸側に針葉樹(クロマツであると思われる)が分布していることが示されている。この佐波江浜の三角洲は日野川河川改修によって東西の支流が埋め立てられ、この間に直線的に流路と河口が形成された。この改修後の変化は、昭和三十一年以降に発行された国土地理院地図において



図8 マイアミ浜のキャンプ場エリアの様子。撮影年月日は不詳。琵琶湖汽船株式会社保有、大津市歴史博物館収蔵資料。



図9 昭和54-56年における野洲川北流河口から日野川河口付近にかけての地形図。
左：国土地理院発行二万五千分一地形図堅田(昭和54年測量、昭和56年発行)の一部。
右：同近江八幡(昭和56年測量、昭和58年発行)の一部。

で見ることが出来る(図9)。

佐波江町内会の方々によると、かつての佐波江浜では、佐波江地区の住民による管理が日常的に行われていた。プロパンガスが家庭に普及する前には、各家庭が使用する焚き付け用の落ち葉(クロマツの落ち葉)と湖岸に打ちあげられる流木を湖岸で採取しており、住戸毎に採取できる浜の範囲が細かく設定されていた。佐波江の集落は山林から遠く離れており、集落の入会地となる林も無かったことから、湖岸で入手できる松葉と流木が薪炭の代換えとして機能していた。そのために佐波江浜は落ち葉かきによって常に清掃された状態にあったという。ハマゴウは黒松林の湖岸側前面に多く茂っており、佐波江地区の住民は、夏期にハマゴウを刈り取って牛舎の蚊いぶしに使用していたという。

ふんだんに生育していたハマゴウが激減したのは、湖岸堤道路が琵琶湖総合開発事

業の一環で平成二年七月にこの地域で開通した(全線開通は平成四年一月)ことに遠因している。開通当初には道路と湖岸の境に自動車の立ち入りを規制する柵がなかったために、当時に流行していた四輪駆動車やモトクロスバイクが湖岸を乗り回す状況が続いた。これによってハマゴウの生育域の多くが消失したという(佐波江町内会の方々からの聞き取りによる)。湖岸堤道路から湖岸に自動車が進入することに対しては、地元の市町村と滋賀県との間で協議があり、のちに柵で閉鎖をしたが、その施工年はわからなかった。

また、佐波江浜自体の様相も著しく変化しており、湖岸の砂浜の奥行きが増した。これは航空写真でも明瞭に識別できる(図10)。佐波江の漁労関係者によると、この水域では特に冬季における北風が強く、日野川右岸側河口に広がる砂が左岸側に運ばれる特徴がある。佐波江浜の西端に位置す

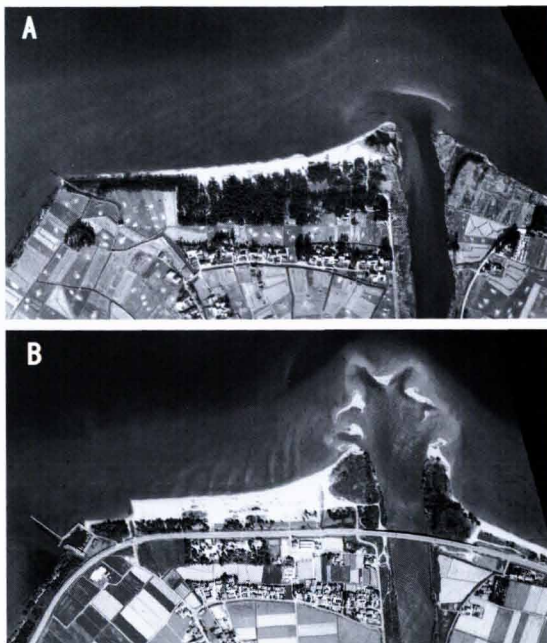


図10 航空写真における佐波江浜の地形の変化。

A：昭和45年 B：平成3年。

A：水資源開発公団(現(独)水資源機構)資料 空中写真 昭和45年琵琶湖沿岸部 C17~C20、26~30

B：独立行政法人水資源機構資料航空写真平成3年湖岸堤等航測図化修正(その1)

る佐波江第二樋管に沿って突堤が建設されて（建設年は不明）、砂の移動がこの堤で留められた結果、河口左岸側に砂が堆積を始めたと解釈されている。

現在のハマゴウの群落と湖岸との距離は、湖岸に一番近いところで約40mである。このようにハマゴウの群落の位置が湖岸から後退していくことが、ハマゴウの生育に影響を与えることには注意が必要である。佐波江町自治会の方々によると、佐波江浜のハマゴウが生育している範囲は、かつては琵琶湖の水位変動のなかで一年間に数度も水没していたらしい。水没によって他の植物の侵入が妨げられていたのではないかと考えている。現在は琵琶湖総合開発事業による水位調節によって水位変動が抑制されているために、ハマゴウの群落が水没することは少ない。生育地が湖岸から後退して内陸側になることによって、陸生植物他種との競合や被陰による影響が懸念される。

現在の佐波江浜では、湖岸の東西にハマゴウが各一集団ずつあり、西側にある集団に一七個体、東側の集団に七個体が生育する（また、県道を挟んだ南側の私有地にも生育する）。しかし平成十八年においても湖岸の集団では相変わらず二輪車や四輪バギー車の車輪痕とともに枝が折られていることが見られた。また東側集団の近辺は、ウインドサーフィンの愛好家が道具の組み立てや休憩に利用しており、利用者による善意での清掃活動によって刈り取りや抜根が行われていた。滋賀県はハマゴウを保護すべき希少植物に指定しているにもかかわらず「善意で清掃」され続けたことは、行

政がレッドデータリストなどの資料作製だけに専心していることの現れであろう。

佐波江浜の場合、湖岸のハマゴウが大きく減少した時期は昭和期、特に昭和四七年の琵琶湖総合開発以降であると言えよう。マイアミ浜に比べて遅いのは水泳場としての利用がなかったためであると推測される。ハマゴウ減少の主因は、琵琶湖総合開発で湖岸堤に建設された湖岸堤道路によって、四輪駆動車や二輪車などが湖岸に容易に乗りいれるようになり、生育個体が轢殺されたことであると判断される。また、湖岸における善意の清掃活動による除草や刈り取りも個体数減少に拍車をかけたようである。琵琶湖の水位調節によって湖岸が冠水しなくなったことは、競合植物の排除がなされずに、ハマゴウの生育を悪化させる一因になっていると思われる。

将来に残すために

琵琶湖の湖岸は経済成長が始まった昭和二〇年代以降、さらに昭和四七年に始まった琵琶湖総合開発事業以降に大きく様相を変えて、そこに生育する植物も大きな影響を受けた。ハマゴウも然りであった。

植物の進化多様性を研究する立場としては、研究論文を作成することに専念するべきであるかも知れない。しかし絶滅危惧植物を次々と替えて研究し、現地の方々にアドバイスを与えて去っていくのでは評論家と同じであり、絶滅に瀕した植物の状況を改善することにはつながらない。願わくば、地元住民の方々の間で将来に渡って見守ら

れる体制が整うことを見届けたいものである。

マイアミ浜では平成一九年五月に、研究室の学生諸君とキャンプ場運営をしている野洲市湖岸開発株式会社の職員と共に、柵内のクロマツと隣接するニセアカシアを伐採して除草を行った。この群落はその後に、地元の中学生による体験型学習の一環として除草管理が始まることになった。佐波江浜では佐波江町町内会と水資源機構とともに、ハマゴウの群落を柵で囲う作業を行い（図11）、植物の貴重さを伝える掲示板を設置した。この植物が琵琶湖に生きる背景と意義が人々に理解されて、将来に渡って残されていくことを願っている。

私たちは生活のために自然を利用している。琵琶湖の場合には身近なところで水資源や湖岸のレジャー利用などが挙げられるであろう。しかし現在のように多くの人口が過剰に自然を利用せざるをえない状況では、その利用に自ずから節度が必要ではないだろうか。司馬遼太郎はその歴史小説の中で登場人物に「人間は、理と利の二つの“り”で動く」と言わせている。これは環境問題にもよく当てはまる指摘である。これまでの琵琶湖を巡る利用は、私たち人間の利に偏ったものであった。子孫が将来に渡って、琵琶湖に息づく自然と共に生きていくためには、理に基づいた思想と科学そして行動が必要である。



図11 ハマゴウの群落を囲む柵

水槽の中のマグマ溜まり



金子克哉

KATSUYA KANEKO

金子克哉 (かねこ かつや)

1966年、新潟県生。東京大学大学院理学系研究科卒。博士(理学)。現在、京都大学大学院人間・環境学研究科助教。専攻は、火山学。

マグマ溜まりにおけるマグマの多様化

マグマの組成変化の過程は、理論や岩石鉱物の溶融実験をもとにして二〇世紀前半に「結晶分化作用」という概念として確立した。玄武岩質マグマが、冷やされると、固まりやすい成分(例えばマグネシウム)を多く含む鉱物が結晶化する。その結果、マグマの液体部分は、溶けやすい成分(例えばケイ素)が増えていき、温度が下がり結晶化が進むとともに、安山岩質マグマ、さらに流紋岩質マグマと、化学組成が変化していく。もとは玄武岩質マグマでも、地殻の中で固まりかけ、その途中で、液体部分だけ分かれて噴出すれば、様々なマグマが地表でみられることになる。

では、このようなマグマの組成変化はどこで起こるのであろうか。その主な場所が、マグマ溜まりである(図1)。大陸地殻の上部は、軽い岩石(カコウ岩)であり、マントルで発生する玄武岩質マグマよりも軽い。それゆえ、玄武岩質マグマは直接地表まで達することができず、地殻の途中で、密度が釣り合ったところで停留すると考えられる。これがマグマ溜まりとなり、マグマから周囲の地殻への熱の移動が起こり、マグマは冷えて結晶化していく。加えて、大陸地殻中のマグマ溜まりを考えると、きも一ひとつ重要な過程が生じる。大陸地殻は、玄武岩質マグマに比べ溶融温度が低いので、溶けてしまい、その結果新たなマグマが生じるのである。このようにして地殻が溶けてできたマグマも、大陸地殻の上に生ずる火山のマグマの多様性を与えている。

では、具体的に、マグマ溜まりではどのような様々なマグマができていくのであろうか。マグマの冷却や地殻の溶融は、

マグマ溜まりの壁のところで起こる。マグマの温度や液組成が変われば、その密度が変わり様々な対流を引き起こす。現実の火山の噴出物を観察するとマグマ溜まりの中のマグマは均質ではないことが示される。マグマ溜まりでのマグマ変化の概念を、物理過程として具体化するために、私は「実験」を行った。以下ではその内容を紹介したい。

塩水と塩水のマグマ溜まり

マグマとマグマ溜まりは、温度千度ほどもあり、また大きさも百メートル以上である。現象の時間も一年や二年どころではなく、実験は現実的に不可能である。そこで、アナログ物質を使った実験を行った。マグマとして塩化アンモニウム水溶液を、地殻として塩化アンモニウムと水の混合物を用いた。要は、塩水(塩化ナトリウムではないけれど)とそれを固めてできた氷を使ったということである。以下では、簡単のため、塩化アンモニウムを「塩」とよぶ。行った実験は、玄武岩質マグマを模した塩水(高塩分濃度)の上下を、カコウ岩を模した塩(低塩分濃度)で挟む

というもので、マグマ溜まりの天井および底で引き起こされる現象、そしてその相互作用を見ることを目的とする(図2、3)。この実験では、塩水の冷却結晶化や、氷の溶融で、液の密度変化の定性的性質がマグマや大陸地殻と同じである、すなわち、冷却により塩が結晶化するときの残液や塩

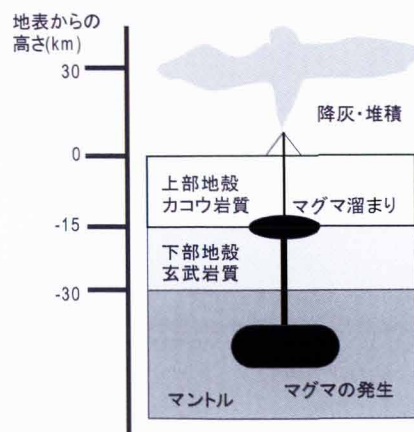


図1 火山の概念図

(1) マグマは大きくケイ酸(SiO₂)の量で分類される。他の成分も、ケイ酸量とたいたい相関をもつて変化する。ケイ酸が最も少ないのが玄武岩質(ケイ酸量48-52%)、ケイ酸が増えるにしたがい、安山岩質(52-64%)、流紋岩質(64%以上、カコウ岩質と同義)と呼ばれる。(2) 地球表面のマントルと異なる岩石層が地殻である。地球では大陸地殻(上部カコウ岩質、下部玄武岩質、厚さ数一〇キロメートル)と海洋地殻(玄武岩質、厚さ約六キロメートル)の二つに明確に分かれている。(3) 塩化アンモニウムと水の系(二成分共融系、共融点温度マイナス五・四℃)は、温度上昇により溶解度が増え(〇・二%毎度)、また飽和したときの結晶化が平衡によく追従するなどの点で、この種の実験に適している。他の物質、例えば、塩化ナトリウムは溶解度が温度によりあまり変わらず、少しずつ結晶化させることができない。炭酸ナトリウムは、過冷却しやすい。

水の溶解液が、もとの液より軽くなる。また、流体力学的検討により、ある程度の相似性が保たれるように大きさ（初期の液体厚が約一〇センチメートル）が選ばれている。

以下で、簡単に実験結果を紹介する（図2）。実験を始めるとすぐに、天井では、上からの冷却により熱対流が発生する。同時に、塩が結晶化し底にたまる。また、天井塩水が溶けるが、溶けてきた液は、下にある元の液より軽いので、分離したまま独立した液体層を作り、熱対流する。一方、底では、液は冷却のため結晶化し、上から沈澱してくる結晶とともに固体と液体が混ざった層（マッシュ層）ができる。同時に底の塩水が溶けていく。この溶けてきた液およびマッシュ層中の液は元の液より塩分濃度が小さく軽いので、温度が低いにも関わらず上昇し対流を起こす（組成対流）。この組成対流により、下の液層の塩分濃度は小さくなっていく。実験初期には、激しい熱対流と組成対流のため、それぞれ温度組成ともに均質な二液層を作る。時間とともに底のマッシュ層が発達してくると、マッシュ層の作用により、下の液層中の組成対流による上昇プリューム（低塩分濃度）は、径が太く、間隔が広くなり、混合が不完全なまま、下の液層の上部まで達するようになる。下の液層では上ほど低塩分濃度になっていき、組成的には安定な（上ほど軽い）組成勾配ができる。この組成勾配と上からの冷却の影響で、下の液層はいくつかの対流層に分かれてしまう（二重拡散対流層）（図2、3）。さらに時間が経過し、温度組成が変化すると、それまで独立層を作っていた天井が溶けてきた液層と一部の下層との混合なども起こる。

重要なことを整理すると以下のようなになる。

- ・天井からの熱対流と、底からの組成対流が起こり、固体の溶解が起こる。
- ・天井の溶解液は分離した液層となり、底での溶解液および結晶化残液は元の液と混合する。
- ・熱対流（天井）と組成対流（底）の相互作用により、二重拡散対流層が消長する。

たくさんの方が競合して起こり、複雑な実験結果であるが、私自身は、現実存在するある種のマグマ溜まりを見たか確信している。この後、私は阿蘇火山の大規模噴火におけるマグマ溜まり復元の研究を行ったが、その結果得られた阿蘇のマグマ溜まりの構造は、塩水実験の結果そのものであった。

火山進化と大陸成長の理解へ

日本には、たくさん火山があり、噴火とその災害報道において、また国立公園などの景勝地において、日本に住む私たちは、火山に接する機会が多い。これらを見渡してみると、様々な火山の形がある。きれいな円錐形をした富士山や、こんもりした形の雲仙溶岩ドーム、大きなくぼ地（カルデラ）をもつ阿蘇山などである。火山は一つ一つの個性を持っているが、大雑把に見たとくにはいくつかにタイプ分けできそうである。また、それぞれのタイプの火山ごとに、普遍的な成長法則がありそうである。ここで紹介した実験で、一万年程度の時間において火山の地下で起こることを理解できた。一方、火山は数十万年から百万年程度の寿命をもっている。現段階で、火山学は、火山の一生にわたる成長の様子を経験則以上

に理解できていない。私自身は、この経験則に合理的な理屈を与えることを現在のテーマとしている。そのためには、マグマ溜まりだけでなく、マグマ溜まりの深さまで、マグマがどのように上がつてくるかを合わせて理解することが重要だと考えている。

この問題はさらに大きな問題を含んでいる。日本のようなプレートが沈み込む場所のマグマの活動が、四六億年の地球の歴史において、少しずつ大陸地殻を成長させてきたのである。日本におけるマグマの活動を知ることが、興味深い地表現象である火山を知ることのみならず、私たちが立つ大地の成り立ちを知ることでもあるのだ。

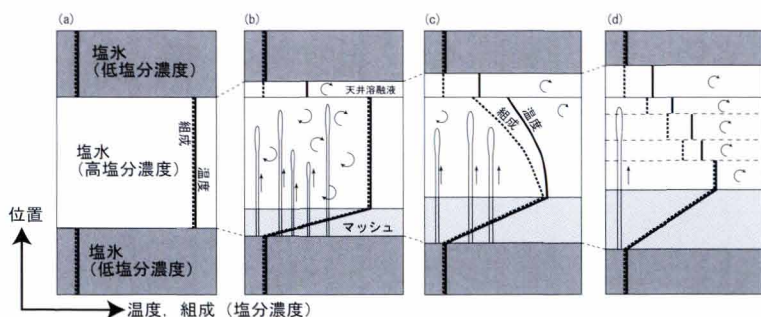


図2 実験の結果。(a)～(d)まで時間順に並んでいる。図中の太い実線および点線はそれぞれ鉛直方向の温度、組成（塩分濃度）を示す。(a)初期状態。(b)実験開始直後。活発な対流により均質な二層。(c)下の液層では、次第に上ほど温度が低く、塩分濃度が低い温度組成勾配ができる。(d)下の液層が多層に分かれて対流する。

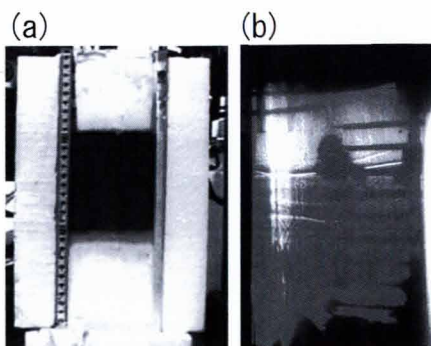


図3 実験の写真。

(a)実験開始直後。上下の白い部分が塩水。液は着色してあるため写真では濃い色に見える。断熱のため、水槽は発泡スチロールでおおわれている。

(b)図2のdにあたる状態。いくつかの層に分かれていること、上昇する組成対流プリュームが見られる。可視化はシャドウグラフィ法による。

(4)玄武岩質マグマは、固まり始めと完全に固まるまでの温度差が四〇〇度程度あるのに対し、カウウ岩は、固まり始めと完全に固まるまでの温度差がほとんどない。この実験では、塩水は共融点組成であり、共融点温度において完全溶解する。

(5)一つ以上の要因（ここでは熱と組成）により密度が変化する流体における対流を二重拡散対流とよぶ。組成的な密度勾配が安定（すなわち上ほど塩分濃度が小さい）、熱的な密度勾配が不安定（上ほど低温）の場合、流体は複数の対流層に分かれて対流する構造を作る。

(6)守屋（一九八三）「日本の火山地形」。日本中の火山を検討し、成長の一般法則を抽出しようと試みた独創的な研究である。

新たな言語研究の方法論とその実践

—コーパス基盤の統計的アプローチと
認知言語学のパラダイム—

李在鎬

LEE Jae-Ho



李在鎬（りじえほ）

2005年、京都大学大学院博士課程満期退学。2005年から（独）情報通信研究機構でコーパス言語学および言語資源開発業務に従事。現在、統計的手法に基づく日本語の構文現象の分析モデルの構築を目指して研究している。また、日本語教育のための学習者コーパスやコーパスツール開発も手がけている。日本認知言語学会、日本語用論学会、計量国語学会、言語処理学会、関西言語学会会員

私は二〇〇五年、人間・環境学研究科を満期退学し、現在、情報通信研究機構（National Institute of Information and Communications Technology）でコーパス言語学および言語資源の研究・開発業務に携わっている。私の研究生活の原点となる言語科学講座の山梨正明研究室では、認知言語学を中心として活発な研究活動を行っている。その射程は非常に広く、意味論、統語論、語用論といったオーソドックスな研究分野のみならず、コーパス言語学、言語獲得、第二言語教育、社会言語学など多岐に渡っている。当研究室のユニークさは次の二点にまとめることができる。一点目は、他の方法論に対して排他的でないこと。多

くの院生は認知言語学の方法論だけに決して固執することなく、機能言語学や構造言語学といった他の理論言語学の知見、さらには心理学、情報処理、脳科学などの関連分野の知見を積極的に取り入れながら、自らの研究テーマを見直し、新たな発見につなげていく。二点目は、メンバー同士が積極的に交流し、互いに良い刺激を与え合っていること。毎週行われる研究会の場で参加者全員が積極的に意見交換をしており、言語現象への深い理解を得る場になっている。

さて、私の研究テーマは、コーパス（corpus）と呼ばれる大量の言語データを定量的・定性的手法で分析し、使用態としての言語特徴を記述・分析することである。主として日本語の文単位の言語現象を対象として使用の「動機づけ」の問題を中心に研究している。研究の分析枠組としては、三つの統合的枠組を用いている。一つ目は、認知文法（Cognitive Grammar）と構文文法（Construction Grammar）の統合である。二つ目は、認知言語学と計算言語学の統合である。三つ目は、理論言語学と日本語学の統合である。なお、これらの統合に対する理論的基盤を提供するのが、用法基盤モデル（Usage-Based Model）である。用法基盤モデルとは、認知言語学の分野で提案された枠組で、日常言語の実際の用法、すなわち使用態に即した一般化を重視するモデルである。

ところで、言語研究は用法基盤であるべきと考えられるが、その必要性・正当性はどこにあるのだろうか。また、この見方が新しいのはどのような点においてなのだろう

うか。まず、言語研究が用法基盤であるべきと考えられる最大の理由は次のようにまとめられる。それは、言語現象の記述が、理論化のための一般化・抽象化ではなく、言語の具体的な「使用」に関する記述でなければならぬということである。これは一見当然のことを述べているだけのようにも見えるが、果たして本当にそうだろうか。私を知る限り、これまでの言語の科学的研究プログラムにおいてこの問題を正面から扱ったものはあまりない。二〇世紀の理論言語学を代表する、ソシュール（E. Saussure）の言語理論にしろ、チョムスキー（N. Chomsky）の言語理論にしろ、用語の違いこそあるものの、言語の構造的特徴と使用態の特徴をモジュール的に捉えており、言語研究の本質的対象が前者であると位置づけ、後者はノイズに満ち溢れ、科学的研究の対象ではないとされてきた。こうした態度は、やがて理論言語学の典型的な分析手法の一つとして次のような方法論を確立させた。各々の分析者は自らの研究対象を使用面・運用面から切り離し、（現実のノイズをすべて排除した）真空状態の中で言語現象を捉えようとしてきた。具体的には、自らが依拠する理論に従って予測や仮説を立て、その仮説の妥当性を示すために（分析者の頭の中で）作例をする。さらには、それに対する容認度判断を（自らの主観で）行うなどの方法で、可能な構造や言語的制約を明らかにしていく、という手法である。こうした手法は、程度の差こそあるものの、言語研究（特に構文研究）のもっとも基本的研究手法の一つとし

て受け継がれ、多くの個別研究において支持され、実践されてきた。

こうした従来型の方法論には、観察バイアスの問題は言うまでもないことであり、(理論が先鋭になり過ぎており) 実際の言語使用に対する具体的な記述説明からはかけ離れてしまうという問題もしばしば起きている。その誤った一般化の象徴とも言えるのが、極度の形式主義者が生み出した言語モジュール論であるように思われる。彼らは、理論化を優先させた結果、過度の抽象化や高いレベルの一般化を追求し、形態論、語彙論、意味論、語用論、統語論といった個別モジュールの領域固有性を強調し、前提にできた。そして、多くの研究においてこのことが鵜呑みにされ、言語事実を捉えてきた。その結果、言語使用者の心的実在性とはかけ離れた一般化をすることも少なくなかった。実際の言語使用の実態、または言語使用者の観点から見れば、言語構造がモジュールとして存在する必然性は必ずしも明らかではない。用法基盤モデル、さらには認知言語学の多くの分析モデルは、こうした問題意識を共有しており、九〇年代以降の研究の深化によって、数多くの研究成果を世に示してきた。

さて、用法基盤としての言語研究はどのようなにして実現されるべきものであろうか。次の三点が考えられる。(1) 言語研究のもっとも基本的とされる個々の下位領域、例えば統語論、語彙論、意味論といった領域のモジュール性や自律性を前提にせず、それらを統合する形で記述分析を行うのが望ましい。(2) 母語話者のカテゴリー化

の実態に対して可能な限り、説明しうるものでなければならぬ。言語の使用に反映される、カテゴリーの生成や成長、さらには定着に至る一連の動的プロセスを解明できなければならない。(3) 実際の使用例を優先的に用いることで経験科学としての妥当性を追及しなければならない。

以上に示した三点の方向性に対する実際のアプローチとして、次の点が考えられる。(1) 意味と形式のゲシュタルト的結合からなる統合的記述の単位から言語現象を捉える。具体的には構文文法が主張する「構成体 (Construction)」を基本単位とし、意味と形式の慣習的対応を重要視した記述を行う。(2) 行動データを収集し、認知主体のカテゴリー化の実態を捉える。(3) コーパス分析的方法で、データを収集し、計算言語学の定量的・定性的分析手法で言語現象を捉える。具体的には、決定木分析 (Decision Tree) や自己組織化マップ (Self-Organization Map) で代表されるデータマイニングの手法を取り入れ、探索的にデータを解析する方法が有効であると考えられる。

現在、私は、言語に対するより深い理解を得るため、言語現象の非線形性に関する統計的分析モデルの開発および用法基盤による言語の使用実態の解明を目指し、研究を進めている。その成果は現在執筆中の博士論文を通して公開する予定である。

コラム「お国の食べ物」 ペリメニ(シベリア風)の作り方 シャシチ・オルガ(東京大学 環境研究 文化人類学)

ペリメニは(ロシア語:пельмени、英語: Pelmeni)はロシアやウクライナなど旧ソ連圏の(中国からモンゴル経由ではいった)ロシア風水餃子で、もともとシベリアのアジア系の民族の料理です。

ペリメニの起源は明らかでなく、多くの説があります。最も広く受け入れられているのは、ロシア人探検家と開拓者によってウラル山脈で発見されたという説です。彼らが発見したのは、(先住民の言葉で「パンの耳」を意味する *panin* と呼ばれる)非常に薄いパンで包んだ肉片からなる料理で、この地域の先住民が使用していました。もう一つの説は、ペリメニは狩人が発明したというものです。狩人は長期の狩りに携行する軽くて手軽に調理できて栄養になる食べものを探していました。が、ペリメニは品質や味覚を損なうことなく長期に冷凍保存できて、そのうえ沸騰したお湯は良いスープになりました。

味付けや作り方は地域ごとに少しずつ違いますが、ここで紹介するのは全国的に有名なシベリアのペリメニです。シベリアはロシア連邦領ウラル山脈分水嶺以東の北アジアおよび東アジア地域の呼び名です。

ペリメニは、牛肉、豚ロース、マトンなどをフードプロセッサーで挽き、玉ねぎ、塩、コショウ、ブイヨン、好みで月桂樹の葉、ナツメグ、生クリームを加えて具を作り、チェスター(皮)は小麦粉と卵をしつかり練りこんで作ります。中国餃子とよく似ていますが、ペリメニと餃子との主な違いは、形と大きさで、スパイスの使用量も少なくなっています。一般的なペリメニは、ふつう縦長で小さいものです。たつぷりの具をチェスターで包み、一度冷凍します。ブイヨンが口の中で広がるジュシーさと旨味を出してくれます。食べる時は凍ったまま鍋に入れて沸騰した熱湯でゆでます。スープに浮かべて食べてもよし、蒸したり、フライパンで焼いたりしてもよく、スープに入れない時は、バターやサワークリーム、酢、レモン汁、おろしチーズ、香草などを添えていただきます。

伝統的に、家族総出で一気大量に作り、戸外に出して凍らせ、必要な分だけ溶かして食べます。寒いシベリアで一冬の間に食べる保存食になっています。手作りの家庭料理であるペリメニはシベリアの人の味覚の原点を大切にしています。これが有名なシベリアのペリメニの作り方の秘密です。簡単なので時間があればお作りください!

政治の弁証 — 公共政策研究における 政治研究の不可欠性 — *

足立幸男

YUKIO ADACHI



足立幸男（あだち ゆきお）

1947年名古屋生まれ。京都大学大学院法学研究科博士課程卒（京都大学博士〔法学〕）。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。専門は公共政策学・政治哲学。主要な著書に、『議論の論理——民主主義と議論』（本郷社、1984年）、『政策と価値——現代の政治哲学』（ミネルヴァ書房、1991年）、『公共政策入門——民主主義と政策』（有斐閣、1994年）、『政策学的思考とは何か——公共政策学理論の読み』（勁草書房、2005年）、『公共政策学とは何か』（ミネルヴァ書房、近刊）、など。文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「持続可能な発展の環境的側面——環境ガバナンスを支える民主主義の理念と制度」研究代表者。

政治と暴力

暴力を政治データの一部と認めたからといって、暴力を肯定せねばならないとか、暴力による問題解決を容認せねばならないとかいうことにはならない。暴力の遍在を事実として認めつつも、暴力の要素を可能な限り政治から排除しようとする、暴力によらない問題解決の可能性を探るべきだと主張することは、決して不当でないし、的外れでもない。私たちはしばしば、政治と暴力の親和性を強調したり、政治の本質を暴力に見ようとしたりする「現実主義」的な言説に遭遇するが、こうした政治の理

解は、イギリスの政治学者クリック（Crick, Bernard）の指摘を待つまでもなく、あまりに皮相であり、政治的なものについての致命的な誤解に基づいている。「暴力は政治権力の延長であるところか、実際にはその破綻である。なぜといって暴力は、説得だけでなく、相互信頼に基づいて『共に活動する』という人間の習慣もまた、破綻していることを示しているからである。戦争は、かつてクラウゼヴィッツがわれわれに信じ込ませたような『別の手段を用いた政治の継続』などではない。むしろ、きわめて現実的で恐るべき意味での政治の破綻にほかならぬ」【Crick, Bernard and Tom Crick, *What Is Politics?*, Edward Arnold】。現実の政治過程から暴力の要素を根絶することが極めて困難であること、「平和」的な論争や交渉・取引の結果が現実の力関係によって大きく左右されることを十二分に承知しつつ、しかもむき出しの暴力の噴出をなんとか回避しようとする、この点にこそ政治の本質が存するのである。

政治嫌悪の「政治」思考

公共的諸問題がそれによって解決されるべきその政治とはまた、相互に相容れない世界観の間の覇権を求めている闘争、すなわち神々の争いとしての「政治」ではない。神々の争いとしての「政治」は正統性を巡る争い、勝つか負けるかの熾烈な闘争であり、一方が他方を（あるいは、ある一つの世界観が他のすべての世界観を）圧倒し組み伏せることによってしか終結しない。そ

ここでは、相互に相容れない多様な価値観が混在しているという状況が自然で正常なものととして容認されず、克服されるべき異常な事態であると認知され問題視される。

「神々の争いとしての政治」とその理論には長い歴史がある。この種の政治は、必然的ではないにせよ、ともすれば強制を伴う。そしてその強制を、すなわち反対派を沈黙させるための暴力やその威嚇を、真理や正義などの名において正当化する。それどころか、社会構成員に対して自ら進んで身の証を立てること、公認の世界観への熱狂的献身を目に見えぬ形で示すことをし、しばしば要求しさえするのである。敵対勢力の粛清を公然と主張・正当化し実行に移したナチズム、ファシズム、スターリン主義の「政治」などが、その最も苛烈な実例であろう。アテネ民主制への絶望から哲人王の支配を憧憬したプラトンや、英雄による武断政治に熱い期待を寄せた一九世紀中葉のイギリスの文明批評家カーライルなどの政治理解にもまた、暴力を後ろ盾とする強制それ自体の擁護でないにせよ、（以下に述べるような意味での）政治および政治的なもの一般への誰の目にも明らかな嫌悪を読み取ることができよう。さらに、サン＝シモンやコンントに端を発する社会計画の思想や、それとしばしば結びついたテクノクラシーの思想などにもまた、政治の社会統合機能や問題解決能力に対する根深い不信の念や、政治の超克や縮減を公然と主張する言説への共感を見出すことができよう。社会計画思想やテクノクラシーの信奉者たちの多くは、ルーズベルト大統領のブレー

*本稿は、拙著『公共政策学とは何か』（ミネルヴァ書房、二〇〇八年五月）の第5章の一部を抜粋・編集したものである。

ンの一人としてニューデールを推進し、後にシカゴ大学計画研究所 (School of Planning) の初代所長となったタグウェル (Tugwell, Rexford Guy) とともに、政治を「その本質において地位を求めての競争に過ぎず、したがって近視眼的かつ稚拙なやり方でしか事にあたることができない、それどころかしばしば特権の維持と強化に奔走する破廉恥極まりない活動である」(Journal of Social Philosophy 5-2, 1940)として切り捨てる。政治の傍若無人と跋扈に諸悪の根源を見出し、かかる政治の「横槍」を排除すべきこと、政治家や無知な大衆の「専横」を抑制すべきことを、社会改良・社会進歩の名において要求する傾向がある。もとより、これら政治および政治的なもの一般への嫌悪に、まったく何の根拠もないというわけではない。政治の縮減さらには超克の主張を荒唐無稽な暴論と一笑に付すことができない、政治の惨めな現実がたしかにある。政治家に対する社会的尊敬はいまや地に堕ちた感がある。このことは率直に認めよう。しかし、だからといって、政治を無用の長物と決めつけてしまつてよいだろうか。政治にもはやいかなる存在理由も効用もないのだろうか。

公共問題の悪構造性および価値観の多様性という厳粛な事実に鑑みると、昨今の政治嫌悪の感情の広がりが高まりに私は深刻な危惧の念を禁じ得ない。価値観の文字通りの一致や収斂は、暴力に訴えることなしに達成することはできない。暴力の噴出という由々しい事態を避けようと思えば、価値観の違いを相互に認め合い、そのうえ

で共通了解を見出すための真摯な話し合いを根気よく続けるほかない。そのことによつてはじめて、私たちは相互に不満を残しつつも歩み寄り、どうにか「合意」に達することができると。『平和』な日本に生を享け、暴力やその威嚇によつて沈黙を余儀なくされたり、むき出しの力と力の凄惨な衝突を間近で目撃したりするといった経験なしに成人を迎えた若い読者の方々にはあまりピンと来ないかもしれないが、一方が他方を力でねじ伏せるのではなく、話し合いによつて互いに歩み寄るということ、このことには、絶大な意義がある。

たしかに、公共的諸問題が悪構造の問題であり、しかも政治の主要な存在理由が社会構成員の間での価値観や利益の深刻な対立を何とか調整し社会の分極化を防止する点にある以上、政治にその発見を期待することのできる処方方は必然的に中途半端で妥協的なもの、ビッケル (Bickel, Alexander) がホイッグ・モデルと呼ぶ「ぎこちない調停」(untidy accommodation) であらざるを得まい。

【The Morality of Consent, Yale U.P., 1975:4】政治による問題解決はどこまでも「ありあわせの材料」による「間に合わせの解決」でしかない。「それはけつして『最終的解決』ではありえない。新しい解決によつてたえずとつてかわられるべき性質の解決だといふべきであろう。かつてナチズムの指導者は、ユダヤ人を地上から抹殺することを指して、ユダヤ人問題の『最終的解決』と呼んだが、

これは『最終的解決』がいかに政治的解決と両立しえないかを示している」【阿部斉「概説 現代政治の理論」、東大出版会、1991:45】。だが、政治の提供する「ぎこちない調停」が「ありあわせの材料」による「まにあわせの解決」でしかないことは、その調停が価値の低いものであることを断じて意味しない。その「ぎこちない調停」によつて社会の分極化が回避され社会連帯が強化されるとすれば、その意義はどれほど強調しても強調しすぎることはない。

共生のためのプロセスとしての政治

かくして政治の最も重要な役割と存在理由は、迅速かつ効果的な対処が要求される悪構造の公共的諸問題の処理を巡って政治



ラファエッロ「アテネの学園」(1509-1511)
(ローザ・マリア・レッツ著、鈴木杜幾子訳『ルネサンスの美術』岩波書店、1989年より)

社会のさまざまなレベルで発生する深刻な対立を不十分ながらも何とか調整し、社会としての一体性 (integrity) を維持し強化する点にある。共通の大義や理想があるところ、価値観の文字通りの一致があるところに、政治の余地はない。そうでないからこそ、一人称複数としての「われわれ」(We) の感覚 (共和の精神) を育み強化するための政治が必要になるのである。

このような意味での政治を、二五〇〇年以上も前のアテネ都市国家の市民たちはよく理解していた。政治を発見したのは彼らアテネ都市国家の市民たちであったといっても決して過言ではない。アテネ都市国家は周知のようにペロポネソス戦争の泥沼化に伴い内部での党派抗争が激化し、やがて「衆愚政治」の現出を見て衰退・消滅の運命を辿ったのではあるが、少なくともその最盛期においては、共通の伝統と絆で結ばれた市民による自治が市民生活の隅々にまで行き渡り、実践されていた。都市国家の市民たちは文字通り「政治的動物」(zoon politikon) だったのである。

その後、世俗的なものに対する聖的なものの優位が確立されるに及んで、政治はその輝きを失い、歴史の片隅へと追いやられることとなった。その政治が再び日のあたる場所へと復権するためには近世まで待たねばならなかった。この点で絶大な貢献をしたのは、なんといってもイギリスの政治家であり政治哲学者でもあったバーク (Burke, Edmund) である。フランス革命との知的・政治的対決を通して保守主義政治哲学のプロトタイプを確立したバークのな

かに、私たちは、政治の本質が調整と妥協 (相互に何とか折り合える解決策の共同探求) にあり、その主要な役割は血生臭い (暴力の噴出・支配へと帰着せざるを得ない) 革命の機先を制することにあるという、きわめて明瞭な政治擁護の言説を見出すのである。

ただ、バークが擁護しようとしたその政治はどこまでもエリートによるエリートの間での政治つまりは統治であった。一般民衆の政治的選好は統治者によって慎重に顧慮されるべきではあるが、統治の仕事それ自体はあくまでもそれに相応しい資質と能力を備えた少数者の集団に委ねられねばならず、その任に耐えられるのは、バークの見るところ、世襲貴族と「才能の貴族」(natural aristocracy) だけであった。政治参加の資格を広く市民に開放すること、つまりは民主主義の理念とその制度化に、バークはいかなる積極的意義をも認めることができなかった。それどころか、民主主義はバークにとって暴政を、それも国王専制よりはるかに始末の悪い「多数者の暴政」に道を開くものでしかなかったのである。

バークの危惧を単なる杞憂と一蹴してはならない。政治と民主主義の間にはたしかに緊張がある。とはいえ、それは、民主主義を文字通りの *demos-kratia* (人民の支配・多数者の権力) —— すなわち、「人民の利益」に敵対する一部の (ときには数百万、数千万もの) 反社会的分子に対する暴力的「教導」を正当化したジャコバン民主主義や人民民主主義など、タルモン (Talmont, J.) のいわゆる「全体主義的民主主義」



エドマンド・バーク (J・レイノルズ工房)

(totalitarian democracy) —— という意味に解する限りに置いて真であるに過ぎない。政治理論や政治思想史を学んだ方にとって周知のことであろうが、民主主義にはこれとはまったく異なるもう一つの流れがある。タルモンが英米型民主主義と呼び、またリンゼイ (Lindsay, Alexander Dunlop) がいまや古典的名著となった『民主主義の本質』(The Essentials of Democracy) のなかで高らかに謳いあげた、寛容 (他者性の承認) の美德に裏打ちされた真摯な討論にこそ民主主義の本質を見出そうとする自由民主主義である。自由民主主義において、バーク的な政治は、市民権 (政治参加の資格) の拡大を志向する民主主義の理念と出会って合体した。自由民主主義は自由主義と民主主義という二つの異質な要素の妥協と不安定な均衡によってかろうじて成り立っている脆い建造物ではあるが、その妥協・均衡は総じて対等合併であった。民主主義によって政治が一方的に飲み込まれたり、政治によって民主主義がその牙を完全に奪

われ骨抜きにされたりするわけでもなかったのである。

その後、自由民主主義の理念と制度は、政策決定および政策執行過程への市民参加の拡大と実質化を要求する「参加民主主義」(participatory democracy)、理性的討議の重要性を何にもまして強調する「熟議民主主義」(deliberative democracy)、市民共和・市民自治を高度なレベルで実現しようとする「強い民主主義」(strong democracy)など、多様な展開を見せることとなったが、特筆すべきは、そのいずれにおいても、バリエーション的な政治が理念の点でも制度の点でも不可欠の(恐らくは最も重要な)前提として継承されていることである。

理念(規範)としての政治と政治の現実

以上、政治の主要な存在理由が《価値観や利害を異にする膨大な数の多様な構成員からなる大社会(great society)》に生起する公共的諸問題を暴力に訴えることなく解決しようとする点》に存することを述べた。このような意味での「政治」すなわち「共生のための政治」はもとより、それとの隔たりの大きさによって現実政治の成熟度が判定・評価されるべき政治の理念ないし規範であって、必ずしも政治の現実ではない。

現実の政治が成熟度のきわめて高いものであり、民主主義の政治過程を通して例外はあるにせよ概ね良質の公共政策(政府政策)が選択され公共的諸問題が適切に処理されているのであれば、公共政策を学問と

して研究することに、まして公共政策デザインの実務が準拠すべき規範を探索し定式化しようすることに、さほどの意義は認められないことになろう。さまざまなアクターが各々に政策主張を政治過程に発信し、あとは安んじて政治過程の成り行きに任せおけばよいからである。現実の政治過程はもちろんそれほどに頼りになるものではない。だからこそ、公共政策の実証研究だけでなく、その規範を問う(そのあるべき姿を探索しようとする)研究が必要となる。政策判断は、自分や自分が属する集団にとって損か得かという(最も狭い意味における)「合理性」の観点ではなく、価値観や利害を必ずしも共有しない膨大な数の構成員からなる社会全体にとって望ましいかどうかという公共的(市民的)観点からなされねばならない。この点に疑義を挟む人はおそらく一人もいないだろう。問題は、その共通の足場としての公共的観点とは何か、その中身をどのようなものと捉えるかである。

公共政策規範を定式化することが仮にできたとしても、そしてその規範としての正当性にどれほど多くの人々の同意が得られたとしても、現実の政策決定および政策執行がその規範に基づいてなされるという保証はどこにもない。多元主義の政治理論や公共選択学派が剔抉したように、政治過程・政策過程に参加する諸個人や諸集団は一般に私利の実現を(唯一でないにせよ)第一義的な目的としているのであって、必ずしも公共的観点に照らして政策判断をしているわけではないからである。

とはいえ、政治過程・政策過程への参加者は同時にまた、たとえ建前のうえだけであるにしても、社会全体の利益や公共的観点に言及する。そしてこれら「社会全体」とか「公共」という言辞によって自らの政策選択や政策判断の正当性を擁護しようとする。他の人々や他の集団を説得しようと思えば、この種の言辞に頼らざるを得ない。そして、そう仕向けるところに政治一般とありわけ民主主義政治の絶大な意義と存在理由がある。公共的観点とは何か、公共政策の適否や適切さの程度をどのような規準に基づいて判定すべきであるかという問題は、政策決定者や政策執行者だけでなく、自らが正しいと信ずる政策案を政策過程に提起・発信しようとするすべての個人や集団にとつてもまた、決して無縁な問題でも無意味な問題でもないのである。

アメリカ大学院事情、その研究、教育、人事 河原大輔

DAISUKE KAWAHARA



河原大輔（かわはら だいすけ）
京都大学大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻博士後期課程休学中。現在、ニューヨーク州立大学オルバニー校文学部博士後期課程在籍。アメリカ映画研究。論文に「ポスト古典期における映画様式に関する試論―デイヴィッド・リンチ『ブルー・ベルベット』のテキスト分析」「映画研究」第1号（日本映画学会、二〇〇六年）など。

二〇〇七年九月より、フルブライト奨学生として、ニューヨーク州立大学オルバニー校に留学している。ニューヨーク・シティからハドソン川を北に二〇〇キロほどさかのぼったところに位置するこのオルバニーは、一七世紀の始めに探検家ヘンリー・ハドソンが到達して以来、植民地の交易的拠点として、またエリー運河の開通以降は工業の中心地として発展を遂げた町としてアメリカ史に記憶されている。しかしながら、ヘンリー・ジェイムズやハーマン・メルヴィルといった文豪ゆかりの地として知られるこの古都も、現在では州議会開催中のみ喧騒を取り戻すダウンタウンの町並みにかつての面影をわずかに残すのみで、郊外には大型ショッピング・モールが立ち並び典型的なアメリカの中規模都市となっている。

さて、本稿では、アメリカの大学院の研究・教育環境について、奨学金への応募から大学選定、出願、入学そして博士号取得までの一般的な過程をたどりながら、簡単に紹介できればと思う。あらかじめ断っておくと、これから述べるのは州立の人文文学系（筆者の専門は映画学）大学院に留学中の筆者の体験をベースにしているの、分野、学部、大学院によっては異なる場合があることを御理解いただきたい。

まず、アメリカ大学院への留学奨学制度はいくつかあるが、早いものでは留学開始の約一年半前（アメリカの大学院は九月入学が一般的なので前年の五月頃）には予備審査が始まるので準備にはそれ相当の時間を要する。筆者は博士課程進学後に留学のための準備を開始したが、修士課程終了と同時にアメリカ大学院博士課程への入学を考える者は、留学のための諸手続きが修士論文の準備、執筆、提出と同時に並行に行われるため、留学開始前年はおそらく多忙を極めることになるだろう。さらに、奨学金および大学院出願には複数の推薦状やTOEFL、GREといったスタンダード・テストのスコア提出が義務付けられている。そのため、あらかじめ指導教授たち諸先生に推薦状の執筆をお願いしなければならぬし、テストの受験や（個人差はあれ）スコア・アップに要する時間を考えると、留学にはより長期的な計画が必要となる。

アメリカ大学院の入学試験は、日本におけるような筆記および面接試験とは異なり、通常、書類審査で行われる。電話によるインタビューが行われる場合もあるが、試験官との面談や（日本の履歴書のような）写真の送付が行われないのは、受験者が広大な国土および世界中に点在するという地理的条件に加えて、身体的外的特徴に起因するあらゆる差別を回避するためでもある。試験は、大きく分けて、オンラインによる出願とアドミッション・オフィスへの書類提出の二つからなっており、秋学期入学の場合、出願はおおよそ一二月から三月の間に締め切られる。締め切りが日本では年賀状の、アメリカではクリスマス・カードやギフトの郵送ラッシュ（および北部では大雪が頻発する時期）とほぼ重なることもあり、書類がなかなか届かない場合もある。また、もちろん、どれだけグローバル化が進んでも日本とアメリカの間には常に時差と太平洋が横たわっているの、書類の郵送や大学のアドミッション・オフィスや教授への電話やEメールでの問い合わせには、ともかく十分な時間の余裕と多少の睡眠不足が必要である。



このようにして出願を完了した後、遅くとも四月の始めには可否が通知される。ここで入学許可を得、入学手続き、ビザの取得や数々の予防接種といった煩雑な諸手続きを経た後によりやく渡米である。大学へ移動後、アメリカにおける大学院生活の始まりというわけだが、博士号取得までにはまだまだ多くのプロセスを経なければならぬ。アメリカの大学院博士課程が日本のそれと比べて大きく異なっているのは、まず何よりも、その履修単位の多さにあるだ

ろう。例えば、筆者が在籍している大学院の場合、コースワーク終了には七二単位の授業科目の履修が義務付けられ（修士課程を修了している場合は単位をトランスファーできるので、実際には四〇単位ほど）、さらには、第三外国語の試験もクリアしなければならぬ。学生はこのコースワークと呼ばれる必修および選択科目の履修を、通常、入学後の最初の二年間で修了することとなる。この間の学生は、例えば一年目はライティング・センターと呼ばれるレポートや論文指導を行うオフィスで働き、翌年からは学部生向けの基礎科目の講師として講義を受け持つといったように、大学からのアシスタントシップを受けながら（授業料は免除）自らの学業を進めていく。留学生も、入学時に高い英語運用能力を示せば、こうした大学からのアシスタントシップや奨学金を受ける機会が少なからずあるようだが、実際には、特に州立大学の場合、外部組織からの奨学金やローンに頼らざるを得ないのが現状のようである（ちなみに日本にあるような返済義務のある援助制度は決して奨学金とは呼ばれない）。

さらに日本と大きく異なる点は、このコースワークを修了し、博士論文執筆のための資格試験（筆者の場合、決められた日数内に回答、提出する持ち帰り試験）に合格すれば、必ずしも在籍している大学院へ通学し続ける必要がないということだろう。特に留学生の場合、例えば大都市で生活していれば経済的負担も大きいので、コースワークと資格試験終了後に帰国し、博士論文を執筆することができる。また、履修授業科目数にかかわらず一定の授業料がかかる日本の大学院と異なり、アメリカの大学院では授業を履修しなければ基本的に授業料はかからない。そのため、休学や復学は比較的自由であるし、それゆえ在籍する学生の年齢やキャリアも多様性をもつことになる。

筆者は、現在、コースワークの途上であり、これより先の展開について詳しく述べることができる立場にないが、コースワーク修了後、査読委員を選出し論文執筆にひたすら集中するというところは洋の東西を問わず共通するところが多いだろう。しかしながら、筆者が改めて感じることは、アメリカの大学院はプロの大学教師を組織的に量産しようとする傾向が強いということである。アメリカの大学院は、数年間学生を放牧したのちに、まるで上質のウールが出来上がるのをそっと待つように、彼あるいは彼女らの知的成熟と才能の開花を期待するというよりも、むしろ、こなすべきノルマを課し、それを消化したものには試験のチャンスをはば自動的に与え、最終的に博士号として認可する。また一方で、アシスタントシップや種々のワークシヨップによって、学生が在学中に職業的スキルおよびノウハウを習得することを促進するといった教育法である。こうした教育法は是非について論じるスペースもそのための十分な経験も筆者にはないが、すくなくとも、まるで自動車学校に入学したような気持ちになったことだけは記しておきたいと思う。

さて、学生の立場から教授陣の研究・教育活動を見ると、また日本と大きく異なる一面が見えてくる。教授陣、とりわけ若いアシスタント・プロフェッサーは大学にお

ける終身在職権（テニユア）を獲得していないのが普通なので、彼らは「出版か死か」と言われる厳しいアカデミック上の競争に駆り立てられている。あるアシスタント・プロフェッサーは学会その他から認められる本をそれなりに有名なアメリカの大学出版局から出すと同時に、別の有名校（アイヴィ・リーグ校）のアソシエイト・プロフェッサーのポジションに応募し、みごとその職に採用された。そこまでならよくある話なのだが、このアシスタント・プロフェッサーは別の有名校に採用が決まったという「切り札」を手に、本務校上層部と交渉し、大学を移らない代わりに、本務校での待遇改善を要求した。すなわちテニユアの取得、昇任、給与と研究費の増額要求を本務校上層部に飲ませたのである。大学側としては、新しい優秀な人材が学外に流出するのを未然に防げたわけだし、助教授側としては引越などをしなくとも、新しい研究・教育環境を手に入れたわけなのだから良いことづくめのようなものである。しかし交渉材料に使われた別の有名校の採用通知は白紙に戻ったわけであるから、広い意味でアメリカのアカデミック・マーケットの自由競争は日本にくらべると雲泥の差があると言わねばならない。

非常に簡素ながら、アメリカの大学院事情について紹介させていただいたが、これからアメリカへの留学を考えている方にとって、本稿が少しでも手助けとなれば幸いである。



フロンティア ■組織における人間の自由——川上俊彦研究序説——

松本郁子

IKUKO MATSUMOTO

私の研究生活は、今まで太田覚眠研究一筋であった。それが今、一つの転換点を迎えるようとしている。それは川上俊彦の研究である。

太田覚眠（一八六六年三重県四日市市法泉寺生）一九四四年モンゴル内蒙古集寧寺（没）とは、ロシア極東ウラジオストクの浦潮本願寺（浄土真宗本願寺派）で、一九〇三年（明治三六）から一九三一年（昭和六）までの約三〇年間、布教活動に従事した僧侶である。

太田覚眠の業績の中で最も著名なのは、日露戦争（一九〇四年）におけるシベリア残留邦人帰国支援活動である。日露戦争開戦後、シベリア奥地に居住していた日本人居留民は最終の引揚船に間に合わず、取り残されることとなってしまった。彼らの多くは下層労働者や娼婦など、いわば社会の底辺に位置する人々であった。覚眠は取り残された日本人を見殺しにすることはできないとして、残留を決意。一九〇四年（明治三七）二月一日ウラジオストクを出発し、残留邦人約八〇〇名を集め、ドイツ経由で二月六日長崎に帰港した。

太田覚眠がシベリア残留邦人「救出」を決意した時、在ウラジオストク日本貿易事務官川上俊彦は国家の一官吏として、即刻引き揚げるべきことを要求した。それが日本国家の意思だということである。しかし覚眠はこれを峻拒した。シベリア奥地に取り残された日本人を見捨てて帰ることは阿弥陀仏が許さないというのである。川上俊彦の国家第一主義と、太田覚眠の宗教第一主義の立場の衝突であった。激論の末川上は、署名入りの証明書と万一の時に自殺するための小銃を贈り、自らの責任において覚眠の残留を許可した。ここには川上俊彦の武

士道的精神と太田覚眠の菩薩道の精神が対立し、最終的には交流するという場面が描かれている。両者は「弱きを助く」という精神において、武士道と菩薩道の共通点を見出したのである。

従来私は、以上の問題を太田覚眠の側から光を当てて論じてきた。しかし今後はこれを川上俊彦の側から光を当てて見ていきたいと考えている。

川上俊彦は、一八六一年（文久元）村上藩士川上泉太郎の長男として生まれた。本籍地は新潟県岩船郡村上本町（現在の新潟県村上市）。東京外国語学校でロシア語を学び、一八八四年（明治一七）卒業の際に外務省に奉職した。一九〇〇年（明治三三）貿易事務官としてウラジオストクに赴任。一九〇四年（明治三七）の日露戦争の際には、シベリア在留邦人の引揚を指揮、ついで遼東（山東半島）守備軍司令部付きとなった。一九〇五年（明治三八）の旅順開城後の水師営の会見の際、乃木希典とステッセルの通訳の任に当たった。この会見は、乃木が敵の敗将ステッセルを辱めることなく、武士道の精神で丁重に扱ったことで知られている。その通訳に川上が選ばれたのは、川上のロシア語能力が認められたためであることは当然であるが、彼の持っていた武士道の精神を、乃木が評価していたという問題もあったかもしれない。これは今後の研究課題である。

一九〇九年（明治四二）にはハルビン総領事として赴任したが、ハルビン駅頭で随行していた伊藤博文が襲撃された際、銃弾を受けて負傷し入院した。一九一三年（大正二）南満洲鉄道株式会社理事、一九二五年（大正一四）北樺太鋳業株式会社代表取締役役会長、一九二七（昭和二）日魯漁業株

松本 郁子（まつもと いくこ）
一九八〇年新潟県村上市生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。専門分野は日露交流史および日本思想史。



川上俊彦『川上俊彦を憶ふ』（昭和十一年）より



救出 田 覚 眠 物 出
留 民 太 田 西 出
時 眠 太 露 版
眠 太 語 社、大
居 眠 太 語 正
時 眠 太 語 十
眠 太 語 四
眠 太 語 年



（一）川上俊彦の略歴は、村上城跡保存育英会編『鯉の子ものがたり―歴史に残る人々』（二〇〇六年）によった。

式会社社長に就任、いずれも難しい外交問題の絡む会社の運営に当たった。一九三五年（昭和一〇）鎌倉の別邸で死去。享年七五歳であった。

じつは川上俊彦の本籍地新潟県村上市は、私の郷里である。そうした偶然もあって、日露戦争における太田覚眠と川上俊彦の出会いと交流には、何か因縁のようなものを感じていた。覚眠は当時三九歳、一方の川上は四四歳、年齢的には川上の方が上である。しかし思想的には川上の方が覚眠に鍛えられ、導かれたと言えるのではあるまいか。覚眠の思想に教導された川上と、覚眠の思想と行動に学ぶ自分自身の姿が重なって、深い縁を感じずにいられないのである。それはさておき、川上俊彦は外務省の一人、明治政府の一官僚である。その川上が覚眠の残留を許可し、署名入りの証明書や小銃まで贈るとするのは、当然外務省や日本政府の叱責を受けることを覚悟の上での行動であったと考えられる。川上は覚眠の強い宗教的信念に触れることにより、単なる日本国家の一官吏という立場を超えて、真の人間としての決断を示すことができたのである。

人間は皆、家族、学校、会社、国家、宗教など、必ず何らかの組織に属し、その組織の一員として生きている。しかし決定的な場面に立たされたとき、その組織の枠を超えて一人の人間として行動することができるか否か、そのとき、その人間の真価が問われる。「組織における人間の自由」の問題である。これを川上俊彦という人間に光を当て、追求していきたい。以上が現在の私の研究テーマである。

地球温暖化や熱帯林の過度な伐採など、近年地球を取り巻く環境は大きく変化しています。これに伴う生物の急速な絶滅は、はるか昔の大量絶滅がおきた時代を越えるスピードで進んでいます。これは人間活動によって生育地域が破壊されたり、気候が変化したりするために起きているのです。

生物多様性の重要性は、薬用植物などの有用な生物が未知のまま絶滅してしまうこと、生態系のバランスが崩れることなどで説明がなされています。しかし芸術が多様性そのものに価値があるように、生物にも多様性自体に価値を置くべきだと考えられるようになってきました。たとえるなら、レストランに行つて食事をするときに、ただ一種類のメニューしかないお店と、たくさんの種類のメニューがあるお店、どちらが楽しいか、ということです。

この多様性とは、どのようにつくられるのでしょうか。ある種が広い範囲に遺伝子交流がおきていました。ここでは自由に遺伝子交流があつて、この種が二つの集団に分かれてしまったとします。すると二つの集団間では遺伝子交流が制限され、それぞれの集団の中でのみ自由な交配ができるようになります。また同時に、二つの集団はそれぞれの環境に適した形に変化していきます。そして長い年月がたった後、かりに二つの集団を交配しようとしても、もう遺伝的な隔離が進んで交配できなくなつていたとき、もともと一つだったはずの種が、二つに分化した、ということが出来ます。これが多様性の形成の一例です。

このような例を実際に検証するために、私はニューカレドニアのウツボカズラを使つて、種内分化の検証を試みました。ウツボカズラは食虫植物で、壺状に変形した葉に虫を落として消化し、栄養を得る植物です。そのため土壌に栄養がなくても生きていけるので、ニューカレドニアに広域に分布する蛇紋岩土壌と呼ばれる貧栄養な土壌にのみ生育しています。蛇紋岩は貧栄養だけでなく重金属が非常に多く含まれており、他の植物の生育にはあまり適していません。このウツボカズラは蛇紋岩土壌の分布にそつて隔離分布していますが、一種であるにもかかわらず、多様な形態をもっています(図1)。

この形態的多様性は、何に起因するのでしょうか? 私たちはウツボカズラが貧栄養の土壌に特異的に生育することから、土壌環境によるものではないかという仮説を立てました。そこでウツボカズラの捕虫葉サイズや蜜腺、消化腺の数などの形態的特徴の計測と、土壌の分析をしました。この結果、それぞれの場所でカルシウム量やマグネシウム量、pHなどが大きく異なることがわかりました。また土壌分析の結果と形態的特徴の相関を検討しました。するとカルシウム量、マグネシウム量と電気伝導度は、特に捕虫葉サイズと正の相関を示しました。つまり捕虫葉の大きさは、なんらかの栄養塩の量に規定されていると考えてよいでしょう。環境の相違が形態の違いを生み出すことが明らかになったのです。



図1 ニューカレドニアのウツボカズラの形態的多様性
色、形が集団間で大きく異なっている。

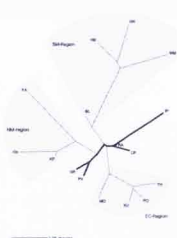


図2 AFLP解析による集団間の遺伝的距離
集団ごとには弱い遺伝子流動が見られるが、地域ごとにまとまりを持つため、地域間での遺伝的分化が進行していることを示す。



倉田 薫子 (くらた かおるこ)
一九七七年生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科環境学専攻博士課程修了。専門分野は植物系統分類学、植物進化学、植物地理学。

を用いて解析しました。この解析から、種子の移動はほとんど起きていないことがわかりました。種子流動については集団ごとに遺伝的な分化が進んでいるといえます。一方で、花粉は近接する集団間で微量ながら移動していると推測されました(図2)。集団間における遺伝子の流動が完全になくれば、集団ごとに分化が進み、種への進化が起るものと考えられます。つまり環境の相違によって形態が分化し、集団の地理的隔離によって遺伝子流動がなくなることで遺伝的分化が起き、集団ごとに多様化が進み、独自の進化が起きるのです。ニューカレドニアのウツボカズラは連続して分布しない特殊な土壌に特異的に生育すること、常に進化を続けていると言えるでしょう。これは一種内での分化の例ですが、同様のことが種間においても起きていると考えられます。

このように長い時間をかけて起きる多様性の形成は、人間の手では決して創れないものです。また一度破壊されると復元することもできません。現在の人間の活動による急速な絶滅は、地球の歴史が育んだ多様性を一瞬で壊してしまうのです。一人ひとりがほんの少し生活を見直すだけで、貴重な生物多様性が保全できるかもしれません。今回紹介した種多様性形成の研究は、直接人間の利益として経済的価値がついた目に見えたりするものではありませんが、このような基礎研究が将来的に地球環境保全に役に立つことを祈って、研究を続けています。

「狩野永徳」展を終えて……………山本英男

HIDEO YAMAMOTO



山本英男（やまもと ひでお）
一九五七年 岡山県生まれ。大阪大学文学部美術史学科卒業。京都国立博物館保存修理指導室長、人間・環境学研究科客員准教授。主な著書に『室町時代の狩野派』京都国立博物館編（中央公論美術出版、一九九九年）、『雲谷等顔とその一派』（日本の美術 至文堂、一九九三年）などがある。

昨年の秋、京都国立博物館で行われた特別展覧会「狩野永徳」は連日、大勢の人で賑わった。開館前には門の外に千数百名もの人が並び、昼前後ともなると、会場前の中庭に数百メートルの行列ができた。最長の待ち時間は百五〇分と聞いているので、どれほど凄まじい混雑ぶりであったかが容易に想像いただけよう。総入場者数は二三十万人余。会期は休館日の月曜を除くとちょうど三〇日間だったから、一日平均に換算すると七千七百人近くの人にお越しいただいたことになる。京博の過去の展覧会と比べても、この数値は「雪舟」展（二〇〇二年春）の九千二百人（総入場者数二二万人。実質会期は二四日間）に次ぐ堂々の第二位。同展を企画・担当した筆者としては、まことに嬉しいかぎりである。ただ、そうした一方で、館内の混雑を少しでも緩和すべく、部屋の中央に置いていた展示ケースを何度移動させたり、仮設ケースの壁を取り払ってスペースを設けるなど、悪戦苦闘の日々が続いたことも告白しておこう。

ご存じのように、狩野永徳（一五四三～九〇）は、若くして將軍・足利義輝の御用を務め、三十代以降は織田信長、豊臣秀吉ら天下人の寵愛を一身に受けた天才絵師である。旧御物の「唐獅子図屏風」（宮内庁三の丸尚蔵館）や「檜図屏風」（国宝 東京国立博物館）にみるごとく、その壮大かつゴージャスな画風は、われわれが抱く桃山という時代のイメージすら作り上げていくといっても過言ではない。だが、そんなスーパースターの回顧展がこれまで一度も開かれたことがないと申し上げると、意外に思われるむきも多いに違いない。その理由はしごく簡単である。彼の代表作となるはずだった安土城や大坂城などの大規模な障壁画群はことごとく失われ、これまでに永徳真筆とみなされる作品は十指に満たないとされてきたからにほかならない。誰が考えても、こうした状況ではさすがに回顧展を開くのは難しいといわざるをえないだろう。

もっとも、ここでいう一〇点未満とは既述の二作品のような、どの研究者も永徳筆と信じて疑わない作品のことであって、ほかに永徳筆の可能性をもつものや永徳印を捺すものがないというわけではない。また、全くの未紹介で「もしかすると永徳筆かもしれない」作品にも、それまでの調査で何点か心当たりがあった。もしこれらをすべて同じ建物内に展示できれば、これまで曖昧なまま過ごされてきたさまざまな問題にひとつの解答や方向性が与えられるのではないかと、と考えたのは今から三年ほど前のことである。

ところで、本展が京博一会場のみで開催され、しかもその会期が五週間と短いこと（ふつうは一会場六週間）を不思議に思われたことはないだろうか。むしろ、これにははっきりとした理由がある。作品の展示期間に厳しい制約があるからだ。とくに国宝、重要文化財に指定された絵画については、保存のために長くとも四週間くらいが展示期間としては最長であり、作品によってはわずか一、二週間に制限されることもある。従って、二会場で行うと自ずと展示替えをせざるをえず、仮に一会場でも、場合によっては常時展示が不可能なことさえ想定されるのである。せっかく見に来たのに「唐獅子図屏風」や「檜図屏風」がない、「洛中洛外図屏風」（国宝 米沢市上杉博物館）がないでは、妙味は半減してしまう。共催していただいた新聞社やテレビ局には申し訳なかったが、こうした理由から短期の単館開催に踏み切ったという次第である。

次に、本展を企画したねらいと成果について触れてみたい。ひとつは、どの作品を永徳真筆とし、どれを周辺作（工房作）とするかという問題である。この点については、同じ建物内に同じ条件で作品を陳列し



入場待ちの行列



会場内風景

たことによって、かなりの成果が得られたように思われる。その詳細を述べる余裕はここではないが、新出もしくは再発見の作品や、これまであまり顧みられなかった扇面などの小品画に永徳真筆の可能性を強く見出すことができた。雪舟の場合もそうなのだが、ビッグ・ネームになればなるほど、研究者の鑑識眼は異常なほど厳しくなり、基準作を少なくする。永徳の場合はまさにその典型例だったといえるだろう。

ふたつめは永徳の水墨画の代表作、聚光院障壁画（国宝）の制作時期である。この点については建物の創建時期に併せた永禄九年（一五六六）、永徳二十四歳の若拙きとする見方が有力視されてきたが、近年、

諸々の状況証拠から、その建物が天正十一年（一五八三）に建てられたとみなし、それに併せて障壁画も同年に制作されたという説が唱えられたのであった。天正十一年といえば永徳四一歳の晩年作となるわけで、画風展開への理解を根本から見直す必要があるのはいまでもない。目下、この説の当否については研究者の間で大きく意見が分かれているが、本展ではその説に賛同する立場を取り、それを画風に補足するいくつかの作品を紹介した。これにより、祖父・元信の影響を濃厚に伝える初期の画風から、次第に己の様式を確立していく過程を提示し、そうした中で同院障壁画の位置づけがかなり後れることを示した。ただし、

その制作時期が天正十一年に置けるか否かは決め手を欠いており、今後の検討課題とせざるをえない。

三つめは、「唐獅子図屏風」の当初の形状の問題である。そもそもこの画は天正一〇年（一五八二）に秀吉が毛利家に贈った陣屋屏風であったと伝えられてきたが、やはり近年になって、その画風の特徴から、秀吉関係の御殿の障壁画（壁貼付け）をのちに屏風に仕立て直した可能性が指摘されている。筆者も全く同意見であり、本展ではとくに現在の画面の上下に大きな切り詰めのあることに注目し（これまで不思議とこの点について言及されることはなかった）、壁貼付けの可能性が高いことを指摘した。今後は、この画が秀吉関係のどの御殿に設えられていたかが論議の焦点になることだろう。

このほか、いろいろと成果はあったが、何より重要なのは二三人の方々に永徳作品の素晴らしさを実感していただけたことに尽きる。もちろん、展覧会の良し悪しは入場者数の多寡とは必ずしも関係はないが、かといって会場がガランとしているのはやはり寂しい。ひとりでも多くの人にご覧いただき、喜んでもらえることが担当者の喜びであり、また重大な責務なのだと思ふ。

サチーレ——「ヴェネチア共和国の庭」で無声映画を 今井隆介

RYUSUKE IMAI



今井隆介（いまい りゆうすけ）
一九七四年、京都市太秦に生まれる。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程指導認定退学。専攻分野は映画学（アニメーション史・アニメーション理論）。現在、花園大学文学部創造表現学科専任講師。論文に「描く身体から描かれる身体へ」初期アニメーション映画研究「映画学的想像力」（人文書院、二〇〇六年）、「エイゼンシュテインのデイズ・オブ・ア・ニメーションの事典」（朝倉書店、二〇〇八年）近刊がある。

イタリアのヴェネチアから北東へ約六五キロ（鉄路で約一時間）、オーストリアとの国境へ向かう街道の途中にサチーレという小さな町があるのをご存知だろうか。ミラノ、ヴェネチア、フィレンツェ、ローマ、ナポリなど、イタリアには世界的に有名な都市や観光名所が各地にあるが、サチーレを知る人はそれほど多くはないだろう。

人口二万人弱。木工家具の生産が盛んで、家具工房からピアノメーカーに転じ、世界最大のブランドピアノを手づくりしているファツィオリの本社工場があるから、ピアノに詳しい人なら耳にしたことがあるかもしれない。しかし町並みが世界遺産に登録されていたり、有名な芸術作品を展示していたりするわけでもないから、観光でサチーレを訪れる旅行者は少ないにちがいない。豊かな田園と湖水に恵まれ、町の中心に改築なった立派な教会堂がある点でも典型的なヨーロッパの田舎町といってよいが、サチーレは一時的に世界中から「巡礼者」が集まる「聖地」となったことがある。ポルデノーネ国際無声映画祭が開催されることによって、世界中から第一線の映画学者やその卵そして／あるいは無類の映画ファンがサチーレをめざしてやってきたことがあったからである。

【世界で一番幸せな祭典】

ポルデノーネ無声映画祭は、映画がまだトキー化されていなかった時代、すなわち一九九〇年代ごろから一九三〇年代ごろまでに製作された無声映画だけを上映する国際的な催しである。サチーレの東隣にある二回りほど大きな町ポルデノーネで毎年一〇月に開かれていたのだが、主要会場の古い劇場が改修されることになり、工事が完了するまでの期間、すなわち一九九九年から二〇〇六年までの間、ここサチーレで無声映画祭は開催されることになったのである。

筆者がこの国際無声映画祭に参加するためにサチーレを訪れたのは二〇〇一年のことで、九月に発生したアメリカ同時多発テロ事件後、予約していた航空会社が倒産に追いこまれ、土壇場で他社に切りかえたことかと思いだされる。無声映画祭はサチーレに移って三年目、二〇周年の節目を迎えており、数少ない現役の活動弁士、澤登翠による「弁士ショー」を含めた日本映画特集と、アフリカ系アメリカ人映画作家の先駆者オスカー・ミシヨの特集が組まれていた。無声映画祭に関する予備知識は正直なところほとんどなかったのだが、こんなにすばらしい国際映画祭が他にあるだろうかというのが筆者の第一印象であった。

上映される作品はどれも世界映画史上貴重な遺産というべきものばかりであり、一流のピアノリストによるすばらしい生伴奏は、映画祭が同時に音楽の祭典でもあることを教えてくれる。観客の質の高さも世界一にちがいない。世界一の映画愛好者たちとともに、アドリブで演奏される音楽に酔いしれつつ、連日十何時間も無声映画を浴びるように観る。往年の傑作の復活を祝福し、失われたとされていた幻の映画の発見を喜び、その発見と保存、修復に尽力した人々の功績をたたえあう。そして初期映画学会の年次総会が開かれ、期間中、若い映画研究者たちのシンポジウムが毎日開催される。これがポルデノーネ無声映画祭の醍醐味である。

映画研究を志した筆者にとって、無声映画祭で見聞きしたことはかけがえない宝物となっているが、それらはすべてサチーレという町の記憶と一体となっている。そして最初の滞在以来、ポルデノーネ無声映画祭とはまた別に、サチーレの町そのものが恋しくてしかたがないようになってしまったのである。

【ゆく水清きサチーレ】

無声映画祭が開かれなければ生涯訪れなかったかもしれないヨーロッパの小さな町

（１）ブランドピアノの奥行きは長さは通常一七五センチ前後だが、ファツィオリ社の最大モデルは三〇八センチある。

（２）一九一八年から四八年にかけて五〇本近い「黒人劇場専用映画」の製作にたずさわったアフリカ系アメリカ人映画作家の草分け的存在。その作品と功績については加藤幹郎『映画とは何か』（みすず書房、二〇〇一年）に詳しい。

だが、サチーレには他の町にはない静けさと美しい水の流れがある。サチーレはアルプスから流れ出てアドリア海に注ぐリヴェンツァ川の中流域にあり、教会堂のある町の中心部は川の流れに囲まれて小さな島になっている。豊かに流れる水は清らかで、川底に生い茂った長い水草がゆったりと漂っている。無声映画祭でサチーレにやってきた者は誰もが心の中でこうつぶやいたにちがいない。「まるで『惑星ソラリス』のようだ」と。映画ファンでなくとも川辺をそぞろ歩きし、アーケードをくぐりながらウィンドウ・ショッピングをし、藤棚の下で食事をしてワインを傾ければ、誰もがサチーレの虜になってしまうだろう。都会の喧騒を離れて、ゆるく流れる時間を楽しみたい人にはうってつけの町なのである。

もともとサチーレの水に「癒し」を求めたのは中世のヴェネチア商人たちも同じだったらしい。サチーレが所属するフリウリ・ヴェネチア・ジュリア州は、一八六六年にオーストリアからイタリアに割譲された地域であり、州都のトリエステはオーストリア帝国の外港として栄え、第一次世界大戦後にイタリアに編入されたという歴史をもつ。全体的にローマよりウィーンに近い地方といえるが、しかしサチーレはそのなかでも西の端に位置し、他のどこよりもヴェネチアとのつながりが深い。

中世のヴェネチアはたしかに一大商業都市として栄えていたが、夏には淀んだ水路が悪臭を放ち、蚊も大量に発生する。さすがに耐えがたいものがあつたのだろう。ヴェネチア商人たちは、海上の人工島とはちがって澄んだ水が豊かに流れるサチーレに

資金を投じ、町を保養地として築きあげた。町中がしつとりと落ちついているのは、豪商たちの別荘地だった伝統が今も息づいているからかもしれない。整備された水路と美しいアーチが並んだ建物のとりあわせは、たしかにヴェネチアを彷彿とさせるし、「小ヴェネチア」「ヴェネチア共和国の庭」と呼ばれていたころの風情は今でも町のそこかしこで感じることができる。

「切り裂かれる青空」

サチーレは映画上映中、教会の鐘の音が館内にまで聞こえるほど静かな町なのだが、屋外にいるとき不意にジェット機の爆音を聞くことがある。見あげると青空に白い飛行機雲が旅客機の何倍もの勢いで伸びていく。どうやら軍用機らしい。調べてみると、サチーレから北東へ約一〇キロのところに地中海地方で最大規模の米軍基地があり、ボスニア紛争（一九九二―九五）やコソボ紛争（一九九八―二〇〇〇）にNATOが軍事介入したときには、最前線の空爆基地として使用されたという。一機でさえ爆音が響き渡るというのに、爆撃機の編隊が離発着を繰り返したら一体どんな騒音になるのだろうか。無声映画祭の開催中に大規模な空爆が実施されたことはなかったようだが、空軍基地があるかぎり、サチーレの静寂は上空からかき乱され続けるのである。

隣国で凄惨な民族紛争が勃発し、NATOによる軍事的制裁が行われているときに、無声映画祭の開催だの鑑賞だのと、太平楽にもほどがあると思われる方もあるだろう。しかし、今や貴重な文化遺産となった無声映画をそうした戦火から守り、後世に受け

継いでいくこと、無声映画の明かりを点し続けることもまた、文化や芸術や歴史を灰燼に帰してしまう蛮行に対する挑戦なのである。



無声映画祭のメイン会場となったテアトロ・ザンカーナロ



サチーレ市内を流れるリヴェンツァ川と大聖堂の鐘楼

(3) スタニスワフ・レム原作、アンドレイ・タルコフスキ監督作品。一九七二年度カンヌ国際映画祭審査員特別賞受賞。未知の惑星ソラリスの力によって、自分の意識や記憶を触知可能な物体として突きつけられることになった科学者の苦悩を描く、哲学的SF映画の金字塔。全編に「水の主題系」が満ちあふれ、惑星ソラリスじたい大洋におおわれている。

現代オセアニアを生きる芸術

渡辺 文

FUMI WATANABE



芸術が従来存在しなかったとされるオセアニア島嶼域において、今、「芸術」というジャンルが生まれつつある。中心的役割を果たしているのが、オセアニア・センター¹⁾(在フィジー)の芸術家集団だ。ここにはフィジー、トンガ、サモア、ソロモン、ヴァヌアツ、キリバス、などオセアニア各地から人々が集まり、オセアニアの文化に立脚した芸術を「から創造しよう」としている。一九九七年より始まったこの活動は現在成熟期を迎えはじめ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカなどのアート・シーンでは流派に準ずる存在として認識されるに至っている。彼らの実践する「オセアニアらしい芸術」とは何かなるものか、またその斬新さを理解するために、まず、以下ではオセアニア・センターのある一日の様子を覗いてみよう。

芸術家たちの日常

朝九時。大方のアーティストたちが姿を現し、センターの一日はすでに始まっていた。ちよつと動くだけでも体力が奪われるような蒸し暑い日だった。数名のアーティストは日かげにゴロンと寝転がり、タバコをちびちびと吸いながらおしゃべりをして

いる。わたしは彫刻家パウラ・リンガが作業をおこなう横に寝転がった。パウラはフィジー諸島内フランガ島の伝統的彫刻師クランの血を引き、その技術を芸術に用いている。フィジー内外において「偉大な芸術家」として名が高い。二〇メートルほど向こうのステージでは六名のダンサーと二名の画家が爆音のなかで踊りの練習に励んでいる。「踊ったあとは絵筆の調子がいい」と身体を動かす画家は多く、絵のなかに踊りの動きを取り入れる(写真1)ことは彼らが目指す芸術のひとつの要件ともなっている。六〇歳も近いパウラはうるさがることもなく、楽しそうに腰を揺らしながら、音楽に合わせての柄頭を打ち鳴らす。巨大な木片にはリズムがそのまま彫り込まれていき、ダンサーたちの踊る音楽にはパウラの奏でる彫刻の音がつけ加わる。

しばらくすると若者たちが通りかかった。彼らはパウラのかたわらに座り込み、世間話を始めた。センターは壁をほとんどたない造りであるため、通行人が立ち寄ることが頻繁に見られるのだ。パウラの作品を「すごい、すごい」と言っていた一人が、ふと見ると彫刻刀を手に作品を削り始めた。芸術祭に出品しようとパウラが三ヶ月以上も手がけてきた渾身の作品をだ。驚いたわ

渡辺 文(わたなべ ふみ)
一九八一年、大分県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程在籍。文化人類学。「オセアニア芸術が開く「オセアニア」—フィジー、オセアニア・センターの絵画制作を事例に—」(「コンタクト・ゾーン」創刊号、二〇〇七年)。

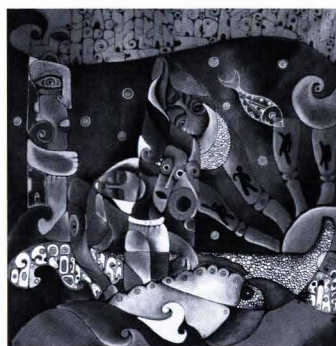


写真1 「動きのある」絵。Mason James Lee, The Legend of the Phantom Canoe, 200×200cm, oil on canvas, 2006。
フィジー諸島内プロトックラ島の首長とその妻を乗せ、今も海原を漂っているという伝説上のカヌーを描いたもの。

たしは止めようとしたが、当のパウラ本人は気にしない様子である。若者は結局一時間ほど、ときにパウラの意見を仰ぎつつ、なんとも楽しそうに作品へ手を入れ続けた。「あなたの立派な芸術作品にたいしてこんなことを許していいのか」と憤るわたしに對して、パウラは事も無げにこう言った。「木を見ると彫らずにはいられない人種ってもんがある。見たかい、あの子の嬉しそうな顔! ワタシがこの木に呼ばれたように、あの子もこの木に呼ばれたんだろう。それをワタシのわがままで止めてしまったら、この作品は偽物になっちゃうじゃないか」。

自由な個人ではない制作者

(1) 一九九七年、オセアニア・センター(Oceania Centre for Arts and Culture)はフィジー首都スヴァに位置する南太平洋大学内に設立された。トンガ出身のセンター長エベリ・ハウオファ教授は小説家としての評価も高く、独特のユーモアと皮肉を軽快に織り混ぜた『おしり口づけ』を村上清敏・山本卓訳(岩波書店、二〇〇六)など邦訳も出版されている。センターはオセアニアの人びとの民族的・国家的多様性を超克する「真にオセアニア的な芸術」を創造するという理念をもち、そこでは正式な教育者をもたないゆるやかな共同体としての「芸術の家」が目ざされている。

(2) 木村重信『民族芸術学』(思文閣出版、二〇〇〇)

さて、オセアニア・センターのこのような光景は、以下の二点において、わたしの目にひどく奇妙なものとして映った。まず具体的な彫刻過程へ制作者以外の者が手を入れたという点。そして第二に絵画や彫刻、舞踊や音楽というそれぞれの分野が不可分なかたちで進行するという点だ。

狭義の芸術が西欧近代の特異な歴史的・文化的背景の上に成立したことは、人類学ではほぼ合意事項となっている。Eの語源であるラテン語の*ars*とは、もともと形成における技術を意味した。西欧近代、とりわけルネサンスの文化のなかで作者の個性が重視されるようになると、それは自己表現としての意味を強め、Eから職人的技術を排除したところの大文字単数で考えられるような Σ となっていく。これが(純粹)芸術であり、自由な個人のつくり出す美という芸術観だ。わたしは、まさにこのような芸術観が共有されるところで進行するセンターの活動を「奇妙」と感じたわけだ。しかし、彼らには彼らの芸術がある。創造の原理自体を木に認めるだけでなく、彫刻行為そのものを他人の手にあつまり受け渡すパウラは、作者こそが作品の完全なる創造主であるという前提を受け入れない。パウラにとって彫刻行為とは常に周囲の人から介入されるものであるし、人間の精神によって木材を自在に操ることなど不可能なだけでなく、それは彼にとってなんらの魅力ももたない。さらに絵画や彫刻、舞

踊や音楽の分野は独立的に極められてこそ高尚な芸術として洗練されるという前提も、ここでは通用しない。アーティストが生活を営む社会において、それぞれの分野は密接に絡まり合いながら文化をつくりあげている。そして、何よりそれらは人びとを独自の専門領域へと閉じ込めるのではなく、人びとをつなげる役割を果たすからこそ価値がある。このような文化的背景を土台として、オセアニア・センターに集まるアーティストたちはゆつくりと「オセアニア流の芸術」を創り出しているのだ。

美術館に収まらない生きた芸術

しかしそこには大きな葛藤もある。アーティストが憧れるのはやはり華麗な芸術界で有名になり、収入を得ることだ。西洋を中心としたアート・シーンで本物の芸術と認知されるには個人名が必要であり、作者は自由で自立した専門家であることが期待される。たとえばパウラの作品にネームプレートが付されるとき、そこからはあの青年の笑顔の軌跡が抹消され、彫刻技術が立脚するクラン(氏族)の名前が排除され、彼の手と腰を動かした小気味よいリズムはノイズとなり、ステージに立つ彼は「木によって呼ばれた男」ではなく「木を支配してみずからの精神を見事に表現した男」へと変換される。そしてもちろん制作の場からみえてきたのは、このように市場や美術館展示には回収できない芸術のあり方だった。現代オセアニア芸術が立脚するのは、

天才的作者の完結した個性が読み解かれるような純粹物としての作品ではなく、作者を含む現実社会のさまざまな人々の実践の絡まりにおいて生み出され、展開される総体としての作品なのだ。

このように、「オセアニア芸術」がジャンルとして確立するためにはまだまだ乗り越えなければいけない問題が残されている。しかし個性と集合性とのはざまから見事に成立しているこのようなオセアニア芸術のあり方は、現代オセアニア文化を理解するための要であるばかりでなく、まさに西欧近代芸術を基盤とした既存の芸術概念を相対化するような斬新さに満ちている。そこから、「西洋芸術Ⅱホンモノ芸術、非西洋芸術Ⅱマネゴト芸術」という見方をこえ、「芸術」という名の下に進行するさまざまな地域の実践が、ともに評価され、互いを刺激できるような地平がみえてくるのではないかと、わたしは思っている。



写真2 彫刻家パウラ・リングの制作風景。後ろではダンサー達が練習をしている。

西村 稔Ⅱ著

評者・嘉戸一将（相愛大学人文学部講師）

『福澤諭吉——国家理性と文明の道德』

名古屋大学出版会

二〇〇六年十二月 三六〇頁

定価六、〇〇〇円



福澤諭吉は、言うまでもないが、近代日本を代表する思想家である。そのため、福澤に関する研究はもちろん、福澤に言及した書物・論文は数えきれないほどあると言っても、決して過言ではない。それは、福澤が日本における近代化の思想を体現するなどということに起因するのではなく、福澤の思想の多面性のためであろう。多面性とは、単に研究し尽くせないなどということの意味するのではなく、その解釈が熱を帯びた論争を引き起こしかねないような場であること、一つの解釈が別の解釈の生産を促すような際限のない生産の場であることを意味する。そ

れは福澤をめぐる言表群が活動しつづけていることを意味するものの、いつの間にか、言表は福澤なる重力場から遊離し、自らが向き合っているのが福澤そのものではなく、福澤解釈、あるいは解釈の解釈……などといった疑念に取りつかれかねない混沌でもある。そのため、解釈者は、ときに単純な解釈を戒め、一定の解釈規則を設けることで規制を自動させる。この一種の秘儀に同意できない者は、福澤について語ろうとするとき、必ず躊躇を強いられる。

この躊躇が本書の出発点であり、本書は秘儀ではなく、思想史学として福澤を解釈することを試みた画期的な研究である。言い換えれば、本書は、解釈者たちが便宜的に設定した特異な言葉に惑わされることなく、福澤の思想そのものに一貫して見出せる思考方法をいくつかの概念によって抽出することで、福澤の思想を分節化するという試みである。その概念の一つが、タイトルにもある「国家理性」であろう。フリードリヒ・マイネッケの古典的研究によれば、国家はクラートス（力）とエートス（倫理）によって創られなければならないが、それらのバランスをとり、国家生活を最善の状態に達せしめる、それらの間の架け橋が「国家理性」である。すなわち、執行権力のない国家など現実には存立しえないが、他方で、法や倫理といった規範を欠いた国家など暴力によって自己崩壊するであろう。それゆえ、「国家理性」は国家生活が直面する現実の状況に応じてクラートスとエートスを操作しなければならぬのである。

福澤の思想を辿るとき、福澤の活動において近代国家の担い手としての「国民」をいかにして創造するかという問題意識が一貫して見出せるように、福澤は単に政府の復古的な施策や政権抗争に起因する強権的政策を批判することに終始したのでもなければ、当時の啓蒙思想家に散見されるようなキリスト教導入や国民道徳による非現実的な近代化論にとどまったのでもなく、現実の国家生活をより良い状態へと導くための合理的かつ現実的な、つまり「国家理性」的な提言が見逃せない。この提言をどのように評価するかが、従来、いわば躑躅の石となり解釈規則が持ち出され、ときに「転向」が語られてきたが、本書は提言こそ、むしろ福澤の思考を貫く要素をなしていることを指摘し、それを（状況的方法）として位置づける。

しかし、この（状況的方法）は政権を維持するための理念を欠いた道具などではなく、自然法的な平等論に代表される「文明」という理念を目的にしている。この理念へと「国民」を導く方法を、本書は（文明論的方法）と呼ぶ。これら二つの方法が連関しつづ福澤の思想を形作ったのであって、その間に決して断絶などないというのが、本書の核心であり、それによって福澤研究の新天地が開かれるのは言うまでもないが、本書の功績はそれにとどまらない。

福澤の「文明」観は単に物質的なものを指すのではなく、名誉などの徳、内面的な規範も含んでいる。当時の国民道徳論はパトリオティズムの観念を受容するのに苦心していたのだが、福澤の場合、儒教的な忠君論に陥ることなく、例えば、「誠」のような特定の徳に議論を限定していること、あるいは徳論がアダム・スミス『国富論』に着想を得ていることなどを踏まえ、公共に奉仕する「智」へと移調したと本書は指摘する。つまり、福澤の徳論は国民道徳論というよりも、文明化された「国民」の教養としての「作法」となる。この「作法」は公的生活での自由の尊重へと連なり、この点では評者にはカント「啓蒙とは何か」が想起され、これまで啓蒙思想家として語られることはあっても、その啓蒙の内実が深く問われることのなかった福澤の啓蒙を、本書が問い直す手がかりとなるのは間違いない。本書が福澤研究のみならず近代日本思想史研究において重要な著作であることは、もはや言うまでもないだろう。

米山俊直 著

評者 末原達郎 (京都大学大学院農学研究科教授)

「日本」とはなにか 文明の時間と文化の時間

人文書館

二〇〇七年四月 二八二頁

定価二、五〇〇円十税



一九七〇年代の教養部には、自由と学問の萌芽があふれていた。文化人類学もその例外ではない。当時の文化人類学は、京都大学の学問の体系の中では、まだしっかりと確立されていたといえなかった。教養部には本書の執筆者である米山俊直氏がただひとりおられ、文化人類学の授業を受け持っておられた。

もちろん、理学部には自然人類学の講座があったし、人文科学研究所には社会人類学の講座があった。人類学全般に関しては、数多くの若い研究者群が、フィールドにでかけており、研究発表を行い、多様な研究会を組織しつつあった。

体系化された組織としては脆弱だが、研究の意気込みや研究分野の広がり、今以上に高く、かつ多様であった。

『日本』とはなにかは、京都大学ではじめて専任教官として文化人類学で講義され、ついで人間・環境学研究科で文化人類学研究の基礎作りをされた米山俊直氏の最終講義を含み、人生を通しての思考の過程を、著作としてまとめたものである。

本書は、『日本』とはなにかを問う際に、まず都市列島であると捉えるところから出発している。かつて『日本のむら百年』で、日本の農村社会のもつ生命

力の強さとその利点を強調していた著者は、今ではもはや日本が実質的に都市列島になった、と宣言する。それは著者が歩み続けてきた道、農村社会と都市社会の拮抗の中に、日本の社会の実像を探ろうとしたさまざまな試みの過程が、最終的に一本化されたことを意味する。

米山氏はもともと農学部に属し、農村社会学や農業経済学を基に、研究を開始された。修士論文や卒業論文は、日本の農村を正面からあつかったものである。しかし、日本の農村をその内部からの視点の分析だけで、終わらせることはなかった。常に、農村の外部から、たとえば奈良県の山間の農村や都市近郊の農村の分析に際しても(『米山俊直の仕事 人、ひとにあう。』むらの未来と世界の未来―)、近接する都市や、遠隔の大都市との関係性の中で農村社会を見る眼があった。あるいは、東北、岩手県の農村を見る場合にも、盛岡市や、はるか東京という大都市と結び合う視点が含まれていた。

米山氏の類まれなこの感性、すなわち地域社会の内部の論理を瞬時にして理解すると同時に、その一方で地域社会の外部からの眼差しとその関係性を見極める的確さは、日本の農村社会とその外部だけの研究にとどまらず、その後、外国の社会の研究や外国からの眼差しを見る場合にも、いかなく発揮された。

本書の中で米山氏は、自分の子供のころからの生活に触れ、父親の出身地である東京の都市的世界と、母親の出身地であり家族が住む奈良の農村的世界の両方に、子供の頃から親しみながら暮らしてきたことについての、いくつかのエピソードを書いている。こうした米山氏の個人的経験が、やがては都市的世界と農村的世界の比較、あるいは東日本と西日本

の比較、さらには日本と世界との比較へと発展していったのではないかと私は考える。

しかし、米山氏の比較の根底には、都市への憧憬が、どこか含まれていたように思う。米山氏は農村的世界に対して暖かい共感を抱いているが、それ以上に、都市に対しては常に強い好奇心を持ち、尽きることがなかった。都市こそ、米山氏を自由にし、新たな思考をめぐらすにふさわしい場所であったのである。米山氏は都市を歩き回り、さまざまなものを発見し、自らの内部と向き合い、思考し、さらに歩んでいった。都市的世界とその風土は、境界的世界を生きる眼をもつ米山氏にそれを許し、その視点を評価してくれる場所でもあった。

本書を貫く、米山氏のフットワークの軽さは、われわれに学問の枠組みを越えて、思考することの本来の楽しさを味わわせてくれる。それは、体系化された学問の中に住み続け、身動きが取れなくなってしまう学問とは別種の、新しい学問が胎動してくる時の面白さである。また、それに参加することの楽しさである。

もちろん現在では、文化人類学はしっかりとした学問体系の中に位置している。京都大学も、その例外ではない。しかし、もし京都の学風というものがあるとすれば、それは既成の学問の体系からさらにはみだして、新しい学問を生み出していくこととするエネルギーであり、古い学問の体系をひっくり返してみようとする、ひそかな志ではないだろうか。

本書を読むと、一九七〇年代の学問におけるあの自由さが、ふっとよみがえってくる。

河崎 靖二 著

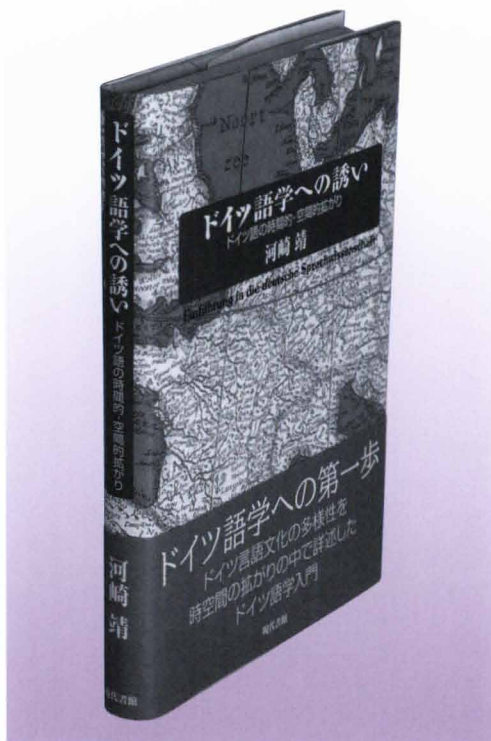
評者・吉村淳一（滋賀県立大学講師）

『ドイツ語学への誘い ドイツ語の時間的・空間的拡がり』

現代書館

二〇〇七年六月 二〇六頁

定価二、四一五円



ことも付け加えておかねばならない。また本書は「ドイツ語学」と銘打ってはいくものの、ドイツ語という個別言語をより広大な視野から相対的に把握するため、その射程はドイツ語学のみならず、ゲルマン語学、さらには印欧語学にまで及んでいる。

1章では、東方植民、印刷技術の革新、宗教改革、ドイツ語とラテン語の関係などが取り上げられている。中世に始まった東方植民によってドイツ各地からさまざまな方言話者が集まり、言語接触の結果、標準ドイツ語文章語の母胎となる東中部ドイツ語が成立する。一六世紀にはこの方言で書かれたルター訳聖書の普及により、標準ドイツ語の成立が加速されていく。このような当時の社会的背景を描きつつ、ルターの生涯にわたる翻訳改訂作業や不倶戴天のライバルとの対立について言及することによって、ルターの人物像を浮かび上がらせる。また、ルターが「ラテン語に依拠したような文構造や官庁語の造語法を安易に採り入れ」ることなく、「明晰でわかりやすい文体にするために民衆が使っている生きた話したことば」にこだわっていたことをルター訳聖書から多くの実例を挙げて丁寧に解説してくれている。

続く三つの章では主として音韻レベルのことが紹介されているが、2章の主な役割としては通時的に音変化を捉えることとであり、3章、4章の役割としてはドイツ語の地域的な多様性を提示することである。実際に、これらの各章では言語資料をもとに初学者にでも理解できるように「ドイツ語の時間的・空間的拡がり」が提示されている。2章において著者はグリム兄弟の言語学者としての実績を紹介し、中高ドイツ語と新高ドイツ語の間に見られる音変化、すなわち長母音の二重母音化、二重母音の長母音化、母音の長音化について簡潔にまとめている。3章では、ドイツ語子音推移や言語島の成立の問題が考察の対象となっており、言語地理学の学説と方言における言語状況に迫っている。また、この章ではドイツ全土の言語地図を発案者として知られるヴェンカーのフィールドワークの手法が取りあげられ、我々は彼が実際に行ったアンケート調査の具体的な内容を知ることができ、4章は低地ドイツ語について割り当てられているが、古低フランク語の『ヴァハテンドンク詩編』と古サクソン語の『ヘーリアント』からの引用をもとに、子音の同化現象について詳細な考察が行われていて必読に値する。

5章では、『ゲルマニア』や『ガリア戦記』をもとにゲルマンの世界を描き出されている。またキリスト教がゲルマン人にどのように受け入れられていったかという経緯などについても触れられている。さらに補章ではレヴィイ・ストロースの神話的思考やミルチア・エリアーデの比較神話学が紹介されて、印欧神話と日本の神話の構造的類似にまで話が至っているのが特徴的である。

ルターが聖書を「民衆のことば」に訳し、誰もが神のことばに触れられるようにしたように、本書はドイツ語学という一つの学問分野に誰もが近づけるようにしてくれている。本書を読み終えた人はさらに詳しく書かれたドイツ語史やドイツ語学関係の書物を手にしたくなることであろう。このような入門書を執筆する場合、初学者だけでなく、専門家が読者のものが要求されることになるが、著者は常に実証的に検証を進める立場を保持して、この課題に応えようとしている。

本書はドイツ語史、音韻論、言語地理学、比較言語学などの専門的な知識、そして文化誌、宗教史、神話学などの周辺の知識を総動員し、ドイツ語を学び始めた人にもドイツ語学とその周辺について理解できるように配慮して書かれている。たとえば、ドイツ語史を記述する場合、時間軸に沿って解説を進めることも可能であるが、著者がルターの時代から記述を始めるのは、ルター訳聖書がドイツ語史の中で果たした役割の大きさを重要視しているばかりでなく、初学者がドイツ語史にアプローチしやすくすることを目指しているからである。その上、著者の

サービス精神から、ドイツ語学を学習する上で必要となる素養を散りばめたコラムが著休めのように挿入されている。ただし、著休めといっても十分に読み応えのあるもので、しっかりと一般言語学の知識が得られる仕組みとなっている。その他に読み物として楽しめるのは著者がドイツ語史やドイツ語学と関連づけながら、歴史、宗教、神話について解説している1章、5章、補章であろう。これらの各章もさることながら、2章から4章までは新しい知見を交えて音韻論や方言学の専門的な話が展開されていて、本書の学術的水準が高いところに確保されている

野島直子 著

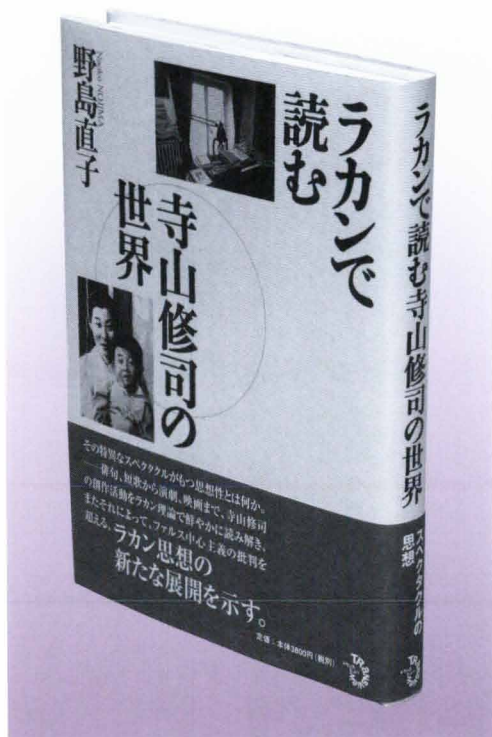
評者・坂部 恵 (東京大学名誉教授)

『ラカンで読む寺山修司の世界』

トランスビュー

二〇〇七年三月 二六六頁

定価三、九九〇円



的・病理学的診断をその創造性とかかわりどころみる類のいわゆる病蹟学的な研究ではない。むしろ、ラカンの精神分析理論は、ここで、寺山の思春期から晩年にいたる一連の仕事と順を追いつたジャンルに応じて、一步一步その有効性の射程を確かめるようにして、慎重につきあわせて吟味され、ついには、寺山の最後の到達点との照応で、現時点におけるラカン研究の最先端と切り結ぶ展望を開くところまでつきつめられる。そこに展開される光景は、したがって、むしろ、著者の見た「たがいに照らしあうラカンと寺山」とでもいった、スリルに富んだ思想の対質と思索の冒険のドラマなのである。

著者は、早くに父を転戦先での戦病死で失い、母は遠く九州に働きに出るといふ「孤児」的な境遇にあつて、いくつもの心的トラウマをかかえた寺山が、中学、高校時代、書くことにその癒しをもとめる意味合いもあつて、句作にはげむあたりから本書第一部の叙述をはじめ。エディプス的な状況から、親友でライバルでもある同性の友人との破壊衝動をも内に秘めた鏡像段階的なかわりを通じての自己形成まで、まさにラカン理論を絵に描いたような生活史の叙述が展開される。これは、対象である寺山にもともとそうした理論との適合性が豊富にあることにもよるだろうが、なかば以上は寺山もラカンも十分咀嚼した上で展望を整理した著者の手柄といつてよいだろう。

の圏域にあまり深く踏み込むことがなかったフロイトの限界をあえて踏み越えるラカンを参照しつつ、神経症―倒錯―精神病という三つの段階、というよりむしろ「位相」に定位して、短歌、演劇、そして青年期の俳句改作が叙述される。ここで中心となるのは、当然二番目の(初期、中期の)演劇であり、とりわけマゾヒズムのもつ共同体批判的あるいは思想的意味に光があてられる。

第三部は、本書中であつてとりわけ白眉をなす部分であるが、ここで、著者は、寺山の自己言及的で批判性の強い映画と後期のいくつかの演劇作品に焦点を当て、アルトーをも参照しつつ、神経症や倒錯よりももうひとつ深い位相である「精神病」的な心の深層とのある時期以後の寺山の密接なかわりに焦点を当てる。この作業にあつて、著者は、従来フェミニズムの立場からファロス中心的、男性中心的として批判を浴びてきたラカン理論の受容が、とりわけ『セミナールXX』の読み直しをとおして修正されつつある近來の動向を丹念に検討しながら、ジェンダーの別を突き抜けた純粋な「享受」の境地が晩年の寺山の作品では達成されていると見定めるのである。

「ますらをぶり」が今なお圧倒的に優位な男社会日本にあつて、むしろ「たをやめぶり」の位相を生きた寺山には、折口信夫の孤高な宮女との繋がりがあつた。『身毒丸』の改作から、説経節、人形浄瑠璃を通して、系譜は中世につながる。ラカンの「シニフィアン」が、アヴィセンナのスコラ的実在論の系譜を引くように。

第II部で、著者は、フロイトが死の衝動とも結びつけた「反復」(強迫)のテーマを全体の導きの糸として、寺山の演劇活動を中心に、成人してからの短歌や俳句とのかかわりの説明をこころみる。

ここでは、神経症を中心に据えて精神病

寺山修司(一九三五―八三)といえば、

何よりも「天井桟敷」を率いる劇作家、演出家であり、一九六〇年代後半からの日本の小劇場運動の代表的なリーダーのひとりとして、本書の著者をほぼ下限とする世代のすくなからぬひとびとの記憶に今なお新しいところである。彼は、また、俳句、和歌、詩、評論をはじめとする文学の領域においても、それまでの風習にとらわれぬ表現で新境地を拓き、さらには、「家出のすすめ」、「書を捨てよ街へ出よう」といったキャッチ・フレーズで若者のアジテータとして人気を集め時代を駆け抜けた風雲児でもあつた。

寺山については、したがって当然これまでにも多くのことが書かれた語られてきた。本書の著者もまた、すでに一〇

年あまり前に「孤児への意志―寺山修司論」を公にしておられるのだが、「天井桟敷」の最終公演の印象に拮抗する寺山の思想の深みに迫るには何らかの理論武装が不可欠と考えて、あらためてフロイト、ラカンの精神分析理論の本格的研究に向かわれた由である。

こうした成立の由来からして、本書は、『ラカンで読む寺山修司の世界』と題されてはいるが、たんにラカンの精神分析理論を寺山の世界に適用して、一種病理

人環図書

— 本研究科教員・出身者の新著より —

常微分方程式

高崎金久編著

日本評論社 二〇〇六年

理工系の学問を学ぶ人にとって、程度の差はあっても、微分方程式に関する知識は必要不可欠である。さらに、近年は理工系以外の分野（社会科学、医学、運動科学など）においても微分方程式の重要性が高まっている。

本書は初めて常微分方程式を学ぶ人のために書かれた入門書である。予備知識としては大学1年で学ぶ程度の微積分学と線形代数を仮定するが、必要に応じて重要事項の復習や補足説明を行っている。1章は導入部であり、応用分野における「数値モデル」としての使い方を例示しながら、微分方程式の方程式としての意味を詳しく説明している。2章から6章までは各種の微分方程式の解法を解説している。2章・3章では求積可能な1階微分方程式を、4章は力学における求積可能な2階微分方程式を、5章・6章は線形微分方程式を扱っている。7章では解法から離れて、解の存在・一意性の定理や相空間上の定性的解析の初歩を紹介している。

本書の最も特色ある部分は2章・4章だろう。従来の入門書ではこの部分の題材（初等解法とも呼ばれる）をさまざまな例の羅列として扱うことが多かったが、本書では「第1積分」の概念に基づいて可能な限り系統的に扱っている。さらに、好奇心旺盛な読者のために、この話題が微分方程式の解法という狭い枠組みを越えた意味をもつことを注意している。

〔A5判 二七六頁〕
定価 二、五〇〇円＋税

ジェンダーで学ぶ宗教学

田中雅一・川橋範子編著

世界思想社 二〇〇七年

本書は、世界思想社の「ジェンダーで学ぶ」シリーズの一冊である。編者たちは、日本の宗教学におけるジェンダー研究の周縁的現状をふまえ、ジェンダー研究や宗教学に初めて触れる人たちだけでなく、宗教研究を専門としている研究者あるいはこれから専門に勉強しようとしている院生たちにも興味をもってもらえるような本作りが目指されている。

本書は、編者によるイントロを含め一五章、六つのコラムからなる。第一部「ジェンダーから見る宗教」では、第一部「キリスト教、イスラーム、ヒンドゥー教、日本の新宗教などが、第二部「宗教におけるジェンダー実践」では、神話、儀式、穢れ、女神信仰などが、ジェンダーの視点から考察されている。第三部は「ジェンダーの宗教学が読み解く現代社会」と題し、生命倫理、スピリチュアルケア、性的マイノリティ、ポストコロニアルな状況でのキリスト教、フェミニズムを核とする仏教団体の改革運動など、これからのジェンダーの宗教学が取りくむ必要のある主題、そして具体的な実践についての熱いメッセージを収めている。

この書物の公刊を契機に、ジェンダーやセクシュアリティの視点から宗教現象を考察する意識が多くの読者に共有されることが期待される。

〔四六判 二八〇頁〕
定価 一、九〇〇円

やめたくてもやめられない
— 依存症の時代 —

片田珠美著

洋泉社 二〇〇七年

依存症が蔓延している。もちろん、覚醒剤や麻薬、大麻などの違法薬物への依存も重大な問題なのだが、より一層深刻なのは、リタリンや抗鬱薬、精神安定剤などのれっきとした医薬品への依存、いわゆる「医薬品のドラッグ化」である。

このように薬物が個人の行為のドーピング剤として用いられるようになりつつある社会状況を、フランスの社会学者アラン・エレンベルグは皮肉をこめて「サイキック・ビル」と評した。これほど現代を象徴する言葉はないのではないか？

なぜ依存症はこんなにも増えたのか？ その原因を分析した結果浮き彫りになったのは、片方の手に自己実現というパイプ、もう一方の手に、消費社会における肥大した欲望を抱えた我々の姿である。規範から解放されて自由になり、「あきらめたかのような幻想を抱いたわけだが、その代償として、「自分はこうありたい」という自己愛的イメージをあきらめきれない人は鬱になり、あきらめを人工的な手段によって回避しようとする人は依存症を背負い込むことになったのである。

こうして際限なく肥大した「薬神話」と自己愛的万能感に警鐘を鳴らすべく、本書は執筆された。常に満たされない不安全感と渴望が影のようについてまわる現代、依存症こそ「時代の病」なのだから。

〔新書 一九二頁〕
定価 八一九円

平安京の住まい

西山良平・藤田勝也編著

京都大学学術出版会 二〇〇七年

本書は平安京の住まいを日本史・建築史・考古学・庭園史の諸分野の共同作業として考察し、それを通して平安京の社会構造の基底を解明する。本書は第一部「平安京の住まいの枠組み」、第二部「町屋」、第三部「王家と貴族の住宅」から成り立つが、それぞれ日本史・建築史・考古学・庭園史の論文から構成され、全体も部分も学際的な組み立てとなっている。

貴族や住人は平安京に「居住」するが、この「居住」は空間的・可視的には「住宅」である。従来、「居住や住宅」は貴族の住宅（寝殿造）と庶民の住宅（町屋）に分別して論じられてきたが、両者をあわせて検討することで、各々の成立に関係性を見出す。また、近年は既知の文献史料に加え、新鮮な発掘事例が多量に蓄積されている。この点に鑑みて、本書ではとくに発掘事例を重点的に取り上げ、それと対照する意味で「住宅」に比重を置く。貴族住宅では齋王邸（右京三条二坊十六町）が寝殿造と異質であり、町屋では右京七条二坊十二町が町屋の景観の早い事例であるが、後者はその存在すら充分に知られていない。かくして、一〇世紀後半から一一世紀初頭に寝殿造と町屋はともに成立し、これに伴い、都市の社会構造や空間配置も大きく転換すると予測する。すなわち、都市の発展の画期を提案する。これからの研究上の指針を示す画期的論集で、各々の分野にとどまらず、広く各分野からの利用・閲覧が期待される。

〔菊判 二七六頁〕
定価 四、〇〇〇円＋税

瓦版

◆“人環”とは？

本雑誌の表題「人環フォーラム」の“人環”は、平成三年四月に新たに開設された「京都大学大学院人間・環境学研究科」の略称です。

◆受賞

ハヤシ・プランアン・マサル（共生文明学専攻准教授）

『Democratizing the Enemy: The Japanese American Internment』（Princeton University Press）

ロバート・G・アテアン賞（Robert G. Ahearn Award, Western History Association）二〇〇六年一〇月

伊從 勉（共生文明学専攻教授）

『琉球祭祀空間の研究―カミヒトの環境学』（中央公論美術出版）

第一一回建築史学会賞 二〇〇七年四月

今田絵理香（共生人間学専攻博士後期課程修了、日本学術振興会特別研究員）

『少女の社会史』（勁草書房）

第三一回日本児童文学会奨励賞 二〇〇七年一〇月

大澤真幸（共生文明学専攻教授）

『ナショナリズムの由来』（講談社）

第六一回毎日出版文化賞（人文・社会部門） 二〇〇七年一月

川北 篤（相関環境学専攻助教）

『カンコノキの絶対送粉共生の起源と進化に関する研究』

第一回種生物学会片岡奨励賞 二〇〇七年二月

山本淳子（平成十一年文化・地域環境学専攻博士後期課程修了、現京都学園大学准教授）

『源氏物語の時代』（朝日新聞社）

二〇〇七年度サントリー学芸賞（芸術・文学部門） 二〇〇七年二月

◆催し物の報告

◇平成一九年度京都大学大学院人間・環境学研究所公開講座

●テーマ 「一〇年後の日本とJAPANのために」

●日時 二〇〇八年二月一九日・二〇日

●場所 京都大学楽友会館

●講演

中嶋節子（人環准教授）「都市における自然景観とは何か―京都の山の歴史から考える」

加藤真（人環教授）「アジアの自然と共生系 夏緑樹林・照葉樹林・雨緑樹林・熱帯雨林」

林達也（人環准教授）「運動不足の長生き時代」

佐伯啓思（人環教授）「一〇年後 世界史の中に漂流する日本？」

大澤真幸（人環教授）「一〇年後の日本」

間宮陽介（人環教授）「市場経済の過去と未来」

●司会・進行 安部浩（人環准教授）／フルート演奏 アンサンブルカラピンカ

◇日韓大学院生交流学術コロキウム

●日時 二〇〇八年二月二一日

●テーマ 「文学・文化から見る日韓の諸相」

●発表 「ゴジラ哀悼―戦後日本の〈わかれ〉と〈やぶれ〉」 小田雄一（京大人環）

「日韓古代語の比較研究」 金泳和（全南大学）

「日本の東北地方とウクライナのカルパティア地方の民話比較」 シガル・オレーナ（京大人環）

「韓国と日本に伝わる「尻ひり嫁」の比較」 金賢娥（全南大学）

「在日コリアンの世代間の摩擦に関して―『由熙』と『GO』から考える世代別関与の相異」 曹ミリ（京大人環）

「『娘分の女』（中野重治）と『薊の章』（李孝石）―女のセクシュアリティの〈他者化〉」 明恵英（全南大学）

●主催 京都大学大学院人間・環境学研究所、全南大学（韓国） 日語日文学科

●日時 二〇〇八年二月二二日

●テーマ 「東アジアの思想と現代」

●発表 「外国人の目から見た韓流」 高星愛（ソウル大学）

「ゴジラ哀悼―戦後日本の〈わかれ〉と〈やぶれ〉」 小田雄一（京大人環）

「朝鮮時代士大夫の政治的地位」 崔天植（ソウル大学）

「分裂としての近代日本のアジア主義」 金仙花（京大人環）

「鄭道伝の排仏論とその批判的教訓」 朱熹璵（ソウル大学）

「氣とブネウマ―史的連関の可能性と研究の現代的意義」 久山雄甫（京大人環）

「宗教経験の疎通可能性の模索 頓悟を中心として」 柳鏞賓（ソウル大学）

「井筒俊彦の「東洋哲学」」 村田稔彦（京大人環）

●主催 京都大学大学院人間・環境学研究所、ソウル大学（韓国） 哲学科

人環フォーラム

第23号予告 HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM NO.23

巻頭言 鳴原真一

対談 湖の文化と砂漠の文化
嘉田由紀子／勝又直也

特集 日本語－その過去と現在と未来と－
内田賢徳／阿辻哲次／甲田直美／チャワリン・スウェタラン 他

表紙写真 ヘルシンキのエスプラナーディ公園にあるLas Matias（ヴェエラス
ケス）の彫像群（撮影 高橋義人 二〇〇七年）
裏表紙写真 オスロ近郊の港（撮影 高橋義人 二〇〇七年）
カット 中国・漢時代の石刻画（張鴻修編著『陝西漢畫』三秦出版社、一九九
四より）
裏表紙背景 宮崎興一名誉教授提供



編集委員会

委員長
副委員長
委員

高橋 山 小橋 加藤 川上 杉山 西村 松間
義直 紀 幹 昭 雅 安 陽 圭
誠人 樹 真 郎 夫 昭 比 介 郎

人環フォーラム 第22号

平成二〇年三月二十八日発行

編集 「人環フォーラム」編集委員会

発行 京都大学大学院人間・環境学研究科

〒606-8501 京都市左京区吉田一木松町

FAX 〇七五-七五三-六六九四

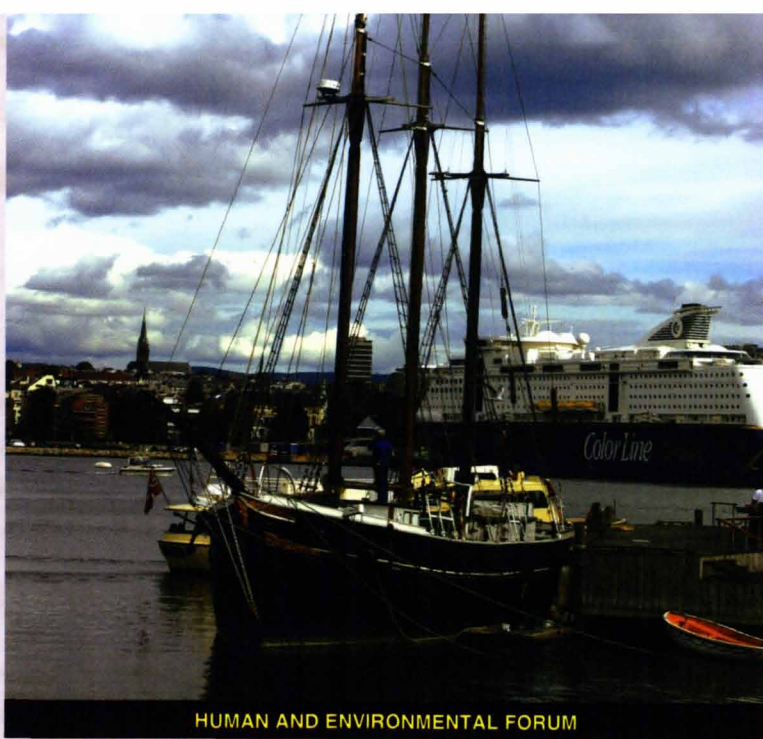
印刷製本 ショウドウ・イープレス株式会社

編集後記

今号の尾池総長とのインタビューのなかに、
かつて湯川秀樹先生が、「浦島太郎の話は物理
学的に成り立つか」というところから講義を
始められたというくだりが出てくる。この話
は相対性理論のなかではすでに有名なものら
しい。浦島太郎をその背中に乗せた亀が光速
に近い速度で飛ぶ宇宙船に、浦島太郎が到着
した龍宮城がどこかの異星に相当するとして
ら、浦島太郎と地球とのあいだで大きな時間
のズレが生じるのは当然のことだという。

メルヘンは非現実的な話を描くが、非現実
的になりすぎると面白くない。「おむすびこ
ろりん」のお爺さんはおむすびを追いかけて
穴のなかに落ちるが、この穴がじつは活断層
の裂け目だと感じる人も、また白雪姫の継母
のように、鏡を見ながら「今日も私はきれい
かしら」と呟いたら、「きれいよ！」と鏡が
返答してくると感じている人もいるかもしれ
ない。メルヘンに描かれている一見すると非
現実的な話が、ひょっとしたら現実にあるう
ることなのだと知ったら、メルヘンはさらに
その魅力を増してくるのではなからうか。

(Y・T)



HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM